

小鶴城跡 ほか

発掘調査報告書

小鶴城跡・洞ノ口遺跡（第8次調査）

北屋敷遺跡（第3次調査）・高田A遺跡（第2・3次調査）

郡山遺跡（第139・141次調査）

富沢館跡・下ノ内浦遺跡（第6次調査）

陸奥国分尼寺跡（第10次調査略報）・富沢遺跡（第121次調査）

2002年 3月

仙台市教育委員会

小鶴城跡 ほか

発掘調査報告書

小鶴城跡・洞ノ口遺跡（第8次調査）

北屋敷遺跡（第3次調査）・高田A遺跡（第2・3次調査）

郡山遺跡（第139・141次調査）

富沢館跡・下ノ内浦遺跡（第6次調査）

陸奥国分尼寺跡（第10次調査略報）・富沢遺跡（第121次調査）

2002年 3月

仙台市教育委員会

序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しましてご理解とご支援をいただき、感謝申し上げます。

仙台市内には約800ヶ所の遺跡が存在し、それらの遺跡にかかわる開発計画などは年間300件近くになります。それらの計画に対しては、それぞれの工事内容に応じて文化財保護法の定めにより、工事立会や発掘調査を実施しているところです。

本書では平成13年度に実施いたしました発掘調査の中から、比較的小規模なもの11件をまとめてご報告しております。

先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私たちにとって大きな責務であると考えております。文化財の保護につきましては、地域の皆様方の深いご理解とご支援が必要であります。その意味でも今回ご報告する内容が、地域の歴史を知る上での貴重な資料となり、学術研究にとどまらず、学校教育や生涯学習の場で大いに活用されることを願っております。

調査並びに本報告書の刊行に際しまして、ご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、深く感謝申し上げます。

平成14年3月

仙台市教育委員会

教育長 阿 部 芳 吉

例　　言

1. 本書は、民間開発事業に関わる小鶴城跡・洞ノ口遺跡（第8次調査）・北屋敷遺跡（第3次調査）・高田A遺跡（第2次調査）・郡山遺跡（第139次調査）・下ノ内浦遺跡（第6次調査）・富沢遺跡（第121次調査）、国土交通省事業に関わる郡山遺跡（第141次調査）、個人専用住宅建設に関わる高田A遺跡・富沢館跡の発掘調査報告書及び、都市計画道路改築に関わる陸奥国分尼寺跡（第10次調査）の発掘調査概要である。
2. 上記の発掘調査は、仙台市教育委員会が主体となり、仙台市教育局生涯学習部文化財課が担当した。
3. 陶磁器の鑑定は、仙台市博物館主査 佐藤洋氏に依頼した。
4. 本調査における出土遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会文化財課で保管しているので活用されたい。

凡　　例

1. 本書中で使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1：2500仙台・仙台北東部の一部および、仙台市が作成した都市計画図の一部を使用している。
2. 本書中の土色の記述は、『新版標準土色帳』（小山・竹原：1973）による。
3. 図中の水系高は、標高である。
4. 図中の方位は、真北である。なお、磁北は真北より $7^{\circ} 20'$ 西偏する。
5. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S B：建物跡 S D：溝跡 S K：土坑 P：ピット・柱穴 S X：性格不明遺構

6. 本書で使用した遺物略号は以下のとおりである。

A：縄文土器 B：弥生土器 C：上師器（ロクロ不使用・・・非ロクロと略称）

D：土師器（ロクロ使用） E：須恵器 I：陶器 J：磁器 K：石器・石製品

L：木製品 N：金属製品 P：土製品 T：赤焼き土器

目 次

1 小鶴城跡	1
2 洞ノ口遺跡（第8次調査）	8
3 北屋敷遺跡（第3次調査）	24
4 (1) 高田A遺跡（第2次調査）	34
(2) 高田A遺跡（第3次調査）	47
5 (1) 郡山遺跡（第139次調査）	52
(2) 郡山遺跡（第141次調査）	56
6 富沢館跡	70
7 下ノ内浦遺跡（第6次調査）	74
8 陸奥国分尼寺跡（第10次調査略報）	84
9 富沢遺跡（第121次調査）	91

引用参考文献

写真図版

報告書抄録

1 小鶴城跡

1 調査要項

遺跡名 小鶴城跡 (011194)	調査期間 平成13年7月23・24日、8月28~30日
調査地点 仙台市宮城野区新田3丁目35-1	調査主体 仙台市教育委員会(文化財課)
調査原因 共同住宅の建設	担当職員 主査 古岡恭平 主事 渡部 紀
調査対象面積 307m ²	教諭 豊村幸宏 文化財教諭 吉田和正
調査面積 99m ²	申請者 佐藤 勉
	調査協力 日本住宅株式会社泉中央支店

2 遺跡の位置と環境(第1図)

小鶴城跡は仙台市の東部、宮城野区新田に所在しており、東仙台駅より900mほど北東の低い丘陵地に位置する。「仙台領古城書上」には、小鶴村の「平小鶴城」として東西60間、南北36間と、小鶴村「風土記」には「古館」として、堅38間、横27間と記録されている。小鶴城の本丸は崖壁とよばれる低地より少し西寄りに当たる「伝上山」というやや高い丘の上にあったと言われている。また、丘陵を取り巻く形に幅5mに及ぶ水濠があったと言われており、その名残が本丸の西側や北側に見られる。(注1・写真20)



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

第2図 調査区の位置 (1/2,500)

3 調査に至る経過と調査方法(第2・3図)

当該地において佐藤勉氏より共同住宅の建築が計画されたため、仙台市教育委員会は申請者と協議のうえ、まず確認調査を行い状況に応じて引き続き調査を行うこととした。調査は、既存建物の解体工程にあわせて2度に分けたものとなった。

前半の調査は、計画建物の東半部に東西に長い4×8mのトレンチを設定した。現地表より約80cm下で溝などの遺構が確認されたため、引き続き調査を行った。

後半の調査は、計画建物の西半部に東西に長い3.5m×10.5mのトレンチを設定した。現地表より約60cm下で再び溝などの遺構が確認されたため、北側に1.5m、東に3m幅で4.5m拡張し、引き続き調査を行った。

4 基本層序（第4図）

基本層序は5層確認した。現地は厚さ70~80cmの盛土がなされている。遺構の検出は、IV層のオリーブ褐色砂質シルト層上面で行ったが、壁面で確認できる遺構の掘り込み面はIII層上面である。

また、東半と西半では基本層の土色が若干異なる。

5 発見遺構と出土遺物

S D 1溝跡（第4・6図）

調査区東側で西側の岸を検出した。現況幅4m、深さ215cmで、方向はN 3° Wである。壁は途中に段をもつ。堆積土は12層に分かれ。1層と5層は基本層ブロックが多く混じっており、人為的に埋められたと考えられる。6層まで埋没した段階で一度整地され、また、溝がほぼ埋まつた段階でさらに整地されたものと推定される。

遺物は、堆積土上層（1~4層）から18世紀後半と考えられる肥前染付皿片と、19世紀頃かと考えられる堤焼鉢片が出土している（第6図1・2）。下層からは遺物は出土していない。

S D 2溝跡（第4・5図）

西半に位置する。SD 3溝跡より新しい。幅6.8m、深さ2.2mで、方向はN 5° Eである。断面形は逆台形で、底面幅は約80cmとせばまる。堆積土は6層に分けられ、自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

S D 3溝跡（第4・5・6図）

SD 2溝跡より古く、SD 5溝跡より新しい。幅100cm、深さ60cmで、方向はW19° Sから曲がり、SD 2に平行する。断面形はV字形で、中央がくぼむ。堆積土は4層に分けられるが、いずれも基本層のブロックが多く混じっており、埋め戻された可能性が高い。1層より砾石が出土している（第6図3）。

S D 4溝跡（第4・5図）

幅120cm、深さ約90cmで、方向はN 17° Wである。断面形はV字形である。堆積土は3層に分けられ、1・2層に基本層のブロックが多く混じっており、埋め戻されている可能性が高い。SD 3溝跡より古くと推定されるが、堆積土の1層とSD 3溝跡の堆積土2層は類似しており、同時期に埋め戻された可能性も考えられる。遺物は出土していない。

S D 5溝跡（第4図）

SE 1井戸跡より新しく、SD 3溝跡より古い。幅90cm、深さは11cmと他に比べ浅く、方向はN 7° Wである。堆積土は1層で、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルトである。

S E 1井戸跡（第4・5図）

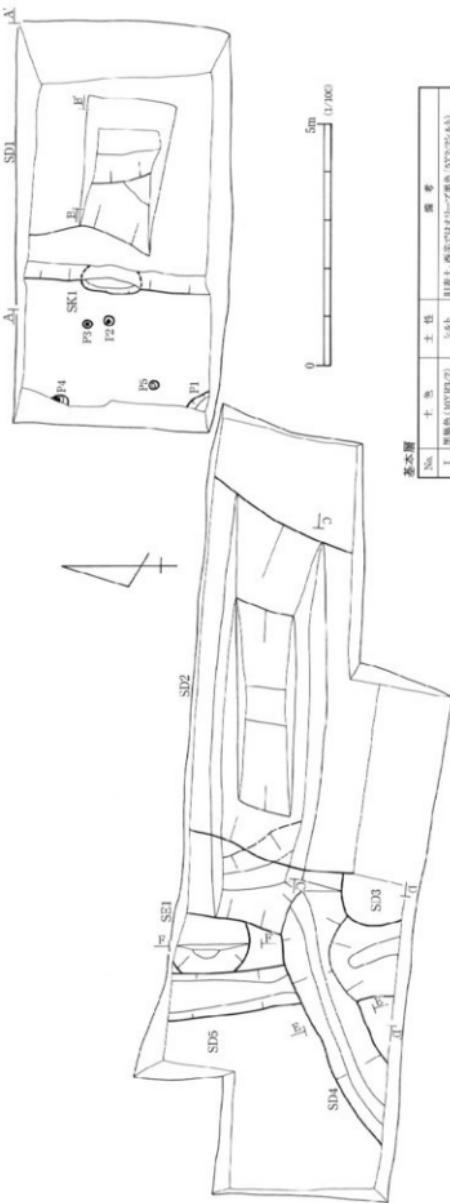
直径は170cm以上の円形で、深さは110cmである。堆積土は4層に分かれ、自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

S K 1土坑（第4・5図）

SD 1溝跡より新しい。長さ120cm、幅55cm以上の楕円形と考えられ、深さは13cmである。堆積土は粘土層の中に炭の屑がはさまる。遺物は出土していない。

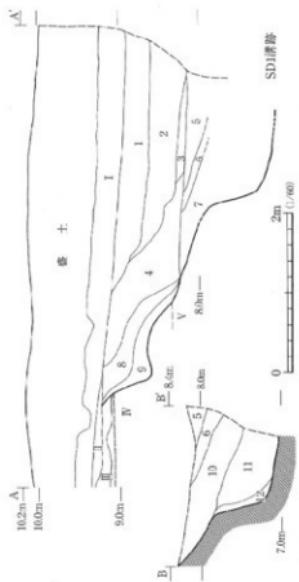


第3図 調査区配置図



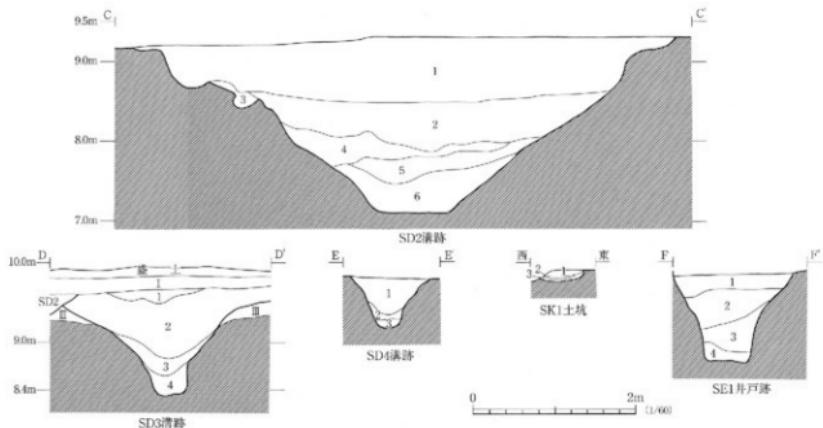
表本圖			
No.	土 性	土 性	備 考
I	黑褐色 (07YR3/2)	1.4m	黒褐色 (Navy Blue) 1.4m
II	黑褐色 (5Y7/3) 2.5m	1.4m	黒褐色 (Navy Blue) 2.5m
III	黒褐色 (07YR3/2)	1.4m	黒褐色 (Navy Blue) 1.4m
IV	黒褐色 (5Y7/3) 4.0m	1.4m	黒褐色 (Navy Blue) 4.0m
V	黒褐色 (5Z5/6) 1.1m	1.1m	黒褐色 (Navy Blue) 1.1m

SD1溝跡			
No.	土 性	土 性	備 考
1	灰色 (10Y7/1)	1.4m	灰褐色 (Greyish Brown) 1.4m
2	灰色 (5Y1/1)	1.4m	灰褐色 (Greyish Brown) 1.4m
3	灰色 (5Y1/1)	1.4m	砂質土 (Sandy Soil)
4	灰色 (5Y1/1)	1.4m	砂質土 (Sandy Soil)
5	褐色 (7Z5/1)	1.4m	褐色土 (Brown Soil)
6	褐褐色 (10Y7/2/3)	1.4m	褐色土 (Brownish Soil)
7	灰色 (5Y1/1)	1.4m	砂質土 (Sandy Soil)
8	灰褐色 (5Y7/3)	1.4m	砂質土 (Sandy Soil)
9	灰褐色 (5Y7/3)	1.4m	砂質土 (Sandy Soil)
10	黃褐色 (5Y4/1)	1.4m	褐色土 (Brown Soil)
11	黑褐色 (5Z5/3/1)	1.4m	褐色土 (Brown Soil)
12	灰褐色 (5Y5/2)	1.4m	褐色土 (Brown Soil)



第4図 通構平断面図

1 小鶴城跡



SD2溝跡

No.	土色	土性	備考
1	黄褐色(23Y5/4)	粘土	粘性あり、しまりややあり、中層に厚さ~10cmの灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
2	灰褐色(73Y4/3)	粘土	粘性あり、しまりややあり、中層に厚さ約5cmの灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
3	灰褐色(10Y5/2)	粘土	粘性あり、しまりややあり、中層に厚さ約5cmの灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
4	オリーブ(30YV4)	粘土	粘性あり、しまりややあり、灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
5	灰褐色(23Y4/1)	粘土	粘性あり、しまりややあり、灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
6	黒褐色(10Y3/2)	粘土	粘性あり、しまりややあり、灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。

SD3溝跡

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10Y3/2)	粘土	粘性あり、しまりややあり、灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
2	黒褐色(10Y3/2)	粘土	粘性あり、しまりややあり、灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
3	灰褐色(10Y3/2)	粘土	粘性あり、しまりややあり、灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。
4	黒褐色(10Y3/2)	粘土	粘性あり、しまりややあり、灰褐色(10YR4/2)土層がありその下がグリーン化している。長片・焼化鉄錠・砂鉄混じる。

SD4溝跡

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10Y3/2)	粘土	灰褐色(23Y4/3)シルト人ブロック多く混じる。
2	灰褐色(10Y3/2)	粘土	ガラス質粘・焼化鉄錠・基本層ブロック混じる。
3	黒褐色(10Y3/2)	粘土	

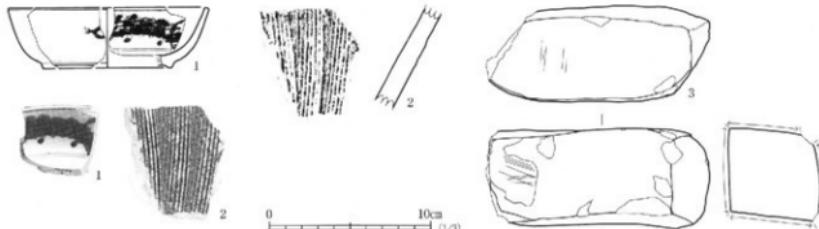
SK1土坑

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10Y3/2)	粘土	しまりなし、オリーブ色(5Y5/4)粘土ブロック少混じる。
2			焼化鉄錠
3	黒褐色(10Y3/2)	粘土	

SE1井戸跡

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10Y3/2)	シルト	灰片・木炭片・骨・ブロックわずかに混じる。
2	黒褐色(10Y3/2)	粘土	しまりなし、基本層ブロックわずかに混じる。
3	黒褐色(10Y3/2)	シルト	下部に基本層ブロック多く混じる。
4	黒褐色(10Y3/2)	粘土	しまりなし。

第5図 遺構断面図



番号	遺構・部位	種別・器種	特徴	高 度	年 代	残 存	法 量(g)			方高比版	登録番号
							L1	底 高	器 高		
1	SD1	油井・甌	泥の軽古	灰褐色	18C後半	CH鉄部1/8	(12.4)	(8.0)	3.85		I-2
2	SD1	攢井	鉄船	灰	19C						I-1
3	SD3-1壁	石		13.8	52	5.5	750			零真図版	K-1

第6図 出土遺物

ピット（第4図）

5基発見された。ピット2・3・4については、柱痕跡が確認できたことから、柱穴と考えられる。ピットからの出土遺物はない。

6 まとめ

今回の調査では、溝跡5条、井戸跡1基、土坑1基、ピット5基が発見された。各遺構の時期決定資料がないことから、明確な所属時期は不明である。検出された溝跡のうち、SD1・2溝跡は、大規模で深いものであることから、小鶴城跡の堀跡の可能性が考えられる。

現況では調査区の東側が小高くなっている（頂部に社あり）、さらに東の丘陵（紫桃氏の著書で本丸とされている地点）との間が堀状にくほんでいる（第7図）。調査の結果、この堀状のくぼみの西側でさらに2条の堀の存在が確認された。ただし、堀の所属時期、および同時期に3条の堀が存在していたかどうかは、調査の過程からは判断し得なかった。

（注1）紫桃正隆（1974）『史料仙台領内古城・館 第四巻』



第7図 堀跡の位置 (1/2,500)



写真1 調査前全景（西より）

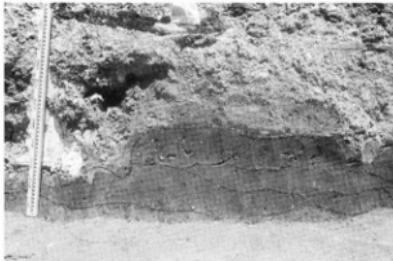


写真2 基本層序



写真3 東部遺構検出状況（東より）



写真4 SD1完掘状況（南東より）

1 小鶴城跡



写真5 SD1完掘状況（南より）



写真6 SD1断面上半（南より）



写真7 SD1断面下半（南より）



写真8 東部西半のピット（北東より）



写真9 ピット4断面（東より）

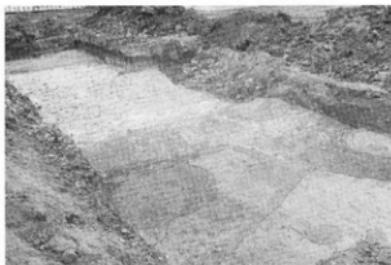


写真10 西部遺構検出状況（北西より）



写真11 西部遺構検出状況（南より）



写真12 西部遺構完掘状況（北西より）



写真13 西部完掘状況（北より）



写真14 西部完掘状況（北東より）



写真15 SE1断面（西より）

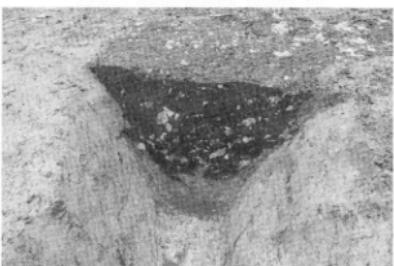


写真16 SD4断面（北より）

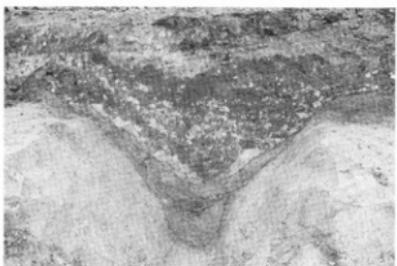


写真17 SD3断面（西より）



写真18 SD2断面（北より）



写真19 SD2完掘（東より）



写真20 堀跡の現況（北より）

2 洞ノ口遺跡（第8次調査）

1 調査要項

遺跡名	洞ノ口遺跡（01372）	調査期間	確認調査 平成13年2月22日
調査地点	仙台市宮城野区岩切字親音前51-1他	本調査	平成13年11月1日～27日
調査原因	宅地造成	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査対象面積	17426m ²	担当職員	主査 吉岡恭平 文化財教諭 吉田和正
調査面積	300m ²	申請者	永野タケ子
		調査協力	大和ハウス工業株式会社仙台支店

2 遺跡の位置と環境

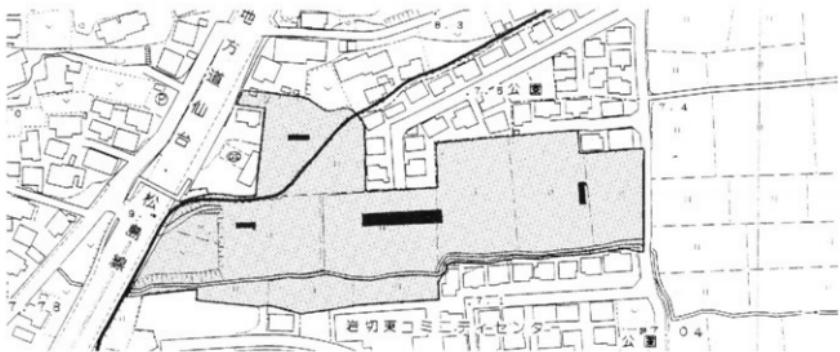
洞ノ口遺跡は仙台市北東部の宮城野区岩切地区に位置し、西辺を県道仙台松島線が通り、南辺には七北田川が流れている。本遺跡は七北田川北岸の自然堤防と後背湿地に立地している。本遺跡の調査は平成4年から始まり、今回の調査が第8次調査となる。現在自然堤防部分は宅地化が進んでおり、後背湿地部分についても、以前は水田が広がっていたが、1次調査以降造成が進み、現在では本調査区を含めたわずかな地域に水田が残るのみである。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

3 調査に至る経過と調査方法

平成12年12月15日付で、当該地における宅地造成および宅地分譲地の地盤改良工事に伴う協議書が提出された。この場所は以前洞ノ口遺跡隣接地であったが、試掘調査を実施した結果水田と判断される層が確認された。そこでこれまでの遺跡範囲を拡大し、当該地を本調査対象とした。平成13年10月5日付で発掘届が提出されたことを受けて、平成13年11月1日より本調査を行った。試掘調査で発見された水田層は、第1次調査、第3次調査で検出された水田層に連続するものと推定されることから、水田層の広がりを確認するため、調査地域内の中央部、東部、西部、北西部にそれぞれ調査区を設定し、順に1区、2区、3区、4区とした。調査区の大きさは、1区が約40m×6m(240m²)、



第2図 調査区の位置 (1/2,500)

2区、3区、4区がそれぞれ約2m×10m（20m²）である。

調査は中世以前の層を対象とした。各調査区ともまず現代の耕作土を重機で除去し、その後、断面観察用と排水用に調査区片側に長軸方向で、幅約1m、深さ約1mの側溝を重機で掘削した。1区は断面観察と試掘調査のデータから重機で4層中まで除去し、その後は人力で水田面、造構面を確認しながら掘り下げた。2区、3区、4区については試掘調査のデータをもとに、中世水田と考えられる層の上面まで重機で掘り下げた。

1区での精査は5層、6層の計2面で実施している。2区、3区、4区は中世面と考えられる1面にとどめ、あとは断面調査のみを行った。

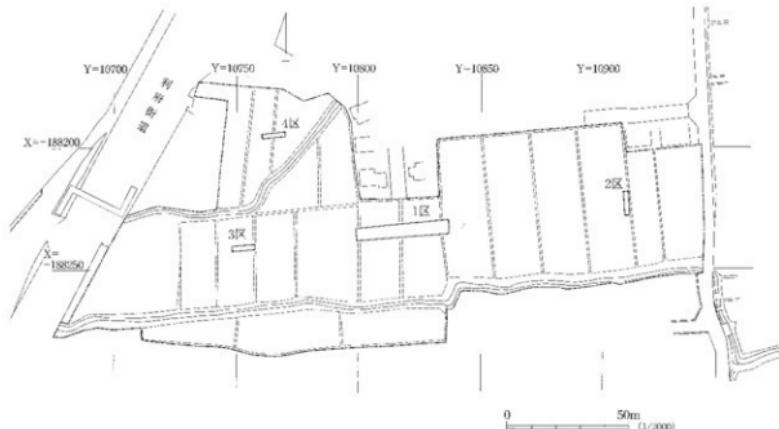
4 基本層序

各調査区とも、現水田耕作土以下、灰色系粘土～粘土質シルト、黒色粘土、グライ化した砂質シルト～細砂となる傾向は共通である。しかし、それぞれ40m～150m離れており、部分的にしか認められない層も存在することから各区の基本層序を明確に対応させるのは困難であったため、各区ごとの層名としている。以下では1区を主に記述し、2～4区は土層注記表を参照されたい。

（1）1区

1層から5層までは、層の下面の乱れが顕著であり、下層の巻き上げも認められるという特徴から、水田耕作土と判断された。6層はa,b,cに分層したが、必ずしも層の上下関係を示したものではない。6a層は緩やかな下面の起伏があること、畦畔状高まりが認められることなどから水田耕作土の可能性があると考えられたため、プランクトン・オバール分析を行った。その結果、高密度の数値が得られたことから、水田耕作土と考えられた。7層以下は自然堆積層である。なお、4層は非常に粘性の強い層で、各区に認められ、対応関係の難層となった。

- 1 層 10YR4/1褐色灰黄色土質シルト。厚さは20cm前後で下部に酸化鉄が集積する。現代の水田耕作土である。
- 2 層 25Y4/1黄灰色粘土質シルト。厚さは～6cmと薄く部分的に1層に壊されている。上部には酸化鉄が集積し、マンガン粒を多く含み、砂粒をやや含む。下面に緩やかな起伏がある。
- 3 層 25Y5/2暗灰黄色粘土。厚さは6～10cmで粘性がある。
- 4 層 25Y5/2暗灰黄色粘土。3層よりやや暗く粘性がかなりあり、しまりはない。厚さは20～26cmで管状酸化鉄がやや多く下面の凹凸も顕著である。



第3図 調査区配置図

2 洞ノ口遺跡（第8次調査）

- 5 層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土。厚さは30~40cmで管状酸化鉄がやや多く、下面の凹凸も顕著である。
- 6 a 層 2.5Y3/1黒褐色粘土。厚さは10cm前後で下面に緩やかな起伏がある。
- 6 b 層 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト。6 a層に類似し、土色はやや明るく管状酸化鉄を多量に含む。この部分にのみ存在する。
- 6 c 層 2.5Y2/1黒色粘土、5GY4/1暗オリーブ灰粘土質シルトの互層。自然堆積層でこの部分にのみ存在する。6 a層の擬似畦畔の可能性が考えられる。
- 7 層 2.5Y2/1黒色粘土。厚さは30~40cmで自然堆積層である。10YR4/2オリーブ灰色の薄い粘土層を数枚含んでいる。
- 8 層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂。自然堆積層でやや粘性がある。

(2) 2区

1層から10層まで確認した。1層から7層までは層の特徴から水田耕作土と判断された。8層については水田耕作土の可能性が考えられたため、プラント・オパール分析を行い、その結果から水田耕作土と判断された。1区との対応関係については、3層が1区4層、4・5層が1区5層、7層が1区6層に対応する。

(3) 3区

1層から8層まで確認した。1層から5層までは層の特徴から水田耕作土と判断され、6層が水田耕作土の可能性がある。3層から8層はSD2を挟んで西側に層を厚くしながら傾斜する。とくに8層は大きく傾斜し7層が西側のみに厚く堆積することから、下位に大きな自然流路の存在が予想された。4層が1区4層、5層が1区5層、6層が1区6a・7層、8層が1区8層に対応する。

(4) 4区

1層から8層まで確認した。1層から4層は層の特徴から水田耕作土と判断され、5層が水田耕作土の可能性がある。3層は1区4層、4層は1区5層、5層は1区6a層、8層が1区8層に対応する。また、7層が3区7層と類似しレンズ状に厚く堆積することから、3区から連続する自然流路が下位に存在すると考えられる。

5 発見された遺構と遺物

平面的に精査した1区および平面プランを確認した3区・4区の遺構についてのみ記述する。また1区では今回調査対象とした5層、6層についてのみ記述する。

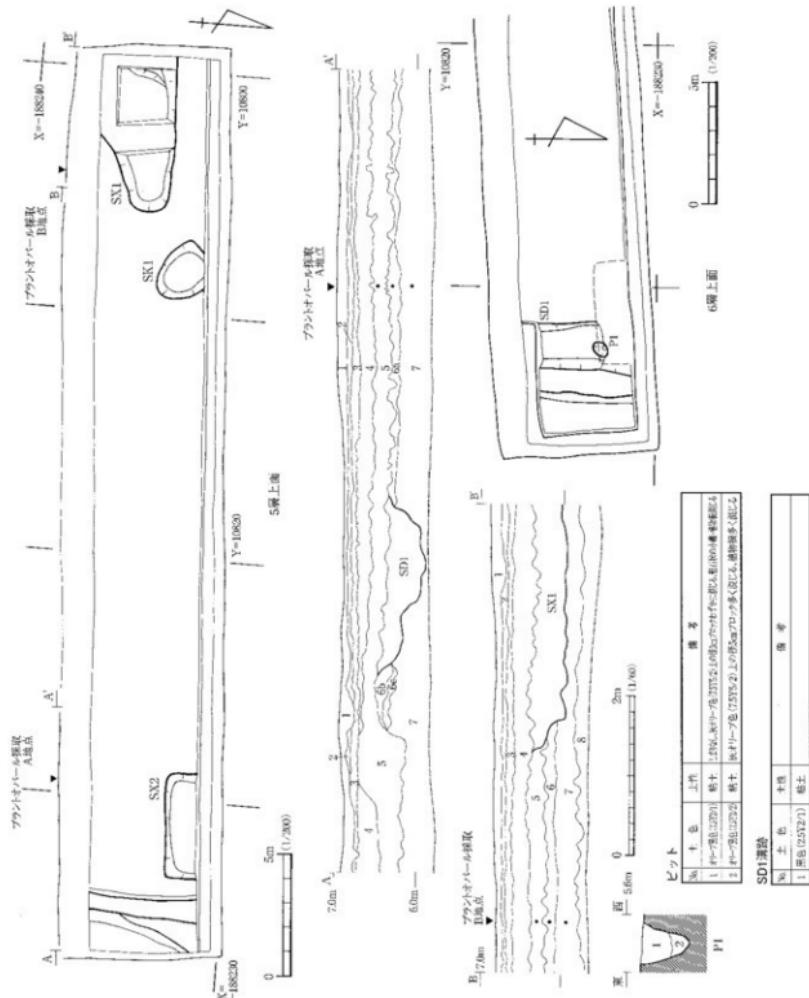
(1) 1区

5層検出遺構

畦畔状高まりを1条、かなり大規模な土坑状の遺構を2基、さらに土坑1基を検出した。

水田跡 畦畔状高まりは調査区東端部で検出された。ほぼ現代水田の畦畔の位置と一致し、方向はN2° E、幅75~90cm、比高差は5cm前後である。東側が4層での耕作により深く攪拌されていることや、高まりの上面に4層があまり存在しないことから、この畦畔状の高まりは4層水田跡の擬似畦畔の可能性が考えられる。

SX1 性格不明遺構 調査区南西端に位置し、他の遺構との重複はない。調査区南端と側溝にかかっていることから平面形を推測することは難しく、検出部分においても不整形である。規模は、長軸6m以上、短軸4m以上である。深さは約1mで底面はほぼ平坦であるが、一部で15cm前後の段差を検出した。また、底面周縁から朽木が出土している。堆積土1層は人為堆積土であり、上部15cm内に酸化鉄が集積する。掘り込み層については明確にはわからないものの、基本層4層に極めて類似したブロックが堆積土1層に見られることから、基本層4層中のものと考えられる。上器等の出土遺物はない。



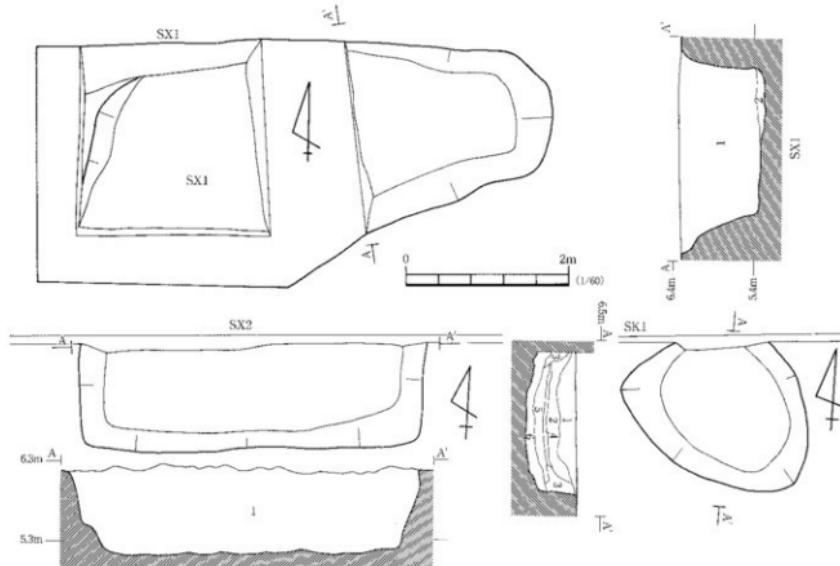
第4図 1区 平断面図

SX2 性格不明遺構 調査区東部に位置し、調査区北端にかかっている。平面形は方形と考えられ、規模は長軸4.3m、短軸1.4m以上である。深さは約1mで底面はほぼ平坦である。堆積土は人為堆積土であり、SX1の堆積土と共通する。出土遺物はない。

SK1 土坑 調査区北東に位置し、調査区北端にかかっている。他の遺構との重複はない。平面形はほぼ橢円形と推定され、規模は、長軸2.2m、短軸1.9m、深さ60cmである。底面はほぼ平坦である。堆積土1層は人為堆積土と考えられ、堆積土3層を除く2層から6層までは粘性はあるが、しまりがなくレンズ状に堆積する。出土遺物はない。土坑の性格を考えるために寄生虫卵分析を行ったが、肥溜め等の結果は得られなかった。

6 層検出遺構

6層では東端部で、畦畔状の高まりを1条、溝を1条、ピット1基を検出した。畦畔状の高まりは、5層畦畔の西側に沿う形で確認され、方向は5層畦畔とはほかわらないN 3° Eで、幅は約80cmである。また、西側にはSD-1が沿うように南北にはしる。畦畔状の高まりがあること、また、プラントオバール分析の結果から、6a層は水田跡と考えられる。



SX1 性格不明遺構

No.	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/1)	粘土 砂5~15cmブロック 黑色(2.5Y2/1) 粘土 砂7~10cmブロック 白色(8Y4/1) 粘土	底状混在、しまりなし
2	中棕に褐灰色(10YR4/1) 粘土多く混じる、上部に厚15cm軟化鉄朱緋 褐色(10YR4/1) 粘土	しまりなし、黑色(2.5Y2/1) 粘土の砂2~3cmブロック少しある	
3	褐色(10YR4/1) 粘土		

SX2性格不明遺構

No.	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/1)	粘土 砂5~15cmブロック 黑色(2.5Y2/1) 粘土 砂7~10cmブロック	底状混在、しまりなし
2	中棕に褐灰色(10YR4/1) 粘土多く混じる、上部に厚15cm軟化鉄朱緋 褐色(10YR4/1) 粘土	しまりなし	
3	褐色(10YR4/1) 粘土		

SK1 土坑

No.	土色	土性	備考
1	黒色(5Y4/1)	粘土 砂少、栗色(10Y7/1) 粘土ブロック多く混じる、浅黄色(10Y7/1) 粘土の砂15cmブロック	
2	灰褐色(7.5Y4/1)	粘土 しまりなし	
3	黒色(5Y4/1)	粘土 砂少、栗色(10Y7/1) 粘土少、灰褐色(10Y7/1) 粘土少、白色(10Y7/1) 粘土少	
4	白-灰褐色(5Y3/2)	粘土 しまりなし	
5	白-灰褐色(5Y3/2)	粘土 しまりなし	
6	黒色(2.5Y2/1)	粘土 しまりやあり、オリーブ灰色(10Y3/2) 粘土の砂3~5cmブロック後じる	

第5図 1区 遺構 平面図

SD1溝跡 調査区東部に位置し、方向はN 3° E ではほぼ真北である。調査区外に延びており、検出されたのはその一部である。上幅は1.9m、底面幅は1.1~1.4mである。深さは南壁断面で40~50cmである。南壁断面ではこの溝の中に段差がみとめられるが、検出段階では確認できなかった。堆積土は1層で、6a・7層に類似している。SX2と重複関係にあり、SX2に切られる。

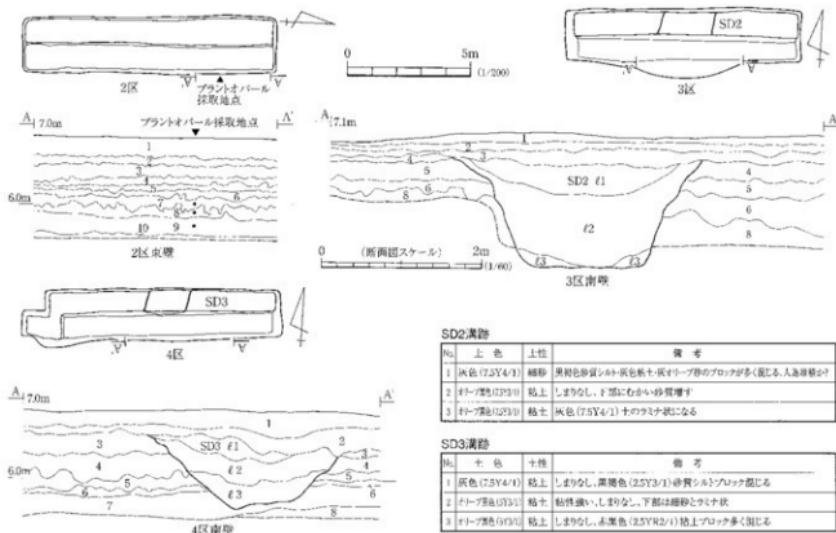
ピット1 調査区北部SD1底面で検出した。SD1・SX2と重複関係にあり、SX2より古い。

上幅で直径が約50cm、下幅の直径が10cm、深さが58cmである。堆積土は2層に分かれ、上層はSD1と同じである。

出土遺物はなく、年代は不明であるが、堆積土の状況からSD1とはほぼ同時期と考えられる。

出土遺物

出土遺物は、すべて基本層中から出土しており、遺構の年代を特定するものはない。基本層4層中から白石窯系の中世陶器片が1点出土した。鉢の底部と推定される。年代は13世紀後半から14世紀前半と考えられるが詳細は不明である。5層中からは須恵器の壺の底部が出土した。6層中からは内面が黒色処理された土師器壺の底部が1点出土した。



第6図 2・3・4区 平断面図

2 洞ノ口遺跡（第8次調査）

(2) 3・4区

3区、4区とともに断面調査のため、発見遺構は平面でのプランのみを確認し、完掘はしていない。いずれの調査区でも溝を1条ずつ検出した。遺構に関わる遺物は出土していない。

SD2溝跡 3区中央部で検出した。方向はN27°Eで調査区外に続いている。

上幅は2.2m、下幅は1.3m、深さは約1.2mである。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれいすれも自然堆積層と考えられる。

SD3溝跡 3区中央部で検出した。N15°Eで調査区外に続いている。上幅は1.5m、下幅は約0.8m、深さは約0.9mである。堆積土は3層に分かれいすれも自然堆積層と考えられる。

6 まとめ

1 各区で水田耕作土が重層的に確認された。1区では2~6a層の5期、2区では2~8層の7期、3区では~5層の4期、4区では2~4層の3期である。また、3区6層、4区5層も水田耕作土の可能性があり、ともに1区6a層、2区7層に対応することからその蓋然性が高いと考えられる。

2 各区の層の対応および3次調査区との対応、時期をまとめたのが以下の表である。

1区	2区	3区	4区	3次調査	時期	層の特徴
4層水田	3層水田	4層水田	3層水田	Ⅳ層	中世	灰色粘土系で粘性が強め
	4層水田					
5層水田	5~6層水田	5層水田	4層水田	Ⅴ層	中世~古代	
6a層水田	7層水田	6層水田?	5層水田?	V層	古代	黒色系粘土
	8層水田					
7層	9層	7層	7層	遺層		自然堆積層、互層
8層	10層	8層	8層	Ⅵ層		グライ化した砂質土

3 1区では畦畔状遺構を5層上面と6a層上面で検出したが、前者は4層に伴う擬似畦畔で、後者は6a層水田に伴うものと考えられる。また、6a層で検出したSD1は堆積土が6a・7層に類似していることから、流路というよりも畦畔に沿って深く耕作された溝状の痕跡である可能性が考えられる。

4 1区5層上面で検出したSX1、SX2については水田に関係する遺構であると考えられるが、機能については不明である。1次調査でも大規模な土坑状の遺構が発見されているので、1次調査の調査成果をも含めた検討が今後必要と考える。

5 3区、4区で検出されたSD2、SD3は方向、形状、堆積土の状況を対比すると同一の遺構である可能性がある。1区の4層に対応する層が検出面となることから、中世以降の年代が想定される。下位に自然流路があることから、流路の出来やすい地形を利用した、水田耕作に関わる溝跡の可能性が考えられよう。

参考

仙台市文化財調査報告書第253集（2001）「洞ノ口遺跡（第3次調査）」「八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書」仙台市教育委員会

番号	遺構・層位	種別	外 面	内 面	残 有	底 面 (cm)			写真図版	登録番号
						口 径	底 径	器 高		
1	1区・5層	頭部器形	ロクロナデ、目形余切刃	ロクロナデ、目形余切刃	直縁:1/8		(8)		K-2	
2	1K・5層	土炒器形	ロクロナデ、目形余切刃	ヘラミガタ、黑色丸溝	直縁:定形		58		D-1	
3	1区・5層	赤陶土器形	ロクロナデ	ロクロナデ					T-1	
番号	遺構・層位	種別	特 徴	產 地	年 代	残 有	底 面 (cm)			写真図版
4	1K・4層	無地陶器(縦?)形	内面荒れており、一部にスリ面がみられる	白石廻点	13C後半～14C前半					I-2
5	4区5層	無地陶器形		在地	中世					I-2

第7図 出土遺物

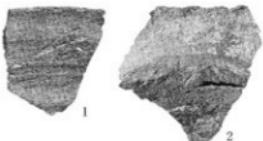


写真1 出土遺物



写真2 調査区全景（東より）



写真3 1区 5層上面全景（西より）

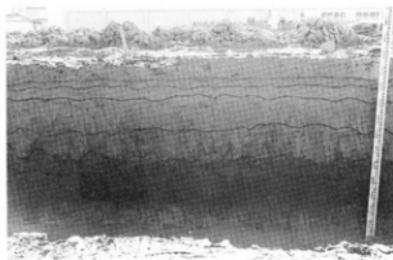


写真4 1区 基本層序（北より）

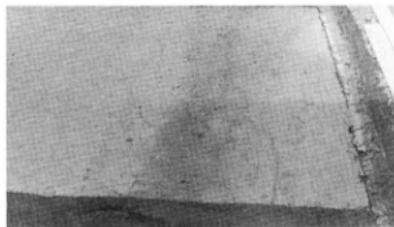


写真5 1区 5層畦畔確認状況（南より）

2 洞ノ口遺跡（第8次調査）

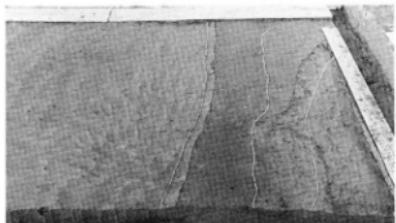


写真6 1区5層上面検出状況 (南より)

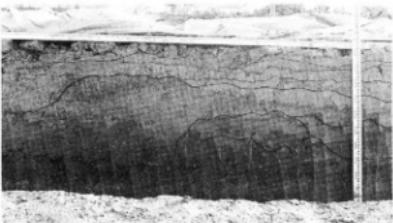


写真7 1区南壁断面 (畦畔部分)



写真8 1区SX1完掘状況 (西より)

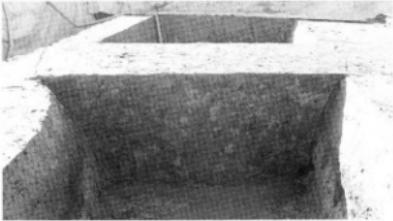


写真9 1区SX1断面 (東より)



写真10 1区SX2完掘状況 (西より)



写真11 1区SX2断面 (南西より)

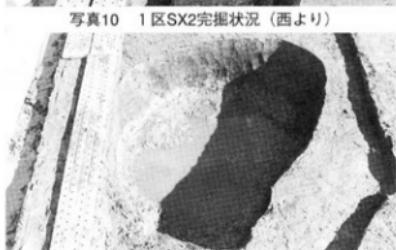


写真12 1区SK1完掘状況 (西より)

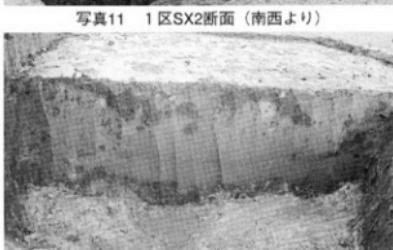


写真13 1区SK1断面 (西より)



写真14 1区SD1完掘状況 (北西より)

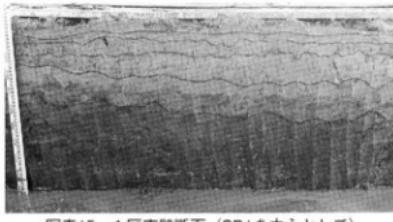


写真15 1区南壁断面 (SD1を中心として)



写真16 ピット1 断面

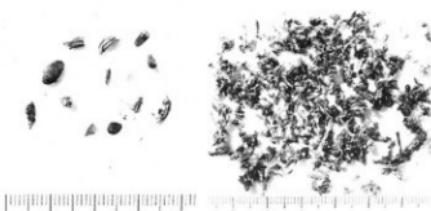


写真17・18 1区SX1出品の粉殻



写真19 2区調査区全景 (南西より)

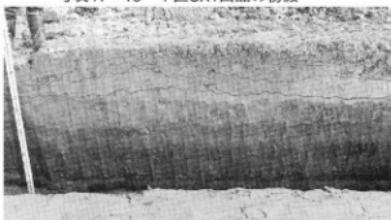


写真20 2区基本層序 (西より)



写真21 3区調査区全景 (南西より)

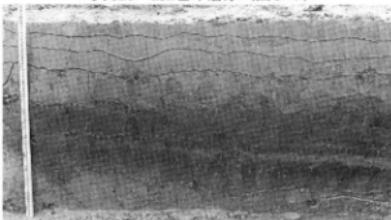


写真22 3区基本層序 (北より)



写真23 3区南壁断面 (SD2を中心として)



写真24 4区調査区全景 (南西より)

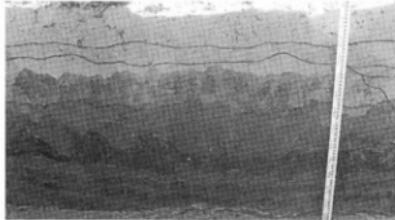


写真25 4区基本層序 (北より)

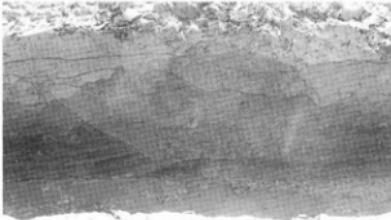


写真26 4区南壁断面 (SD3を中心として)

洞ノ口遺跡第8次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

洞ノ口遺跡第8次調査の発掘調査では、複数の土層で水田耕作土が検出され、さらに水田耕作土とみられる上層も認められた。そこで、これらの層における稻作の検証および稻作の可能性を検討するために、プラント・オパール分析を行うことになった。

2 試料

調査地点は、1区南壁東側のA地点と同西側のB地点、2区東壁北側の3地点である。分析試料は、1区ではA、B両地点とも上位より暗灰黄色粘土（5層、水田耕作土）、黒褐色粘土（6a層）、黒色粘土（7層）において、2区では上位より黒色粘土（7層、水田耕作土）、黒色粘土（8層）、黒色粘土（9層）において各層1点ずつの計9点が採取された。

3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。すなわち、1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）、2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピースを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）、3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理、4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散、5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去、6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成、7) 検鏡・計数の順である。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48およびクマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1～3に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

5 察考

水田耕作土である1区A地点の5層と同B地点の5層および2区の7層では、それぞれの試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。プラント・オパール密度は3,900～7,200個/gであり、稻作跡の検証や探査を行う

際の判断基準値である3,000個/gを上まわっている。したがって、これらの層については稲作が行われていた可能性が高いと考えられ、プラント・オパール分析からも1区の5層と2区の7層が水田耕作土であったと判断される。また、水田耕作土の可能性が考えられていた1区の6a層と2区の8層でも、それぞれイネのプラント・オパールが基準値の3,000個/gを上まわる密度で検出されている。とくに1区A地点では12,600個/gの高密度である。こうしたことから、1区の6a層と2区の8層についても水田耕作土である可能性が高いと判断される。なお、1区A地点の7層からもイネのプラント・オパールが検出されているが、密度は600個/gと非常に低いことから、これについては上層からの混入と考えられる。

なお、おもな分類群の推定生産量（図の右側）をみると、分析を行った各層はいずれもヨシ属が卓越していることがわかる。したがって、これらの層では調査区周辺はヨシなどの繁茂する湿地であったと推定される。なお、ヨシ属以外にもススキ属、ネザサ節型およびクマザサ属型が多くはないが各層で検出されている。これらは概ね乾いた環境を好みことから、それぞれの堆積時に調査区周辺の乾いた所（たとえば高地等）にススキ属やササ類が生育していたと推定される。

6まとめ

洞ノ口遺跡第8次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、水田耕作土とされた1区の5層と2区の7層では、いずれも調査地点において稲作が行われていたと判断され、分析的にも両層が水田跡であることが確認された。また、1区の6a層と2区の8層についても水田耕作土である可能性が高いと判断された。

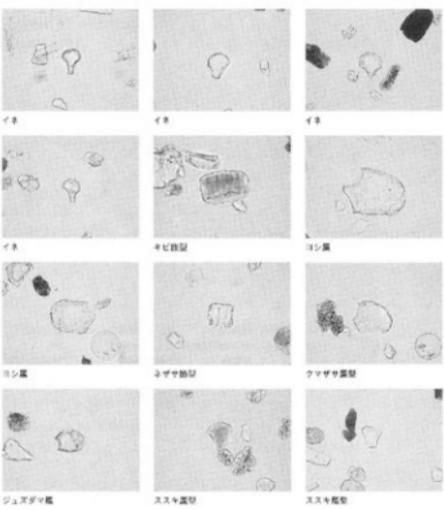
文献

- 杉山真二（1987）タケア科植物の微動細胞珪酸体、富士竹類植物圖報告、第31号、p.70-83。
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、
 考古学と自然科学、9、p.15-29。
 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-、
 考古学と自然科学、17、p.73-85。

表1 仙台市、洞の口遺跡第8次調査のプラント・オパール分析結果

検出割合（率）	地名	1区A		1区B		2区			
		5	6a	7	5	6a	7	8	9
<i>イネ科</i>									
<i>Oryza sativa</i> (Oryza type)		60	120	47	72	60		20	35
<i>Echinochloa</i> type									
<i>コシヒカリ</i>		24	40	32	43	65	62	45	26
<i>ススキ葉型</i>		5	9		6	18	27	11	5
<i>チモ子葉型</i>									
<i>Pennisetum</i> var. <i>Nigra</i> type		62	44	30	42	42	67	128	65
<i>ツバキ葉型</i>		20	35	22	42	24	80	34	15
<i>小穂形</i>		6	11		6	7	21	5	
<i>玄令葉</i>		102	110	98	179	227	267	210	261
プラント・オパール総計		368	600	294	920	424	567	405	442

おもな分類群の推定生産量（率）	イネ科	イヌ科	ニンジン科	ススキ属	ネザサ節型	クマザサ属		
<i>Oryza sativa</i> (Oryza type)	1,777.371	5.12	2.71	7.6	1.15	1.03		
<i>Echinochloa</i> type		0.46						
<i>Pennisetum</i> (red)	1,524.15	8.44	3.77	3.77	6.31	2.69	4.12	1.59
<i>ススキ葉型</i>	0.67	0.07	0.07	0.07	0.33	0.14	0.06	0.29
<i>Pennisetum</i> var. <i>Nigra</i> type	0.039	0.21	0.17	0.03	0.50	0.09	0.31	0.29
<i>Sasa</i> (recent) <i>Mikadoana</i> type	0.07	0.25	0.09	0.31	0.18	0.60	0.26	0.11



プラント・オパールの調査用鏡

2 洞ノ口遺跡（第8次調査）

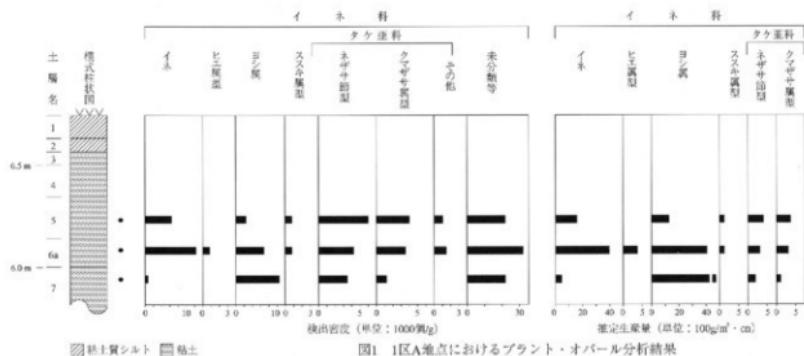


図1 1区A地点におけるプラント・オバール分析結果

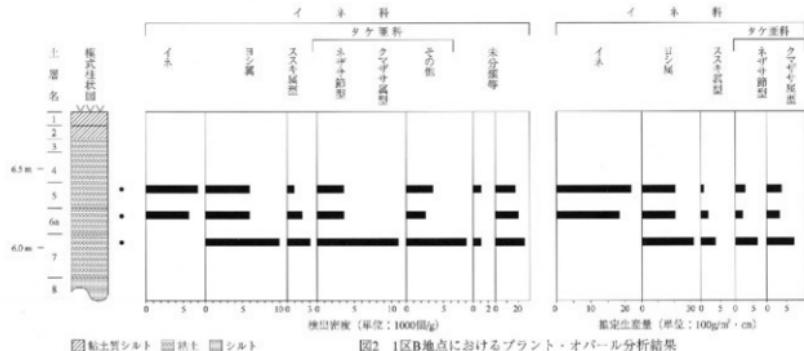


図2 1区B地点におけるプラント・オバール分析結果

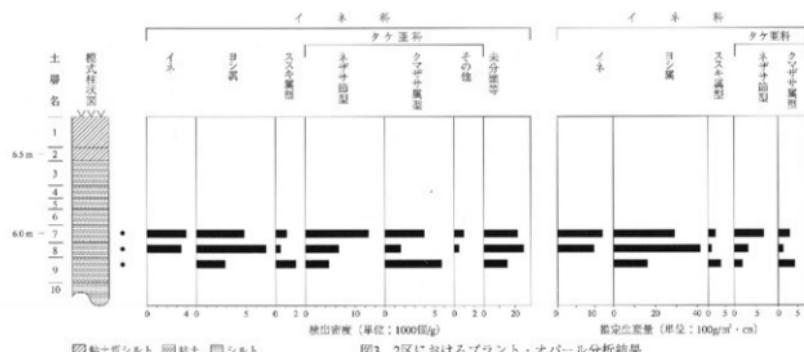


図3 2区におけるプラント・オバール分析結果

洞ノ口遺跡第8次調査における寄生虫卵分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。なお、この分野の研究歴はまだ浅く分析例は少ない。

2 試料

試料は、1区において検出されたSK1の堆積物で、上位より1層、2層、4層、5層、6層より採取された5点である。

3 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え搅拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25% フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを二分する。
- 6) 二分したサンプルの一方にアセトトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 檢鏡はプレバラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行う。

以上の物理・化学的各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

4 所見

下位の6層からは寄生虫卵がないし明らかな消化残渣は検出されなかったが、1層~5層では回虫卵、鞭虫卵が検出され、さらに5層では肝吸虫卵が出現した。いずれの試料も寄生虫卵密度は低いものの花粉密度は比較的高いため、寄生虫卵が分解されるような環境であったとは考えにくい。このことから、SK1がいわゆる肥満であった可能性については、積極的に肯定することはできない。調査地は、周辺の人為環境からの汚染を若干受けていたものと推定される。

参考文献

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫、藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－、奈良国立文化財研究所, p.14-15.
 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物、医動物学、新版臨床検査講座、8、医商出版, p.9-55.
 金原正明 (1999) 寄生虫、考古学と動物学、考古学と自然科学、2、同成社, p.151-158.

2 洞ノ口遺跡（第8次調査）

表1 洞ノ口遺跡第8次調査における寄生虫卵・花粉ダイヤグラム

学名	種名	分類群					
		1月	2月	4月	5月	6月	
Hedera helix	ヘレーハリ	1	1	2	2		
Aceria	アセリア	1	1	1	4		
Trichosia	トリチオシア	4	2	11	4		
Climachis annae	クライマチス			1			
Total		5	2	12	7	0	
試料中の新生態度		3.0	1.8	7.8	4.2	0.0	
$\times 10^{-3}$		$\times 10$					
平均化した地図		(—)	(—)	(—)	(—)	(—)	
Adenal pollen							
Adonis	アドニス	2	2	1	1		
Troapa	トローパ					1	
Pinus sylvestris, Dodecaphyllum	ピラミッド松	10	2	11	7	11	
Quercus ilex	クルセイ	4	15	13	12	4	
Solidago canadensis	コウモリソウ	1					
Teucrium-Chelidonium-Caprifolium	イオイバヒュヤクレバノキ	2	2			2	
Agrostis	アグロス	1	1	2	1		
Paracoumoa angustifolia	ガブリエラ	1	2	3	5		
Adonis	アドニス	3	2	13	4	7	
Reutealis	ルバヌス	2	4	6	1	3	
Corylus	ハシバミ						
Coronilla-Ostrya japonica	タツミノキ	4	4	4	2	3	
Cassia tora	カシア	5	2	2	2		
Cistus	システィン	1	1	1	1		
Fragaria	フジイチゴ	6	13	19	11	7	
Quercus infectoria, Lestertia latifolia	コラマツ	20	26	35	22	31	
Quercus ilex, Cichorium	クルセイ	4	12	17	17	17	
Glechoma hederacea	クレモナ	2	2	3	2	3	
Cette Aphanius sprengeri	ニノマツヒムクノ	1	4	2	2	2	
Anthrax tuberculatus	ミチヅル						
Franseria	アラシ	1					
Scrophulariaceae	ニコトコ	1					
Artemisia-Nierembergia	アーテミシア	6					
Moraceae-Urticaceae	モクナゲ	4	13	9	12	6	
Ligustrum	リグスター			1	1		
Urtica	ウツボグサ						
Nonarboreal pollen							
Tilia-Apricotina	モクナゲ	2					
Carpinus (Fagus)	カシ	1	1	4	2		
Crataegus	カタツムリ	2	2	6	4		
Quercus ilex	クルセイ	140	169	161	169	118	
Ostrya tenuissima	イヌクシ	17	29	41	32	19	
Carpinus-Aphanius sprengeri	カシクシ	69	94	78	98	76	
Franseria	アラシ						
Andromeda-Jetsuk	イヌクシ	1					
Monocots	ミズアオイ科	3	4	1	6	1	
Polygonaceae sect. Persicariae	モクナゲ	4	4	4	2		
Rubus	モモ	1	1	2			
Fragaria	ソバク	1	1	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザヒユ	1	2	3	2	2	
Caryophyllaceae	アシショウ	1		1	1	1	
Boraginaceae	モクナゲ						
Crotonaceae	ミツラキ	5	4	4	4		
Ajania	セツモ	5	2	2	2	5	
Valerianaceae	ミオシナ	1					
Lamioideae	アザミ						
Antennaria	アザミ	2	3	4	3		
Knautia	ナツツノコ						
Artemisia	セイヨウヨモギ	19	17	29	45		
Res spore	シダ						
Macrorhynchus spore	モクナゲ	5	5	2	2	7	
Trilete type spore	三面鏡形	1	7	1	2	2	
Adenal pollen							
Adenal-Nierembergia	モクナゲ	62	103	128	84	99	
Adenal	モクナゲ	4	13	11	11	6	
Nierembergia	モクナゲ	205	235	254	270		
Total pollen		333	433	473	451	383	
試料中の花粉度		2.4	4.6	3.8	3.6	9.0	
$\times 10^{-3}$		$\times 10$					
Unknown pollen	未同定花粉	2	2	2	3	4	
Res spore	シダ花粉	6	12	3	4	9	

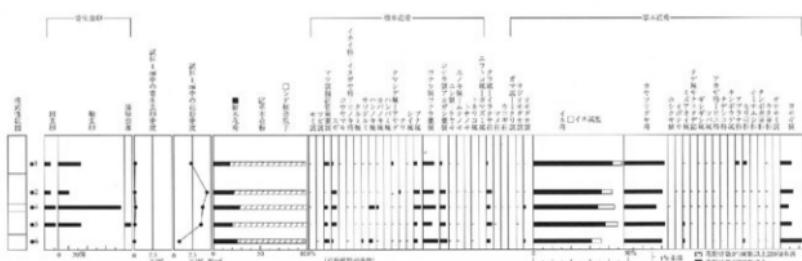
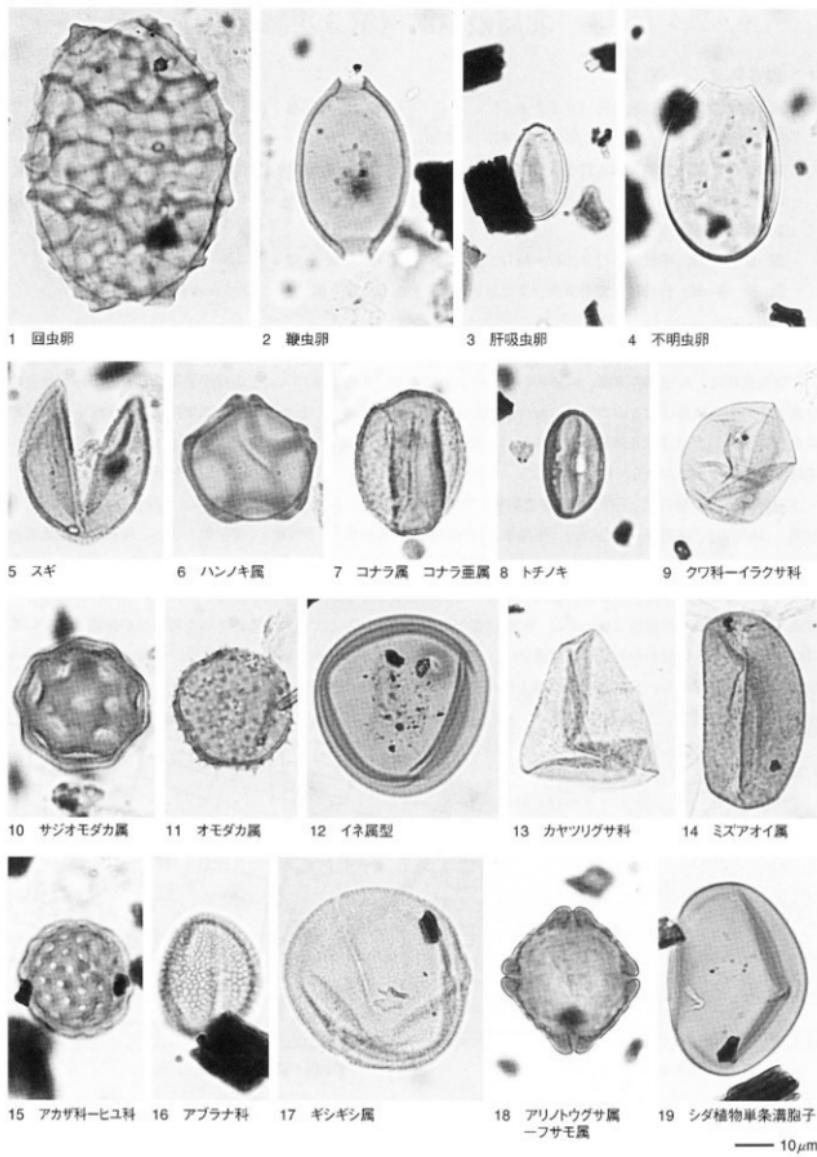


図1 洞ノ口遺跡第8次調査、1区SK1における寄生虫卵・花粉ダイヤグラム



洞ノ口遺跡第8次調査の寄生虫卵・花粉・胞子

3 北屋敷遺跡（第3次調査）

1 調査要項

遺跡名	北屋敷遺跡（01220）	担当職員	教諭 豊村幸宏
調査地点	仙台市若林区六丁の目中町7-12、7-13	文化財教諭	村上秀樹
調査原因	店舗・個人住宅付共同住宅	調査参加者	大宮久美子 小野さよ子 小林篤夫 佐々木瑞枝 佐藤久栄 佐藤ゆう子
調査対象面積	134m ²		佐藤リキ子 水戸智
調査面積	73m ²	申請者	山口涉
調査期間	平成13年11月19日～11月26日	調査協力	日本ホーム株式会社
調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）		

2 遺跡の位置と環境（第1・2図）

北屋敷遺跡は、仙台市の東部、県道仙台塩釜線沿いにあり、仙台バイパス六丁の目交差点より東方1kmの地点に位置している。標高は約5mである。仙台市街地東部の地形を見ると、七北田川、広瀬川によって形成された「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野がみられ、自然堤防、後背湿地、浜堤が広がっており、旧河道も観察される。遺跡は自然堤防上に立地している。

本遺跡周辺の旧地名は、「六丁の目字北屋敷」であるが、周辺にも「明屋敷」「屋敷」「鹿子屋敷」「中屋敷」「札屋敷」「高屋敷」「新屋敷」「原屋敷」「伊藤屋敷」「神屋敷」「下屋敷」「笹屋敷」など、屋敷を表す地名が多数見られる。このことから、かつては「久居根」と呼ばれる屋敷林を伴う農村集落が一帯に広がっていたことが窺われる。昭和53年に行われた第1次調査では、近世末頃を主体とする掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが検出された。これらの遺構については、配置状態から道路跡を挟んで二つの屋敷があった可能性が指摘されている（注1）。平成10年に行われた第2次調査では、東西方向に延びる溝跡が重複して検出され、屋敷の南側を区画する堀跡と想定されている。また堀の護岸の「しがらみ」の遺構も見つかっている（注2）。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

第2図 調査区の位置 (1/2,500)

3 調査に至る経過と調査方法（第3回）

当該地において山口涉氏より鉄筋コンクリート6階建店舗・個人住宅付共同住宅の建築が計画されたため、仙台

市教育委員会では申請者と協議を行った。申請箇所は、以前2次にわたる調査を行った地点に隣接しており、発掘調査が必要と考えられたため、申請者と発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を行うこととした。

調査区は東西3m×12m、南北3m×12mのL字形に設定した。重機により現代の耕作土（I層）と旧耕作土（II層）を排除し、III層上面で遺構検査作業を行った。その結果、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、ピットなどを検出した。III層上面の遺構精査後、部分的に下層調査を実施したが、遺構、遺物は発見されなかった。

4 基本層序（第4図）

調査地で確認した基本層序は、I層からV層までである。I層は暗褐色シルト層で現代の畑の耕作土である。近現代の陶磁器、焼瓦などを多量に包含している。II層は黒褐色シルト層で、ある時期の耕作土層と考えられる。III層はにぶい黄橙色シルト質粘土層で、下層に存在する旧河川堆積層の漸移層である。この層の上面で遺構検査作業を行っている。なお、調査区西半北壁で、一部下層調査を実施し、IV層、V層を検出しているが、いずれも旧河川に由来する自然堆積層と考えられる。また、調査区を南北に縱断する褐色砂層の帶を検出している（第4図）。

5 発見された遺構と遺物

検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条、土坑1基、ピット55基である。これらの遺構はII層及びIII層上面から掘り込まれている。

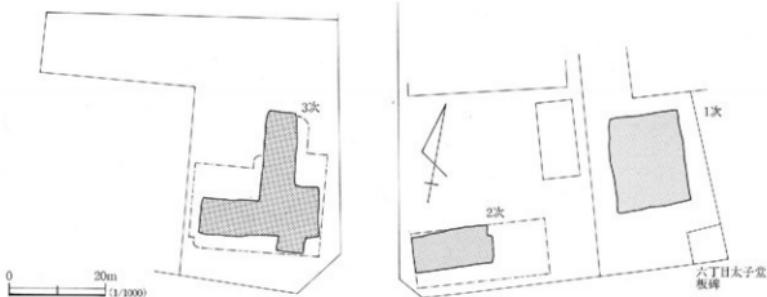
S B 1 掘立柱建物跡（第4・5図）

調査区西半部で検出した。掘り込み面はIII層上面である。桁行4間以上、梁行2間以上の建物跡と推定されるが、一部の検出であるため全体の形状は不明である。ピットの平面形は、円形、楕円形、正方形である。建物跡の方向は、東柱列でN12°W、南柱列でE14°Nである。遺物は出土しなかった。いずれのピットも柱痕跡に多量の木炭片を含むことから、火災を受けた可能性が考えられる。

S D 1 溝跡（第4・6・7図）

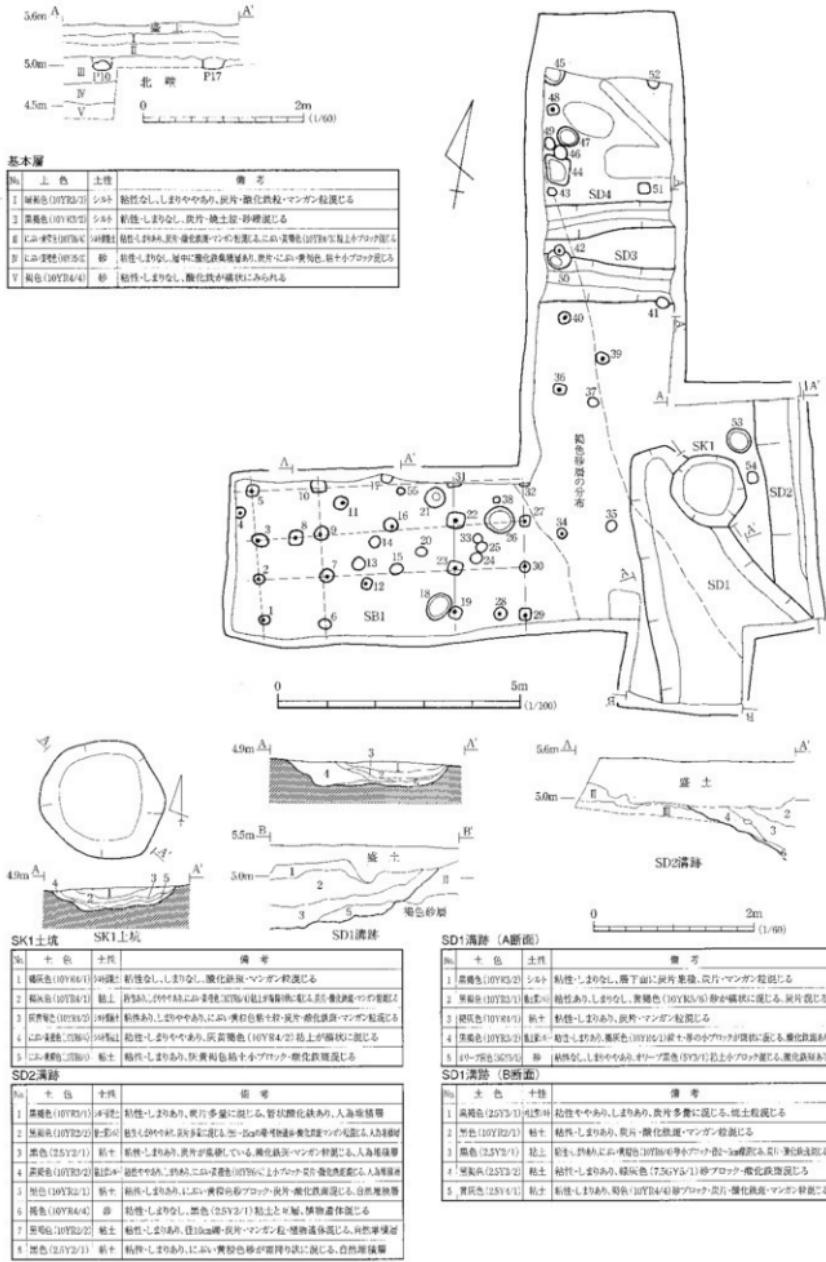
調査区東半部に位置する南北方向の溝跡である。掘り込み面はII層上面である。S D 2 溝跡より新しく、SK 1 土坑より古い。長さ5.54mで、北側で途切れる。上幅0.55~3.43m、下幅0.46~2.3m、深さ0.87mである。壁は東壁では緩やかに立上がるが、西壁ではやや急に立上がる。断面形は、扁平な逆台形で、底面は平坦である。堆積土は5層に分かれる。

出土遺物は、陶磁器（第6図1~19）、焼瓦が多く、鉄製品（第7図4）、漆器（第6図20）、石製品（第7図2・3）、コンクリート片などが少量出土している。陶磁器の年代は、最も古いものは17世紀代、最も新しいものは20世紀（戦前）であり、19世紀代の破片量が最も多い。



第3図 調査区配置図

3 北壁敷遺跡（第3次調査）



第4図 遺構平面図 (1)

SD 2溝跡（第4・5・7図）

調査区東岸沿いに位置する南北方向の溝跡で、西岸のみ検出した。掘り込み面はⅡ層上面である。SD 1溝跡より古い。長さは4.59mである。底面のやや壁際で杭列を検出した。杭列は、調査区北堀から南に2.9mにわたり延びる。幅6~12cmの角材と径5~10cmの丸材を交互に20~40cmの間隔で打ち込んでいる。堆積土は8層に分かれれる。

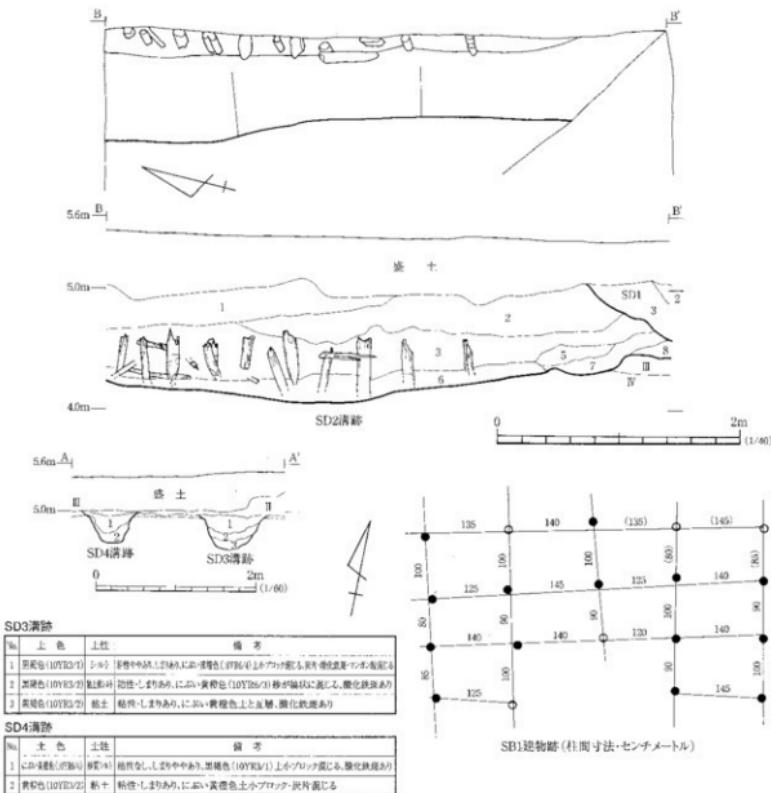
遺物は、陶磁器、焼瓦（第7図1）、木製品などが少量出土している。陶磁器の年代は、17世紀後半代から19世紀後半代にかけてである。

SD 3溝跡（第4・5図）

調査区北半部に位置する東西方向の溝跡である。掘り込み面はⅢ層上面である。ピット50より新しく、ピット41より古い。長さは2.75mである。上幅0.69~1.04m、下幅0.25~0.3m、深さ0.43mである。壁は両壁とも急で、断面形はU字形である。堆積土は3層に分かれれる。時期不明の土師器片が1点出土している。

SD 4溝跡（第4・5図）

調査区北半部に位置しSD 3溝跡と平行している。掘り込み面はⅢ層上面である。長さ2.63m、上幅0.53~0.72m、下幅0.15~0.22m、深さ0.37mである。壁は両壁とも急で、断面形は逆台形である。底面は平坦である。堆積土



第5図 遺構平面図（2）



番号	遺物・部位	種別・器種	特徴	発見地	年代	残存	法量(cm)			写真図版	登録番号
							口 径	底 径	高		
1	SD1	磁器・碗	柴村・飛白文	不明(切込?)	19C前半	口縁部1/4	(11.0)			25-1	1-3
2	SD1	磁器・碗	柴村・瀬波青に麗文	切込	19C前半代	口縁部1/4	(11.0)			25-2	1-2
3	SD1	磁器・碗	柴村・草花文	不明・地方窯	19C(嘉永~明治)	1/2	(11.0)	(3.5)	5.0	25-3	1-7
4	SD1	磁器・碗	柴村	不明・地方窯	19Cかそれ以降	底部1/2		(38.0)		25-4	1-8
5	SD1	磁器・小杯	柴村草花文	瀬戸(茶漬)	19C中頃(幕末~明治)	約1/2	(6.0)	(2.4)	4.5	25-5	1-10
6	SD1	磁器・碗	柴村	瀬戸(茶漬?)	19C中頃以降	口縁部1/4	(10.0)	(2.8)	5.2	25-6	1-6
7	SD1	磁器・四环	洋食器、見込みに「一」字文	瀬戸(美濃)	19~20C(軽微)	定形	6.0	2.7	2.5	25-7	1-12
8	SD1	磁器・碗	小野色刷絵	不明	19Cかそれ以後	定形	6.0	4.0	3.3	25-9	1-10
9	SD1	磁器・碗	柴村・花文・古文	肥前	19C後半代	口縁部1/2	(9.0)	(3.6)	3.9	25-8	1-4
10	SD1	磁器・碗	指輪柴村・ほたん	不明	19C中頃以降(明治前半)	1/4	(12.0)	(4.8)	4.7	25-13	1-1
11	SD1	磁器・碗	指輪柴村・花鳥文	不明	19C中頃以降(明治前半)	定形	10.8	3.8	4.4	25-14	1-16
12	SD1	白磁・供具	她的日付刻記	肥前	18C中頃~後半	ほぼ完形	14.0	7.6	4.5	25-10	1-15
13	SD1	白磁・皿	見込み・焼造「唐」字文・口縁	瀬戸(美濃)	江戸風米朝	底部完形、口縁部3/4	9.4	5.0	2.8	25-11	1-9
14	SD1	施釉海苔・皿	電動柴村	肥前	17C後半	底部3/4					1-11
15	SD1	施釉海苔・瓶	灰釉	瀬戸(美濃)	18C代	瓶部完形					1-5
16	SD1	磁器・壺	柴付草花文	肥前	19C前半	変形	9.8	3.6	2.5	25-12	1-13
17	SD1	磁器・壺	柴付草花文	肥前	19C前半	口縁部定形	10.6	3.8	5.4	25-15	1-14
18	SD1	磁器・胡桃利	柴付・山水文	不明(切込?)	19C(明治まで下るか?)	瓶部定形	(5.9)	8.4	24.9	25-16	1-17
19	SD1	施釉海苔・小野切印?	なごみ焼	瀬戸	19C(瀬戸・明治前)	口縁部完形	21.0			25-17	1-18
番号	遺物・部位	種別・器種	特徴	発見地	年代	残存	法量(cm)			写真図版	登録番号
							口 径	底 径	高		
20	SD1	漆器・壺	ひつじ・内面分離に「山」の茶道具漆器 漆器部分下層に茶道具漆器、漆器部分に茶道具漆器	不明	1/2					4.0	1-1

第6図 出土遺物

は2層に分かれる。遺物は出土していない。

S K 1 土坑（第4図）

調査区東半部に位置する円形の土坑である。SD 1溝跡より新しい。長軸1.62m、短軸1.41mで深さは0.35mである。断面形は皿状で、底面は平坦である。堆積土は5層に分かれ。遺物は出土していない。

基本層出土遺物

基本層I・II層から、陶磁器、焼瓦、瓦質土器、コンクリート片などが出土している。

陶磁器の年代は、17世紀から19世紀にかけてである。

6まとめ

溝跡のうちSD 1、SD 2は、第2次調査で検出した溝跡群に関連すると考えられる（第8図）。溝跡の所属時期は不明であるが、堆積土からの出土遺物の年代より、19世紀の末頃には埋没したと考えられる。SD 2の杭列は溝の壁面を養生するための護岸状の施設か、橋桁状の遺構の可能性がある。

出土遺物のうち陶磁器類が豊富であることから、この周辺が比較的富裕な農民層の居住地であったと推定される。

注1 仙台市文化財調査報告書第17集（1979）「北屋敷遺跡」仙台市教育委員会

注2 仙台市文化財調査報告書第238集（1999）「北屋敷遺跡（第2次調査）」陸奥国分寺跡ほか発掘調査報告書 仙台市教育委員会

参考 佐藤洋（1995）「北屋敷遺跡」「仙台市史 諸別編 2 古跡資料」仙台市史編纂委員会

第1表 SD1出土陶磁器破片集計表

種別	施設陶器	施設	無施設陶器			
			肥前	大野	小野	堤前
年代			前 戦 美濃	小 野	大 野	前 戦 美濃
17C	1					
17C後半	1					
17~18C		1				
18C	1	1	1			
19C前半			3	1	1	
19C中頃（幕末～明治）			2	2	1	
19C中頃以降（明治前半）					3	
19C		3	4	1	4	
19Cかそれ以前					2	
19~20C（戦前）					1	
不明					1	1

第2表 SD2

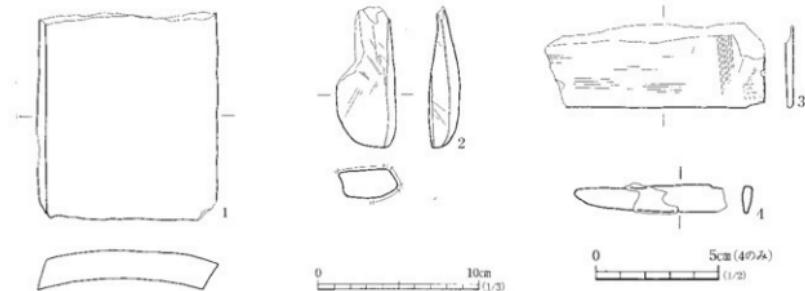
種別	施設陶器	施設	無施設陶器			
			肥前	大野	小野	堤前
年代			前 戦 美濃	大 野	小 野	前 戦 美濃
17C後半	1					
18C		1				
19C前半						
19C						
19Cかそれ以前						
19~20C（戦前）						
不明						1

第3表 基本層出土陶磁器破片集計表

種別	施設陶器	施設	無施設陶器			
			肥前	大野	小野	堤前
年代			前 戦 美濃	大 野	小 野	前 戦 美濃
17C後半	1					
18C		2				
18C~19C	1					
19C中頃（幕末～明治）						1
19C		1	1	1	1	
不明						1

第4表 全体の集計表

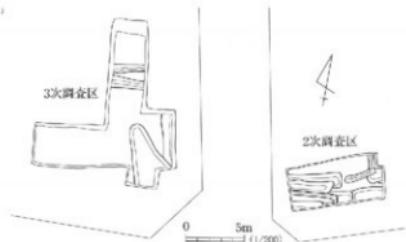
種別	施設陶器	施設	無施設陶器			
			肥前	大野	小野	堤前
年代			前 戦 美濃	大 野	小 野	前 戦 美濃
17C	1					
17C後半	3				1	
17~18C			1	3	2	2
18C						2
18~19C	1					
19C前半	1			3	1	1
19C中頃（幕末～明治）			2	2	2	
19C中頃以降（明治前半）			1	4		
19C	3	5	1	1	5	
19Cかそれ以前					2	
19~20C（戦前）			1			
不明			1	1	1	



北屋敷3次

番号	遺物・部位	種別・器種	外 面		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真回数	登錄番号
			長さ(cm)	幅(cm)							
1	SD2	のこぎり	いぶし、片刃尖頭		11.2	1.8				23~29	H-1
2	SD1	石斧	一部欠損	(8.8)	3.6	1.8		603		25~19	K-1
3	SD1	不明	抽象文様(魚!打毬!?)	(13.6)	5.2	0.2	35.5		スレート	25~21	K-2
番号	遺物・部位	種別・器種	特 樹	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				写真回数	登錄番号
4	SD1	小刀	基部欠損		1.1		0.2			25~18	N 1

第7図 出土遺物（2）



第8図 溝跡の位置

第5表 ピット計測表（単位cm）

No.	長軸	短軸	深さ	土色	柱痕	No.	長軸	短軸	深さ	土色	柱痕
1	17	16	5	A	○	31	26	(10)	25	B	
2	19	16	4	A	○	32	23	(12)	18	A	
3	29	25	8	A	○	33	17	16	4	B	
4	29	24	30	B	○	34	17	16	30	D	○
5	25	25	7	A	○	35	30	27	12	B	
6	25	23	7	A	○	36	27	25	35	B	○
7	28	27	10	A	○	37	20	19	30	B	
8	28	27	12	C	○	38	16	15	15	B	
9	25	25	10	A	○	39	20	18	16	B	○
10	26	(20)	16	A	○	40	31	26	35	D	
11	30	27	48	B	○	41	23	22	48	B	
12	19	19	33	A	○	42	25	24	21	B	○
13	26	24	15	B		43	16	16	9	B	
14	24	21	9	B		44	58	47	55	B	
15	18	16	5	A		45	(50)	(58)	72	B	
16	25	23	5	A	○	46	27	(22)	16	B	
17	23	(15)	9	A	○	47	47	47	10	B	
18	54	50	8	B		48	24	23	11	B	○
19	27	26	11	A	○	49	23	20	42	B	
20	23	21	45	B		50	43	(20)	64	B	
21	47	43	32	B		51	21	17	27	B	
22	27	26	14	B	○	52	27	(10)	25	B	
23	28	26	9	B	○	53	53	46	19	A	
24	27	24	25	B		54	25	22	10	B	
25	24	21	35	C		55	16	14	9	B	

ピット土層分類

分類	土 色	土 性	備 考
A	黒褐色(10YR3-1-3/2)	主にシルト	炭片多量に混じる
B	黒褐色(10YR3-1-3/2)	主にシルト	炭片ないか、少量の混入
C	解褐色(10YR3-3)	主にシルト	炭片ないか、少量の混入
D	褐灰色(10YR4/1)	主にシルト	炭片ないか、少量の混入



写真1 基本層序



写真2 遺構検出状況（西より）



写真3 完掘全景（北より）



写真4 ピット完掘状況（南より）



写真5 SD1・SK1検出状況（東より）

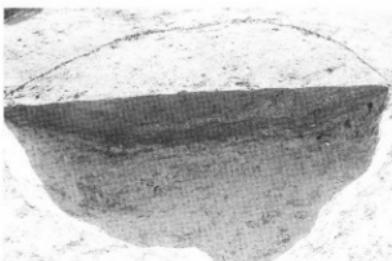


写真6 SK1断面（北東より）



写真7 SD1・SD2発掘状況（南より）



写真8 SD1断面（南より）

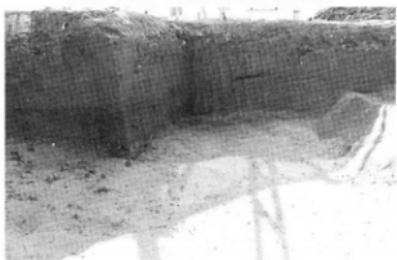


写真9 SD1南壁断面



写真10 SD2杭出土状況（南より）



写真11 SD2北壁断面（南より）



写真12 SD2杭出土状況（西より）

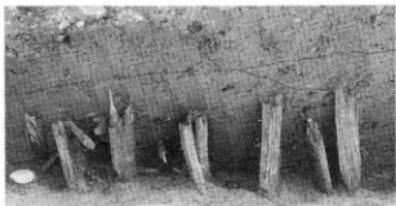


写真13 SD2杭出土状況アップ（西より）



写真14 SD2完掘状況（西より）



写真15 東壁断面（西より）



写真16 SD1・SD2完掘状況（北より）

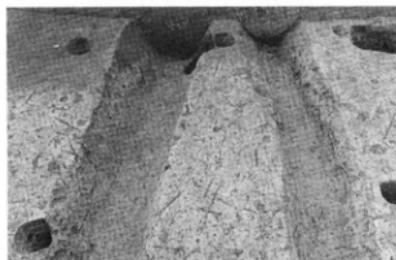


写真17 SD3・SD4完掘状況（東より）

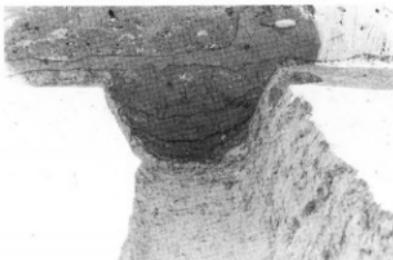


写真18 SD3断面（西より）



写真19 SD4断面（西より）



写真20 SD1・SD2完掘状況（北西より）

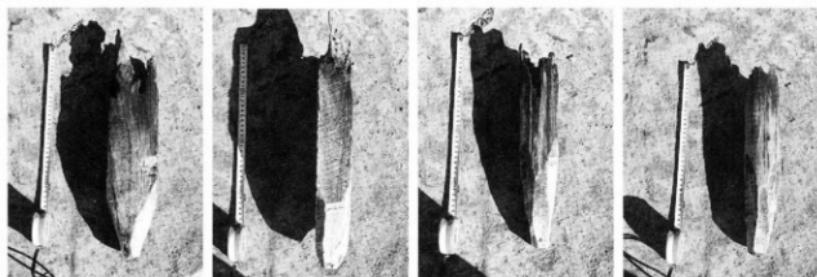


写真21 SD2出土角杭①

写真22 SD2出土角杭②

写真23 SD2出土丸杭①

写真24 SD2出土丸杭②



写真25 出土遺物

4 (1) 高田A遺跡（第2次調査）

1 調査要項

遺 跡 名	高田A遺跡（01256）	調 査 主 体	仙台市教育委員会（文化財課）
調 査 地 点	仙台市若林区上飯田三丁目448-1	担 当 職 員	教諭 農村幸宏 主事 渡部紀
調 査 原 因	宅地造成	調 査 参 加 者	菱沼みのり 小野栄子 佐藤久栄 鈴木峰子 千葉恭子 大根明美
調査対象面積	240m ²	佐藤としひ 庄子善昭 清藤智子	
調 査 面 積	115m ²	鈴木秀典 菊地東三郎 吉田比紹子	
調 査 期 間	確認調査 平成12年10月16日	申 請 者	福仙工業株式会社
本 調 査	平成13年7月2日～7月13日		

2 遺跡の位置と環境

高田A遺跡は、仙台市の南東部に所在する。調査地点は、仙台南部道路今泉インターチェンジより北西900mに位置しており、標高は約4.7mである。仙台市街地南部の地形は、東側にはいわゆる「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野がみられる。名取川と広瀬川は遺跡の西方約1.4km地点で合流し、遺跡の周囲には両河川によって形成された自然堤防と後背湿地が広がっており、旧河道も観察される。遺跡は、自然堤防上に立地する。本遺跡では、平成5年に今回の調査地点の北側に隣接した道路部分で調査を行っている（注1）。その際には、河川跡、溝跡、土坑、ピットなどが検出され、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石製品などが出土した。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

第2図 調査区の位置 (1/2,500)

3 調査に至る経過と調査方法

当該地において平成12年度に福仙工業株式会社により宅地造成が計画されたため、確認調査を実施したところ、溝跡、土坑等の遺構と土師器等の遺物が発見されたため、本調査が必要であると判断された。そこで平成13年度に発掘届の提出を受けて発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

調査区は、宅地内道路予定地を対象とし、6m×25mの大きさで設定した。遺構等の実測にあたっては、調査区両端の任意の2点A・Bを結ぶ線を基準とした。杭A・Bは平面直角座標系Xにおける座標値を計測している（A : X = -198.832612km, Y = +8.097471km B : X = -198.861432km, Y = +8.092729km）。重機により表土とII

層を除去したが、Ⅲ層中までやや厚く排土しすぎてしまったため、確認調査時の略図を参考として掲載した（第4図）。

4 基本層序

基本層位は、V層まで確認した。遺構検出面はⅢ層である。

I層：a・b・cに細分され、I a層は現代の畑耕作土、I b・I c層は近年の畑耕作土と考えられる。

II層：黒褐色のシルト層で、層厚は20~30cmである。比較的多量の遺物（主として非ロクロ土師器）が混じっている。

III層：にぶい黄橙色のシルト質粘土層で、層厚は30~50cmである。上面が遺構検出面である。

IV層：にぶい黄橙色の粘土層で、層厚は20~30cmである。

V層：にぶい黄褐色の細砂質シルト層で、下層になるにしたがい粒子が粗くなる。

5 発見された遺構と遺物

検出した遺構は、溝跡8条、土坑3基、ピット60基である。Ⅲ層上面で検出された。

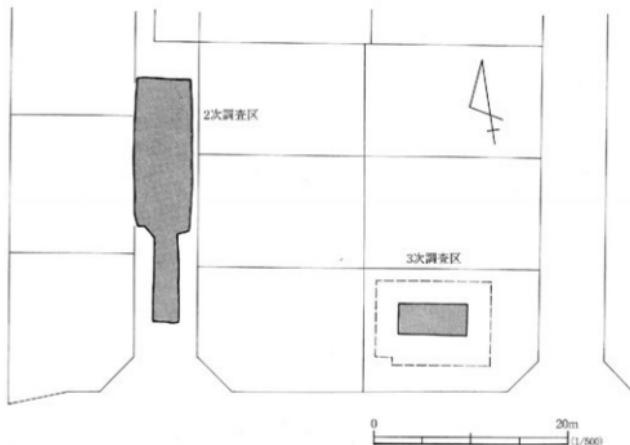
S D 1・9溝跡（第5図）

S D 1溝跡は中央部に位置する東西方向の溝跡である。S D 5溝跡、ピット43より新しい。長さ5.5m、上幅175cm、下幅17~33cm、深さ55cmである。壁は南壁ではやや緩やかに立上がり、北壁では急に立上がる。底面から20cmのところで幅10~15cmの階段状の段差があり、段差から上は両壁とも緩やかに立上がる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれ、人為堆積と考えられる。堆積土から、土師器（非ロクロ・ロクロ）、須恵器（第7図13）が出土している。図示した須恵器片の時期は、平安時代と考えられる。

S D 9溝跡は、S D 1の南側に平行しS D 1より古い。長さ1m、上幅150cm、深さ28cmである。壁は底面から緩やかに立上がり、底面は平坦である。堆積土は1層である。

S D 2溝跡（第5図）

南端部に位置する南北方向の溝である。S K 2土坑より古く、S D 3溝跡・S K 3土坑より新しい。長さ2m、



第3図 調査区配置図

上幅50～65cm、下幅21～26cm、深さ14cmである。断面形は舟底形で、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

S D 3溝跡（第5図）

南端部に位置する南北方向の小規模な溝である。S D 2溝跡より古い。長さ55cm、上幅20cm、下幅13cm、深さ7cmである。断面形は逆台形で、底面は平坦である。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

S D 4溝跡（第5図）

北東隅に位置する。長さ195cm、上幅86～103cm、深さ15～24cmである。東壁には幅50～60cmの段差がつく。断面形は逆台形で、底面は東側に傾斜する。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

S D 5溝跡（第4・5図）

北半部西壁際に位置し、南北に延びる。S D 1溝跡より古く、S D 6溝跡・S D 8溝跡より新しい。長さ9m、上幅45cm、下幅30cm、深さ12cmである。断面形は箱形で、底面には凹凸がある。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

S D 6溝跡（第5図）

北半部西壁際に位置する北西－南東方向の溝である。S D 5溝跡より古い。長さ140cm、上幅140cm、下幅105cm、深さ23cmである。断面形は扁平な逆台形で、底面は平坦である。堆積土は1層である。堆積土より縄文土器（第8図12）、弥生土器（第8図11）、非クロロ土師器（第7図6）などが出土している。図示した土師器壺はまとまって出土しており、体部が丸みを持ち外面はハケメ調整がなされていることから、古墳時代前期に位置づけられると考えられる。

S D 7溝跡（第6図）

南半部に位置する北西－南東方向の溝である。S K 2・ピットより古い。長さ240cm、南北長70～90cm、深さ8～17cmである。壁は底面から緩やかに立上がり、底面は凹凸がある。堆積土は1層である。時期不明の土師器、須恵器が出土している。

S D 8溝跡（第5図）

北半部に位置し、S D 6溝跡に平行する。S D 5溝跡・ピットより古い。北側は攪乱により削平されている。長さ13m、南北長3.7m、深さ20cmである。壁は底面から緩やかに立上がり、底面は平坦である。堆積土は1層である。非クロロ土師器（第7図7～10）・小型土器（第8図2）が出土している。図示した土師器はまとまって出土しており、器形・調整の特徴から、古墳時代前期に位置づけられると考えられる。

S K 2土坑（第5図）

南端部に位置する。S D 2・7溝跡・S K 3土坑より新しい。楕円形で、長さ140cm、幅88cm、深さ45cmである。底面は一部が深く落ち込んでいる。堆積土は3層に分かれる。堆積土より非クロロ土師器、須恵器が出土している。

S K 3土坑（第6図）

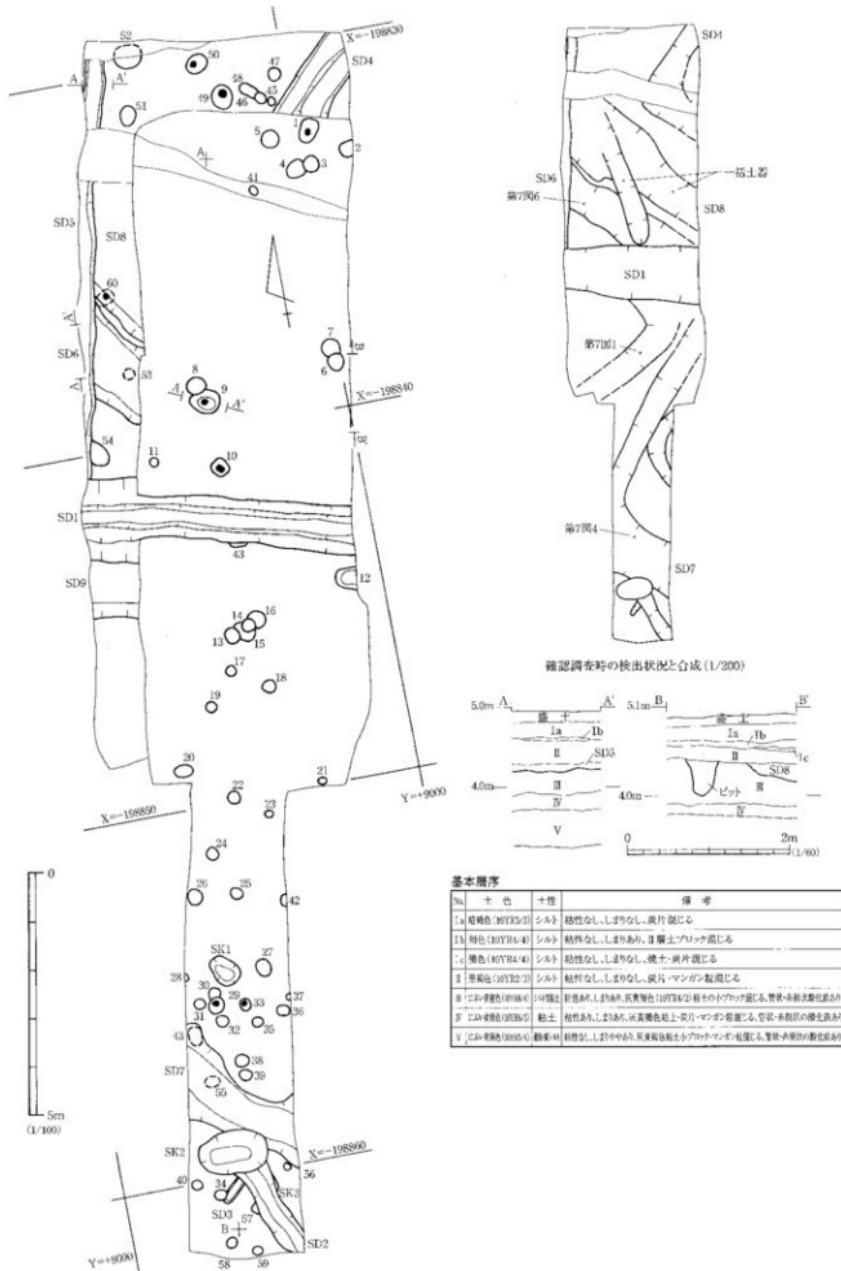
S D 2溝跡・S K 2土坑の下部で検出した。長方形で、長さ104cm、幅64cm、深さ50cmである。壁は途中で段差をもつ。底面は平坦である。堆積土は2層に分かれる。非クロロ土師器が出土している。

基本層出土遺物

非クロロ土師器（第7図11・12）が主であり、少量のロクロ土師器、須恵器（第7図14）、縄文土器（第8図6～8）、弥生土器（第8図10）、金属製品（第8図4）、土製品（第8図3）がある。

確認調査出土遺物

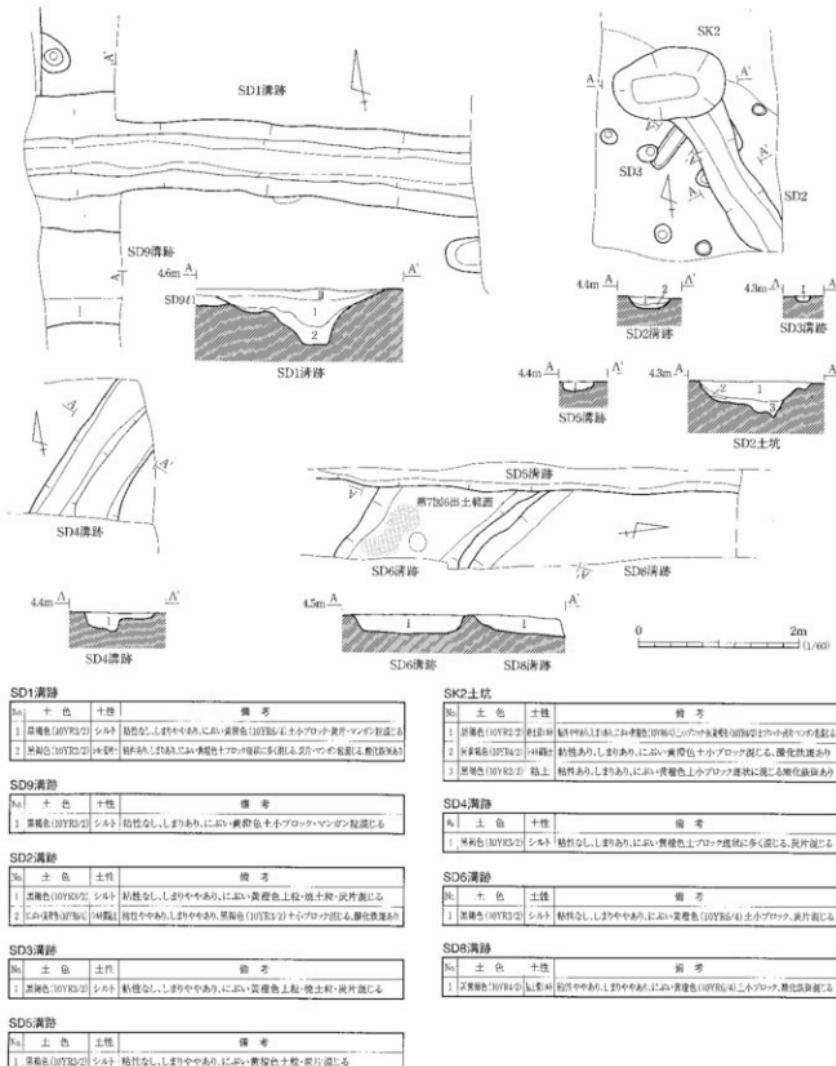
確認調査時にS D 1溝跡南側より土師器器台（第7図1）、S D 7堆積土より土師器壺（第7図4）が出土し、他に土師器（第7図2・3・5）、縄文土器（第8図5）、石皿（第8図13）がある。図示した土師器は、器形と調



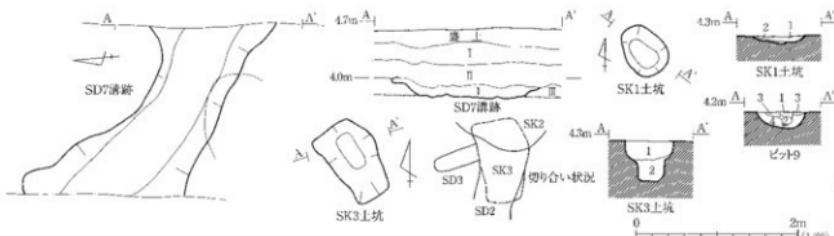
第4図 遺構配図

4 (1) 高田A遺跡 (第2次調査)

整の特徴から、古墳時代前期に位置づけられると考えられる。



第5図 遺構平断面図 (1)



SD7溝跡

No.	土色	上性	備考
1	黄褐色(10YR5/2)	シルト	粘性なし、しまりあり、にごり、黄褐色(10YR6/1)シルト状・灰片・マンゴン粒混じる

SK1土坑

No.	土色	上性	備考
1	黄褐色(10YR2/2)	シルト	粘性あり、しまりややあり、灰黄褐色(10YR4/2)土小ブロック状・灰片・マンゴン粒混じる
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	粘性なし、しまりややあり、黒褐色(10YR2/2)上小ブロック状

SK3土坑

No.	上	角	土性	備考
1	黄褐色(10YR2/2)	シルト	粘性なし、しまりあり、にごり、黄褐色(10YR6/4)土小ブロック状・灰片・マンゴン粒混じる	
2	黄褐色(10YR2/2)	シルト	粘性なし、しまりなし、にごり、黄褐色(10YR2/2)上粒・マンゴン粒混じる	

ピット9

No.	土色	土性	備考
1	黄褐色(10YR2/2)	シルト	粘性なし、しまりなし、灰片・礫化跡混じる
2	黄褐色(10YR2/2)	シルト	粘性なし、しまりなし、にごり、黄褐色(10YR2/2)上粒・マンゴン粒混じる
3	黄褐色(10YR2/2)	シルト	粘性ややあり、しまりややあり、にごり、黄褐色(10YR4/2)土小ブロック・灰片混じる
4	灰褐色(10YR5/2)	シルト	粘性あり、しまりあり、灰褐色(10YR4/2)土小ブロック・礫化跡混じる

第6図 遺構平面図(2)

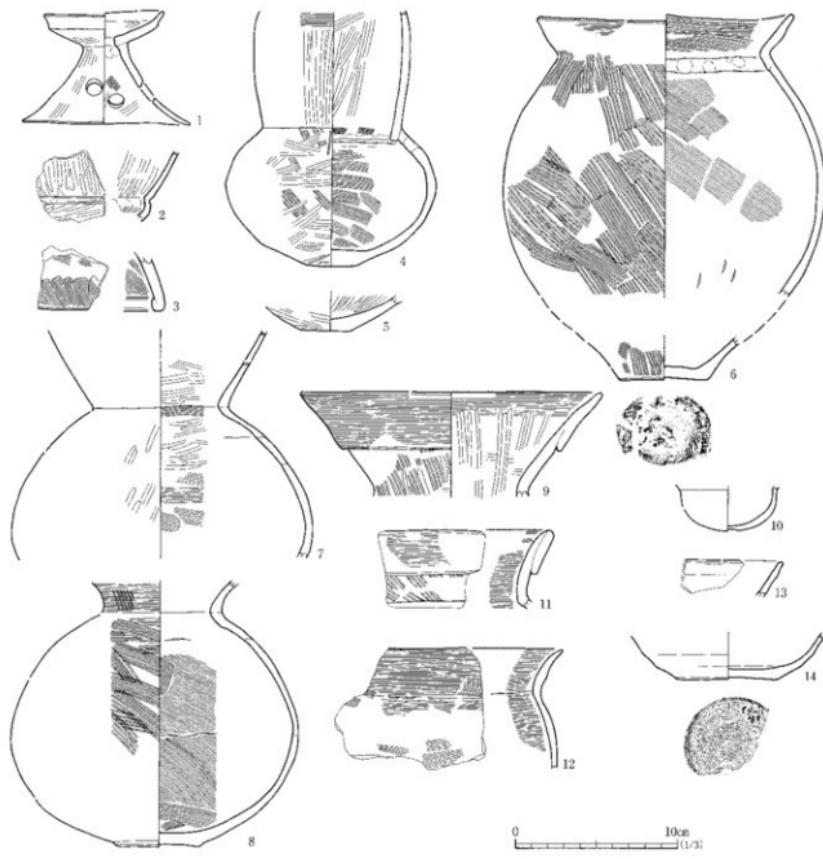
6まとめ

遺構の所属時期は、SD6～8溝跡は堆積上出上遺物の年代から、古墳時代前期かそれ以前と考えられる。SD1溝跡は、人為堆積と考えられる層中から平安時代と考えられる遺物が出土することから、平安時代かそれ以降には埋められた可能性が高い。それ以外の遺構についても、大きく時期の異なる遺物が出土していないことから、古墳時代前期かそれ以前と、平安時代かそれ以降のどちらかの時期に所属すると考えられる。

注1 仙台市文化財調査報告書第189集(1994)「高田A遺跡」[午報15]仙台市教育委員会

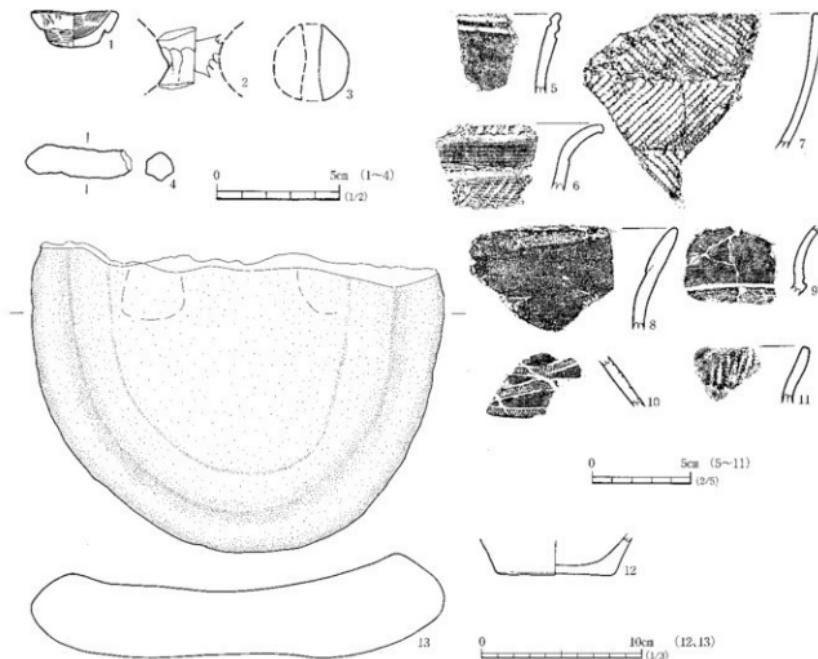
第1表 ピット計測表(単位cm)

No.	長軸	短軸	深さ	No.	長軸	短軸	深さ	No.	長軸	短軸	深さ	単位 センチメートル		
												長軸	短軸	深さ
1	52	43	69	21	15	14	29	41	15	13	41			
2	33	26	34	22	26	24	37	42	21	11	39			
3	35	31	42	23	16	15	26	43						
4	37	31	35	24	24	21	25	44	35	29	49			
5	33	33	32	25	24	20	36	45	18	17	12			
6	41	39	50	26	27	26	77	46	22	20	12			
7	37	32	48	27	29	23	35	47	25	24	11			
8	36	26	46	28	12	8	18	48	40	23	20			
9	60	45	53	29	37	33	47	49	46	42	60			
10	38	35	62	30	23	14	28	50	44	38	22			
11	20	16	32	31	30	30	57	51	37	30	32			
12	42	40	32	32	24	20	32	52	50	47	18			
13	36	29	35	33	24	22	51	53	22	31	14			
14	24	20	44	34	22	20	44	54	48	39	60			
15	31	18	26	25	20	20	27	55	20	17	17			
16	36	26	38	36	22	19	25	56	17	16	23			
17	17	16	39	37	12	6	27	57	23	19	22			
18	24	21	28	38	29	26	33	58	22	20	24			
19	20	19	25	39	24	23	34	59	18	15	13			
20	35	23	40	40	20	20	32	60	37	31	53			



番号	遺物・部位	種別	外観	内 漢	残存	古 量 (cm)			写真面版	登録番号
						口 径	底 径	高 度		
1	灰陶	上部器台	環部・マツ・ヘラミガキ 脚部・ヘラミガキ、丸孔	环部・ヘラミガキ 脚部・ハタケマツ・ヘラミガキ	ほぼ完形	7.5	10.3	7.1	31-1	C-1
2	灰陶	上部器小形丸底鉢	ハクナマツ・ヘラミガキ	ハクナマツ・オサス、ナデ	-	-	-	-	31-2	C-6
3	灰陶	土器器台	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	-	-	-	31-3	C-9
4	灰陶	土器器底	LII線底・ヨコナダ、ハケヌメ・ヘラミガキ 底部・ハタケマツ・ヘラミガキ	口縁部・ヘラミガキ 体部・ハタケマツ・ナデ	体部・完成 口縁部1/3	3.0	-	-	31-5	C-2
5	灰陶	土器器壁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	底部・完成	3.0	-	-	31-6	C-5
6	SD6-1号	土器器底	ヨコナダ・ハタケ 底部に上野打痕	ハバメ・ヨコナダ、オサス、ヘラナデ	口縁部3-4 体部1/3 底部1/2	15.8	(22.7)	31-5	31-25	C-25
7	SD8-1号	上部器台	口縁部・ハタケマツ・ヘラミガキ?	口縁部・ヘラミガキ、ナデ	体部1/4 口縁部3/4	3.6	-	-	31-6	C-29
8	SD8-1号	上部器台	ハクナマツ・ヨコナダ・ハテヌ	ヘラナデ	-	-	-	-	31-9	C-28
9	SD8-1号	土器器底	ヨコナダ・ハタケマツ・ヘラミガキ	ヨコナダ、ヘラミガキ	底部・完形、体部2/3	3.0	-	-	31-7	C-30
10	SD8-1号	土器器小形丸底鉢	マツメ	マツメ	体部1/2	1.2	-	-	31-8	C-33
11	調查区要	土器器底	ヨコナダ・ハタケ	ヨコナダ	-	-	-	-	31-9	C-26
12	灰陶表面	土器器底	ナデ	ナデ	-	-	-	-	31-10	C-48
13	SD1-2号	灰陶器底	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	E-5	-
14	灰陶表面	泥質器底	ロクロナデ・脚乳・赤切刃	ロクロナデ	底部1/3	(6.4)	-	-	K-1	-

第7図 出土遺物 (1)



番号	遺物・部位	種別・器種	特徴			法寸(㎝)	写真図版	登錄番号	
			口 径	底 径	器 高				
1	P640	ニチュア土器	外面 口縁部一部平坦に削り、ナメエ、ナゲ、一部にハケメ状痕跡。底部:ケ20	3.6	1.0	1.5	31-10	P-2	
2	SD6-1解	不明	外面:ユビオサエ、内面:上ナゲ、下マメツ				31-2	P-3	
3	検出面	上玉	外:ナゲ、残在:1/4			残3.2		P-1	
番号	遺物・部位	種別・器種	特徴			法寸(㎝)	写真図版	登錄番号	
4	検出面	金屬製品	半球状			直径(㎝)			
						幅(㎝)	厚(㎝)		
						(幅)1.0	0.3-1.2	N-1	
番号	遺物・部位	種別・器種	特徴			法寸(㎝)	写真図版	登錄番号	
			口 径	底 径	器 高				
5	試用	純土器・壺?	内面:リガキ、外面:リガキ			31-14	A-1		
6	1号	純土器	内面:リガキ、外面:ナゲ。体部に施文(LR), TM添付に削み			31-16	A-4		
7	調査区発見	純土器・壺類	内面:リガキ、外面:施文(TM)剥離からRL→LR→RL)			31-17	A-2		
8		純土器・壺類	内面:リガキ、外面:リガキ			31-18	A-3		
9	P19	純久十型?	内面:マヌ、外面:リガキ、沈継			31-15	A-6		
10	SD6-1解	純土器・壺?	内面:マヌ、外面:施文(LR), マヌツ			31-20	B-1		
11	SD6	純土器・壺類	内面:マヌ、外面:リガキ(?)、底部無文			(2.8)	31-19	B-2	
12	SD6	純土器・壺類	内面:マヌ、外面:リガキ(?)、底部無文			7.0	(2.7)	B-5	
番号	遺物・部位	種別・器種	特徴	長さ(㎝)	幅(㎝)	重さ(g)	石材	写真図版	
13	試用	石皿	一般に特に不適な部分(破損内)あり	(19.4)	25.5	(5.0)	3600	(多孔質)	31-13

第8図 出土遺物 (2)

4 (1) 高田A遺跡（第2次調査）



写真1 確認調査遺構検出状況（北西より）



写真2 確認調査遺構検出状況（北西より）



写真3 確認調査遺構検出状況（南より）

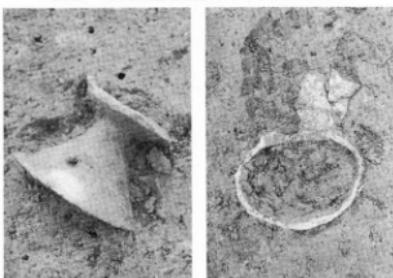


写真4 確認調査遺物出土状況

写真5 確認調査遺物出土状況



写真6 調査前全景（南より）

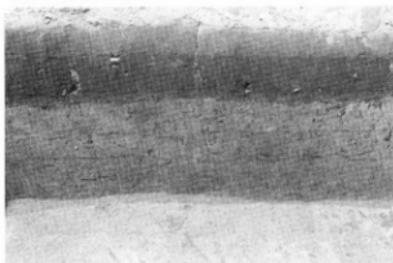


写真7 西壁基本層序

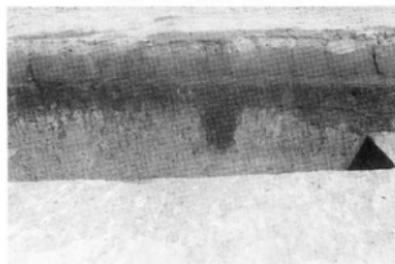


写真8 東壁基本層序



写真9 遺構検出状況（北より）



写真10 完掘全景（北より）



写真11 完掘全景（南より）

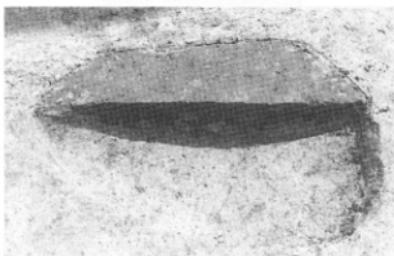


写真12 SK1断面（南西より）

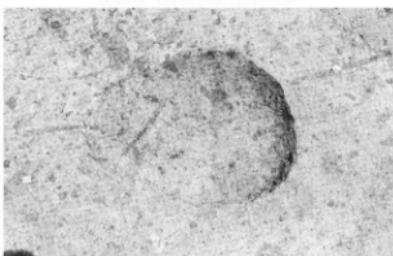


写真13 SK1完掘状況（南より）

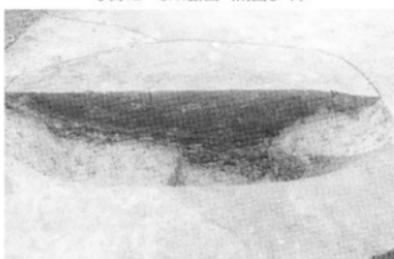


写真14 SK2断面（南より）



写真15 SK2完掘（南より）

4 (1) 高田A遺跡（第2次調査）



写真16 SK3断面（南東より）



写真17 調査区南部の完掘状況（南より）

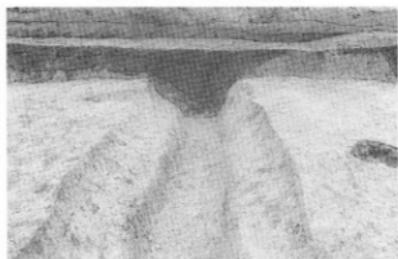


写真18 SD1断面（東より）



写真19 SD1完掘状況（東より）

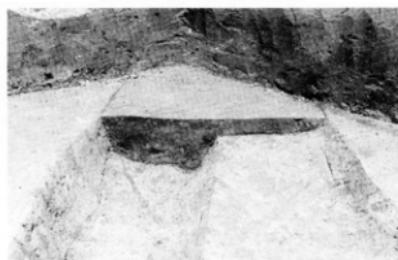


写真20 SD4断面（南西より）



写真21 SD4完掘状況（南西より）



写真22 SD6遺物出土状況



写真23 SD8遺物出土状況（東より）

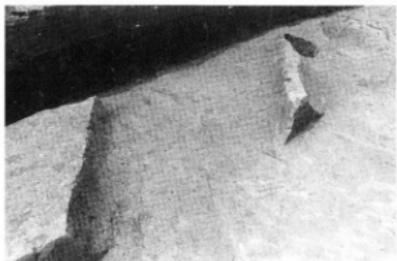


写真24 SD6完掘状況（南東より）



写真25 SD6・SD8完掘状況（東より）

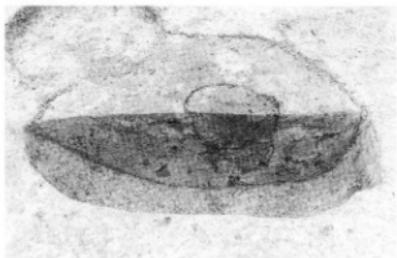


写真26 ピット9断面（南より）



写真27 SD2断面（南東より）

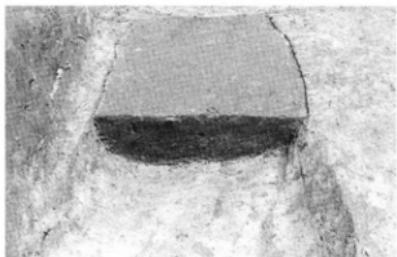


写真28 SD5断面（南より）



写真29 SD3断面（南西より）

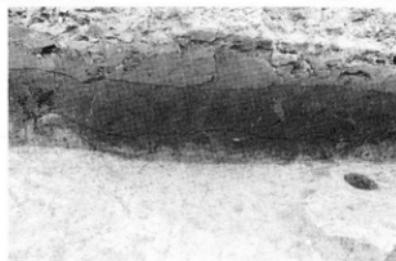


写真30 SD7断面（西より）

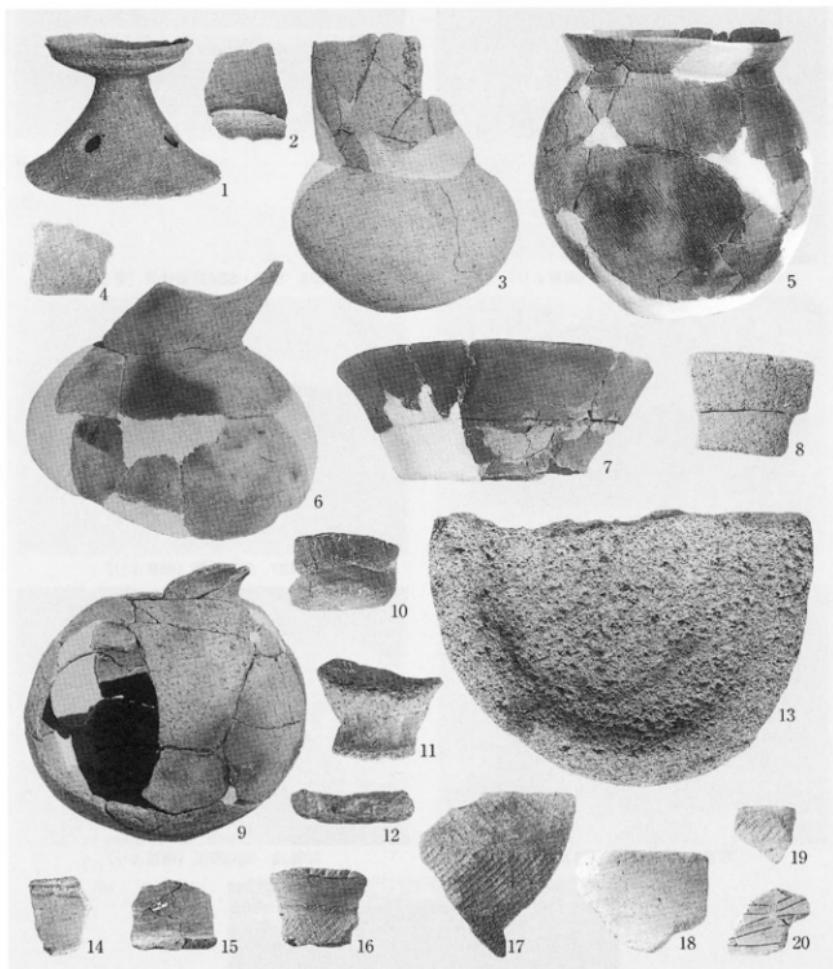


写真31 出土遺物

4 (2) 高田A遺跡（第3次調査）

1 調査要項

遺跡名	高田A遺跡（01256）	調査期間	平成13年7月2日～3日
調査地点	仙台市若林区上飯田三丁目448-20	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査原因	個人専用住宅の建築	担当職員	主事 渡部 紀
調査対象面積	77m ²	調査参加者	佐藤久栄 鈴木峰子
調査面積	21m ²		

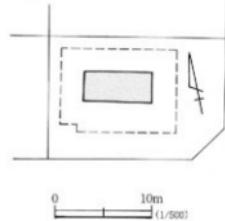
2 遺跡の位置と環境

遺跡は名取川の北の水田地帯に位置し、自然堤防上に立地する。調査区は前述した2次調査トレンチの東側である（前項第3図参照）。

3 調査に至る経過と調査方法

当該地において土壤改良工事を伴う個人専用住宅の建築が計画されたため、まず確認調査を行うこととした。

調査区は建物範囲のほぼ中央に3×7mの大きさで設定し、重機により盛土、表土を排除した。その後Ⅲ層上面で確認された遺構を調査した（第1図）。



第1図 調査区配置図

4 基本層序

当該地は宅地造成されており、造成時の盛土が、厚さ40cm程度ある。以下、厚さ約20cmの旧耕作土（I層）、厚さ約15cmのII層があり、その下のIII層上面で遺構を検出した。

5 発見された遺構と遺物

土坑1基、ピット6基が発見された。

S K 1 土坑（第2図）

平面形は長軸2.7m、短軸2.2m以上の楕円形である。壁は垂直に近く急な立ち上がりである。調査の過程で遺構底面がかなり深くなると想定されたため、掘り込みは中断し底面は検出していない。

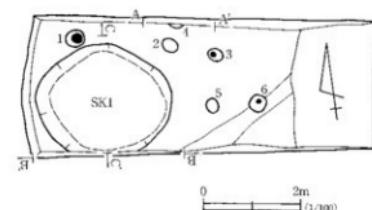
掘り下げた範囲までの堆積土は5層に分けられる。中央部には基本層IIa層がレンズ状に堆積する。1～4層は自然堆積の様相だが、壁際に存在する5層には基本層のブロックが多く混じっており、人為的埋め戻し土の可能性が高い。

遺物は各層より出土しているが、特に中央に堆積する基本層IIa層と堆積土1層から多く出土している。遺物の内容は、ロクロ使用の土器、須恵器、赤焼き土器が主体である。一番古い堆積層の5層からもロクロ使用土器片が出土している（第3図）。

ピット（第2図）

6基発見された。規模は次のとおりである。（長軸×短軸×深さ 単位cm）

P 1 31×27×24 P 2 30×25×25 P 3 31×28×48 P 4 27×(10)×24 P 5 30×23×13

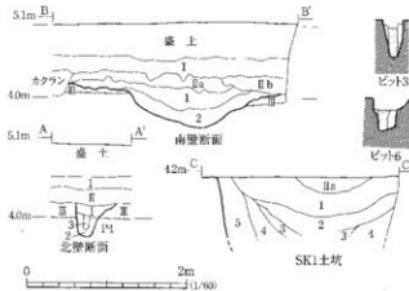


基本層序

No.	土色	土性	備考
I	にじみ黄褐色(10YR5/3)	シルト	
IIa	黒褐色(10YR3/1)	シルト	基本層Ⅱ層土壁ブロックが層下子に復する
IIb	褐色(10YR5/1)	シルト	基本層Ⅱ層土壁ブロック少量復する
III	にじみ黄褐色(10YR6/1)	シルト	マンガン鉱少量復する、Ⅲ層十ブロック上部に復する

ピット4

- 1 基本層Ⅱ層上にⅢ層十ブロックが少量復する
- 2 1と同じだがⅢ層十ブロックが大きい
- 3 黑褐色(10YR2/1)シルトに当層土壁ブロック少量復する



SK1土坑

No.	上色	土性	備考
1	黒褐色(10YR6/1)	シルト	しまりよいへ、灰片、塊状少量混じる、上部多い
2	褐色(10YR4/1)	粘土	粘性あり、しりこぼらへ、基本層十ブロック多く混じる、灰片・塊状粘土少量復する
3	にじみ黒褐色(10YR4/1)	シルト	基本層のブロック侵入層
4	黒褐色(10YR4/1)	粘土	基本層十ブロックが混じる
5	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	基本層十ブロックが窓状に現在（前方深さ十か所）

第2図 潛構平面図

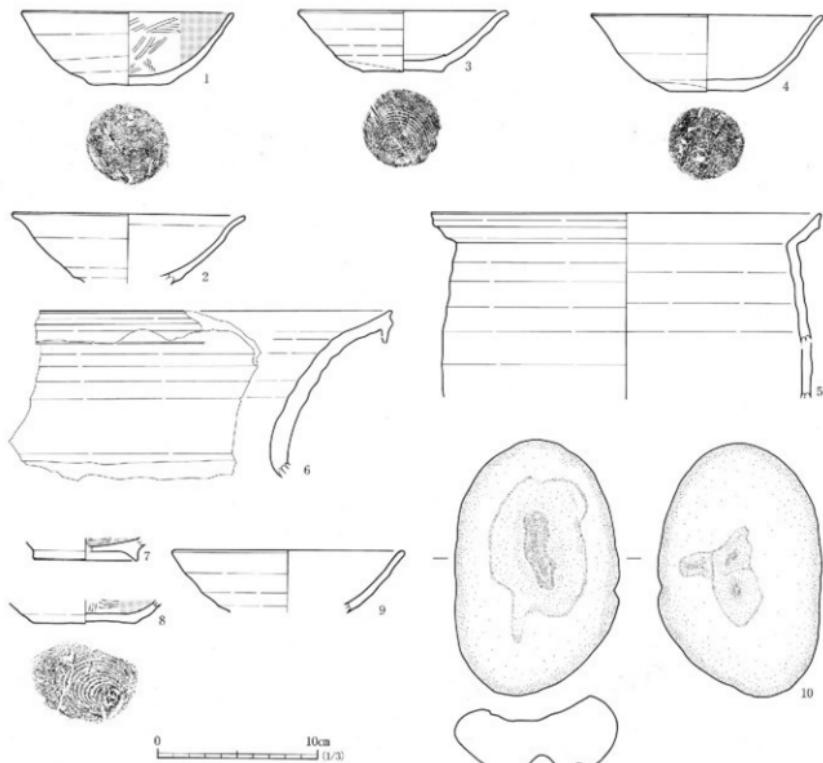
P 6 46×33×40

P 1・3・4・6 から柱痕跡が発見されている。

6まとめ

土坑は、壁が直立する点と、壁沿いに埋め戻しと考えられる土が存在することから、井戸跡の可能性が考えられる。遺構の所属時期についてだが、堆積1層から5層までロクロ使用の土器器片が出土しており、それより新しい遺物がないことから、平安時代には埋没過程にあったことが考えられる。土坑が使用されていた時期は、底面を検出していないため不明である。

ピットについても、時期は不明である。



高田A（確認）

番号	遺構・部位	種別	外観	内面	残存	寸法(cm)			写真図版	登録番号
						口径	底径	厚さ		
1	SK1上部Ⅱa層	土器器耳	ロクロナデ、回転赤褐色	ヘラミガキ、黑色施漬	完形	13.3	5.0	4.5	14-1	D-1
2	SK1上部Ⅱa層	赤褐色耳环	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/4	(14.6)				T-1
3	SK1-1層	赤褐色耳环	ロクロナデ、回転赤褐色	ロクロナデ、コテのあて口あわ	底部-完形、口縁部1/3	(13.0)	5.0	3.8	14-2	T-2
4	SK1-1層	赤褐色耳环	ロクロナデ、回転赤褐色	ロクロナデ	底部-完形、口縁部1/6	(14.5)	4.7	4.8	14-3	E-9
5	SK1-1層	土器器耳	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/4	(24.2)				D-7
6	SK1-1層	赤褐色耳环	ロクロナデ	ロクロナデ						E-2
7	SK1-5層	土器器耳环付耳	ロクロナデ、回転赤褐色	ヘラミガキ、黑色施漬	底部1/4			(6.6)		D-6
8	SK1-5層	土器器耳	ロクロナデ、回転赤褐色	ヘラミガキ、黑色施漬	底部1/2			(6.4)		D-5
9	SK1-5層	赤褐色耳环	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/5	(14.4)				E-3
番号	遺構・部位	種別・器種	特徴	寸法	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版
10	SK1	四石	表面に凹凸あり		16.0	10.2	4.2	600	石灰岩(三笠貝殻灰岩)	14-6 K-1

第3図 出土遺物



写真1 調査前全景（南より）

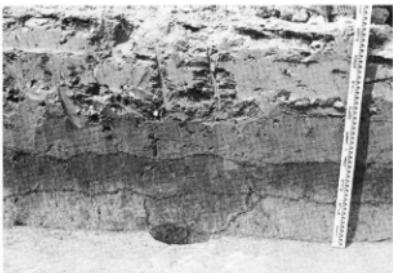


写真2 基本層序



写真3 遺構検出状況（西より）



写真4 全景（西より）

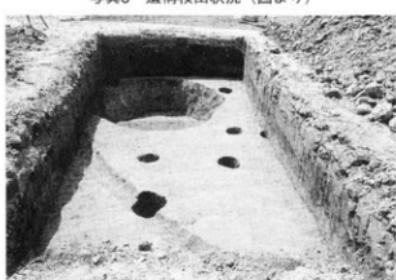


写真5 全景（東より）

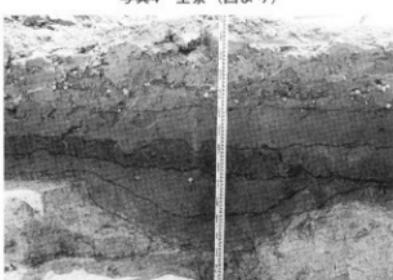


写真6 南壁セクション（北より）

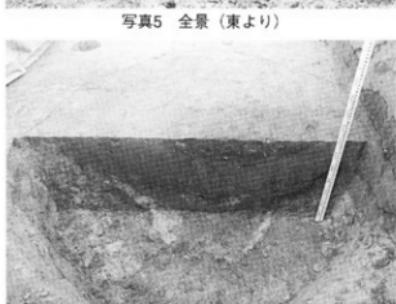


写真7 SK1断面（西より）



写真8 SK1断面アップ（西より）



写真9 P3断面（南より）



写真10 P6断面（南西より）



写真11 SK1遺物出土状況①



写真12 SK1遺物出土状況②



写真13 SK1遺物出土状況③

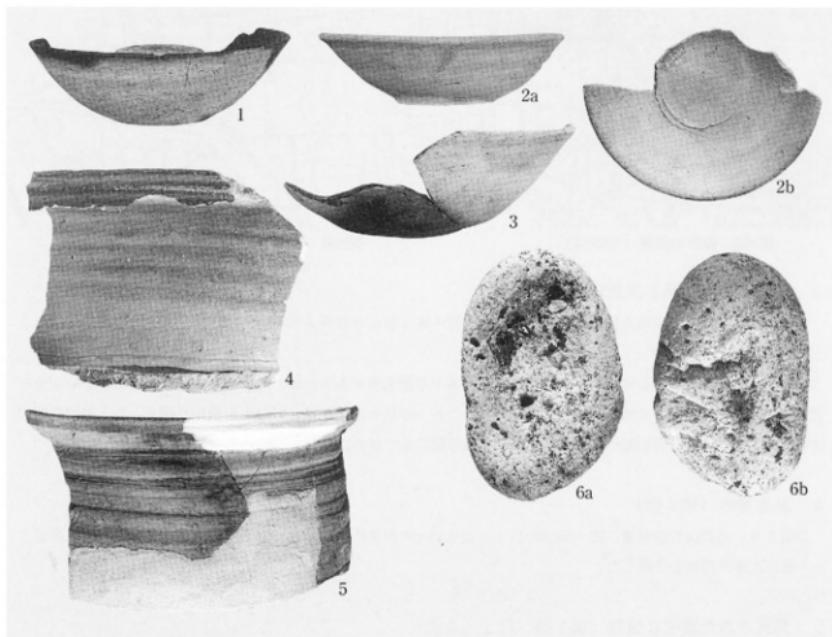


写真14 出土遺物

5 (1) 郡山遺跡（第139次調査）

1 調査要項

遺跡名	郡山遺跡(01003)	調査面積	74m ² (北区8.5m ² 、中区38m ² 、南区27.5m ²)
調査地點	仙台市太白区郡山5丁目151-1	調査期間	平成13年5月28日～30日
調査原因	変電施設の建築	調査主体	仙台市教育委員会(文化財課)
調査対象面積	140m ²	担当職員	主事 渡部紀 文化財教諭 加藤徳明
		申請者	東北電力株式会社

2 遺跡の位置と環境（第1・2図）

遺跡は、名取川と広瀬川にはさまれた郡山低地に立地する。郡山中学校の南側であり、変電所構内である。



第1図 遺跡の位置 (1/25000)

第2図 調査区の位置 (1/25000)

3 調査に至る経過と調査方法（第3図）

当該地において、東北電力株式会社により変電施設の建て替えが計画されたため、協議のうえ発掘調査を行うこととした。

建物予定地は、北端に倉庫が残っており、また、地下埋設電線があるため、それらを避けて3ヶ所のトレーンを設定した。倉庫脇の北区では遺構は発見されなかったが、中区と南区では、ピットを検出し調査した。遺構実測には平板を用いている。現況図から郡山遺跡の測量基準線にあてはめた（第3図中のS・Wライン）。

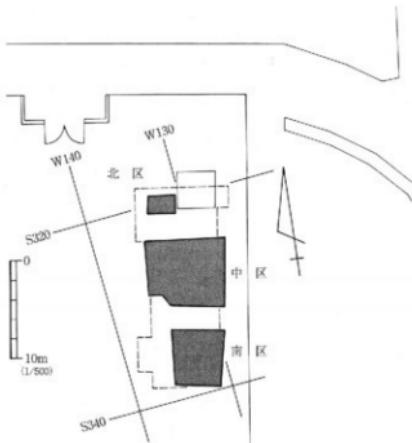
4 基本層序（第4図）

上層より、約20cmの砂利層、25~50cmの盛土、10~30cmの旧耕作土（I層）があり、II層とした明黄褐色砂質シルト層の上面で遺構を検出した。

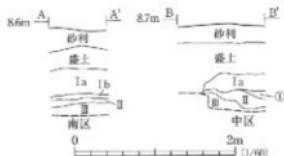
5 発見された遺構と遺物（第5図、第1・2表）

ピット17基が発見された（第5図）。うち、10基から柱痕跡が確認された。堆積土は6種類に大別される（第1・2表）。

また、中区と南区の間で、2層が落ち込む部分を発見した。人為的な溝かどうかは判断できない。



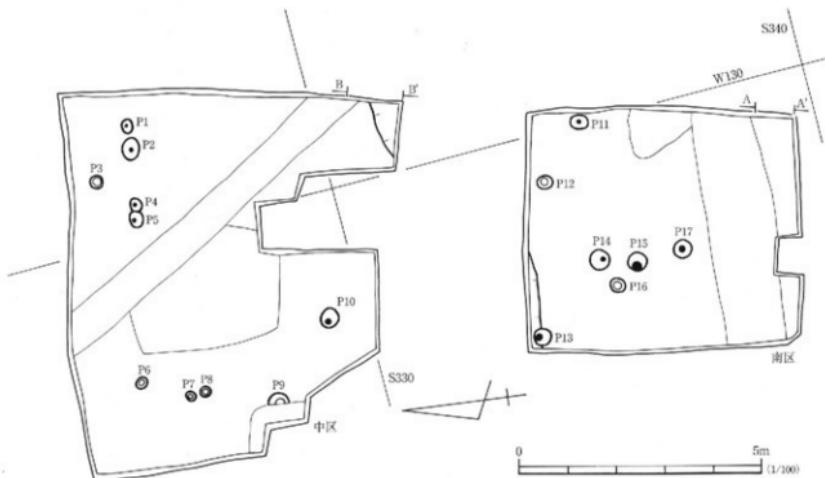
第3図 調査区配置図



基本層		備考
Ia	米白色(75GY6/1)	砂利
Ib	土上主張で、Ⅲ層上ブロック多く混じる	Ⅲ層上
II	褐色(75YR5/1)粘土	下層に灰白色(10YR8/2)粘土、灰褐色(10YR7/2)粘土の互層
III	Ⅰ層上(75YR5/1)黄褐色地に質シルトブロック少量混じる	Ⅰ層上(75YR5/1)黄褐色地に質シルトブロック少量混じる



第4図 断面図



第5図 平面図

調査時の出土遺物はない。

6 まとめ

今回発見された遺構はピットのみである。所属時期は不明であるが、小規模であるため、官衙に関連する建物跡の可能性は低いと考えられる。

第1表 ピット計測表

(単位:cm)

番号	長軸×短軸×深さ	柱根跡径	堆積土	番号	長軸×短軸×深さ	柱根跡径	堆積土	番号	長軸×短軸×深さ	柱根跡径	堆積土
1	30×23×34	9	A	7	径16×7	—	E	13	径30×36	16	B
2	45×33×23	14	A	8	径18×20	—	E	14	径34×45	10	B
3	径24×8	—	E	9	42×7×10	—	D	15	径34×52	20	C
4	径30×19	10	A	10	36×30×15	16	E	16	径30×15	15	F
5	30×25×27	10	A	11	40×35×19	12	B	17	径30×34	7	B
6	径20×18	—	E	12	径28×27	—	E				

(堆積土の分類)

分類	土色	土性	備考	分類	土色	土性	備考
A	掘り方 褐褐色(10YR3/4)	シルト	Ⅲ層土ブロック混少	D	掘り方 褐褐色(10YR3/4)	シルト	Ⅲ層土ブロック混少
	柱痕跡 にべい 黄褐色(10YR4/3)	シルト			柱痕跡 褐褐色(10YR3/4)	シルト	褐色シルト小ブロック混少
B	掘り方 灰黃褐色(10YR4/2)	シルト	Ⅲ層土ブロック混少	E	掘り方 褐褐色(10YR3/4)	シルト	Ⅲ層土ブロック混少
	柱痕跡 黒褐色(10YR3/2)	シルト			掘り方 褐灰色(10YR5/1)	シルト	Ⅲ層土ブロック混少
C	掘り方 海灰色(10YR5/2)	シルト	Ⅲ層土ブロック混少		柱痕跡 海灰色(10YR4/1)シルトに黒褐色(10YR3/2)シルトブロック混少		



写真1 調査前 (南より)

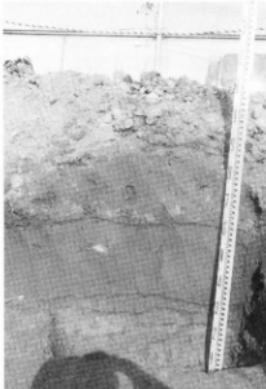


写真2 基本層序



写真3 北区全景 (西より)



写真4 中区全景 (西より)



写真5 中区全景 (北より)

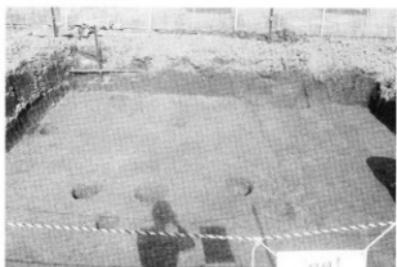


写真6 南区全景（西より）



写真7 南区全景（東より）



写真8 南区全景（南東より）



写真9 ピット2断面（南より）

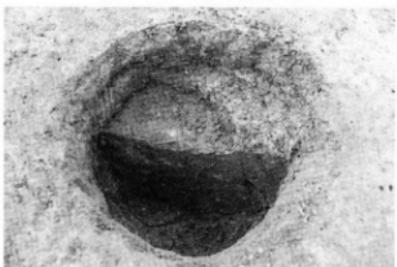


写真10 ピット15断面（南より）



写真11 ピット17断面（南より）



写真12 中区南端の落ち込み（西より）



写真13 落ち込み部壁面アップ（西より）

5 (2) 郡山遺跡（第141次調査）

1 調査要項

遺 跡 名	郡山遺跡（01003）	（本調査）主査 吉岡恭平
調 査 地 点	仙台市太白区郡山5丁目232-1	文化財教諭 吉田和正
調 査 原 因	情報センター等の建築	文化財教諭 村上秀樹
調査対象面積	483.09m ²	調査 参加者 小野さよ子 佐々木瑞枝 佐藤ゆう子
調 査 面 積	113m ²	佐藤リキ子 米澤俊子 伊藤房江
調 査 期 間	（確認調査）平成13年5月22日 （本調査）平成13年7月30日～8月9日	永野泰治 烏津レチ子 加嶋みえ子
調 査 主 体	仙台市教育委員会（文化財課）	庄子弘子 伊藤清子 山田千代子
担 当 職 員	（確認調査）主事 渡部 紀	田中さと子 伊深みづ子 小沼ちえ子
		板宮秀子
文化財教諭	加藤徳明	申 請 者 国土交通省東北地方整備局
		仙台工事事務所

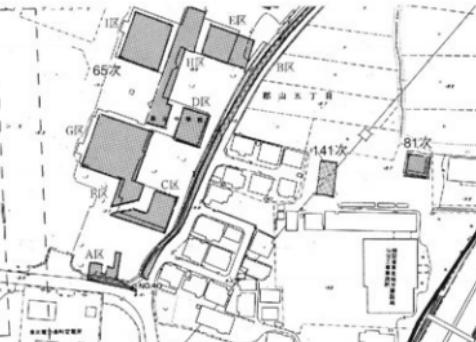
2 遺跡の位置と環境

郡山遺跡は、仙台市の東南部、太白区郡山2～6丁目に位置する遺跡で、遺跡の範囲は東西約800m、南北約900mに及ぶ。第141次調査の場所は、二期官衙外郭南辺より約200m南、郡山庵寺東辺の約150m東である。

仙台市街地南部の地形は大きく二つに分けられ、名取川とその支流広瀬川が形成した西側の段丘地形と、その東に広がる「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野がみられる。名取川と広瀬川は郡山遺跡の南東側で合流しており、両河川に挟まれた一帯は「郡山低地」と呼ばれ、自然堤防と後背湿地が入り組んでいる。遺跡内の標高は約8～11mである。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

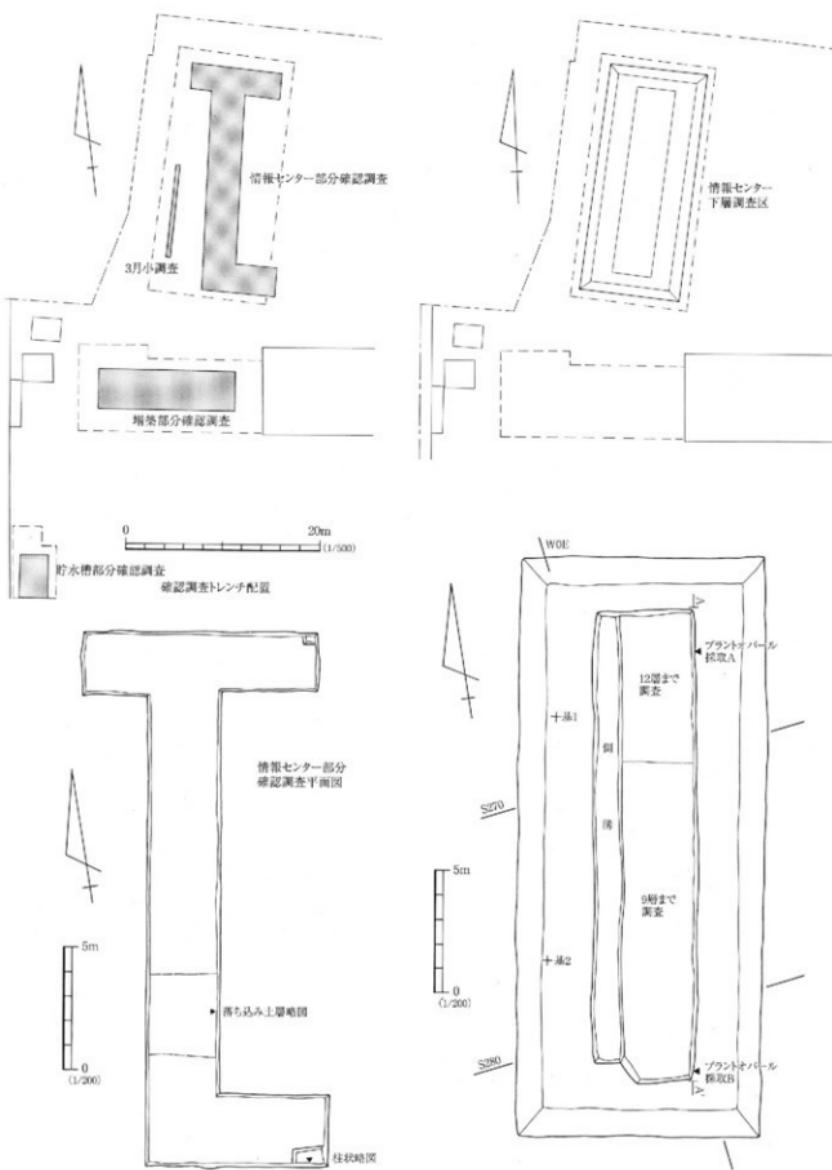


第2図 調査区の位置 (1/2,500)

3 調査に至る経過と調査方法

当該地において、国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所より情報センター棟・付属棟・貯水槽の建築工事が計画されたため、仙台市教育委員会は申請者と協議を行い、まず確認調査を行うこととした。

平成13年2月に小規模な立会調査を行い、水田跡の存在が予測された。同年5月に情報センター棟予定地の確認



第3図 調査区配置図

調査を行った。調査では、まず $3 \times 22m$ の南北トレンチを設定し、さらに北端を東に 4 m、西に 2.5 m、南端で東に 4.5 m 強張した。現況はコンクリート敷き駐車場であり、厚さ約 90cm の盛土がある。古代の官衙関連の遺構検出面ははっきりとしなかったが、4 b 層および 5 層がそれにあたると想定されたため精査を行ったが、柱穴跡や住居跡等の遺構は発見されなかった。しかし、中央部壁面に 4 b 層より新しい時期の落ち込みが認められた。幅約 3.5 m、深さ約 20cm で、東西にのびる溝状の落ち込みである。堆積土は 4 a 層に類似する自然堆積層であり、遺物は出土していない。基本層 1 層より土器類と須恵器の小片が各 1 点出土しているが、時期は不明である。下層においては、水田土壌と考えられる土層を確認した。

のことから、下層の水田跡についての本調査が必要と判断し、申請者側と再度協議を進めた。その結果、同年 7 ~ 8 月に発掘調査を行うこととした。

調査区は南北に長く設定し、 $8 \times 22m$ の範囲を約 1.4 m 下の 6 層上面まで重機で掘り下げ、中央部の $4 \times 20m$ の範囲で 7 層以下の精査を行った。排水と土層観察のため、西側に側溝を設けた。

平面実測には平板を用い、任意に設置した基準点 2 点の測量を委託し、郡山遺跡の測量基準線に対応させた。また、2か所の土壤を探取し、プラント・オパール分析を行った。

なお本調査と並行して、付属棟予定地に $2 \times 9m$ 、貯水槽予定地に $3 \times 5m$ のトレンチを設定し、確認調査を行った。

4 基本層序

以下の 12 層を確認した。

1 層：旧水田耕作土。

2 層：上部に酸化鉄集積。下部にオリーブ黒色粘土の層がある。

3 層：一部に暗い黒褐色粘土が粒状に混じる。

4 a 層：下部ににぶい黄色粘土がブロック状に混じる。

4 b 層：上層の影響で残りが悪い。

5 層：一部に褐色粘土が混じる。須恵器 1 点出土。

6 層：南側下部に少し厚めに、黒色粘土の薄い層が混じる黄灰色粘土の層あり。自然堆積層か。

7 a 層：層下面に多少乱れあり。灰白色粘土がごく少量混じる。水田耕作土の可能性を考えられる。

7 b 層：層下面の乱れが顕著。上部はやや明るく、下部は暗い色調。暗い色が残らない箇所もある。水田耕作土と考えられる。

8 層：南側では確認できるが、北側では残り悪い。

9 層：層下面の乱れが顕著。10 層の黒色粘土が粒状に混じる。水田耕作土と考えられる。

10 層：層下面は比較的平坦。北側下部にのみ灰黄色粘土（上部は暗く、下部は明るい色調）が存在。南側では互層が 11 層直上まで続く。自然堆積層と考えられる。石器 1 点出土。

11 層：層下面は比較的平坦。北側では乱れが見られる箇所も多い。

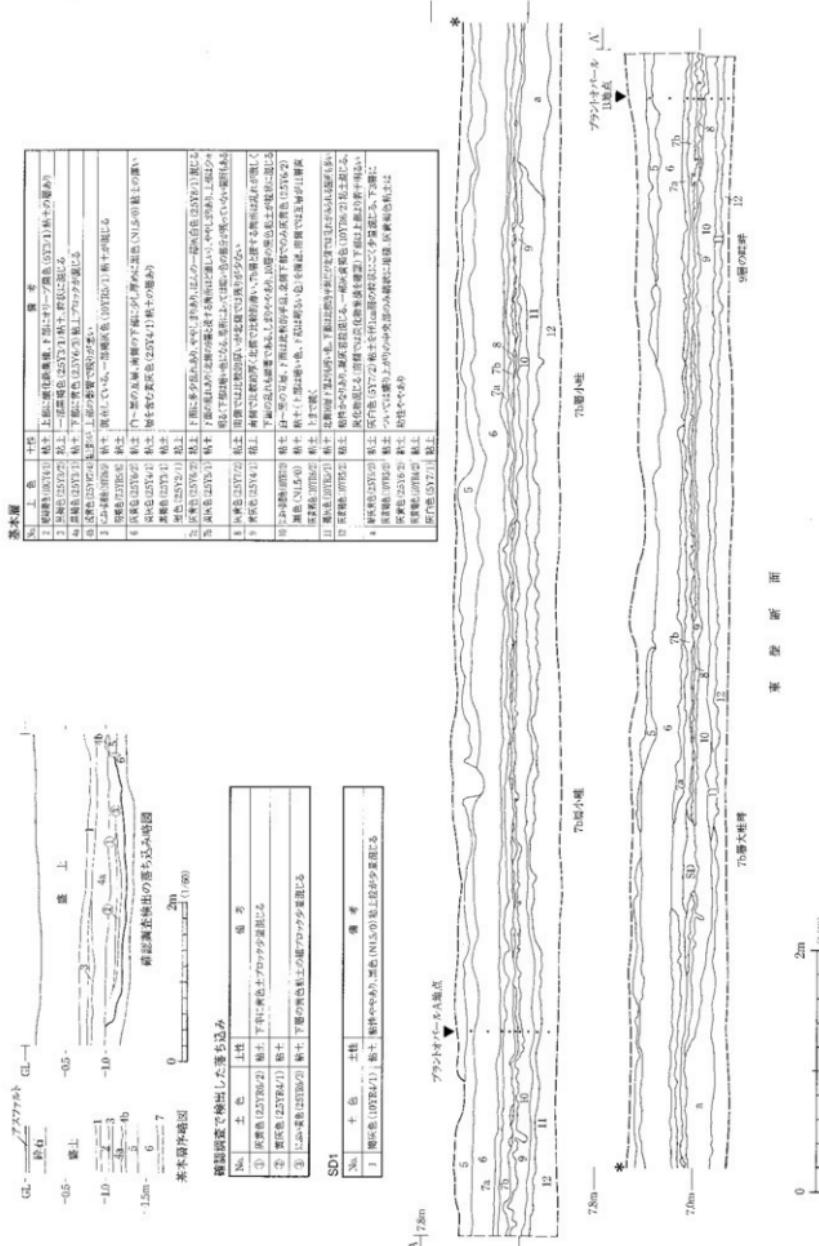
12 層：南側で一部に炭化物が集積。下部は上部より明るい。

5 発見遺構と出土遺物

(1) 情報センター棟部分

7 b 層検出遺構（第 5 ・ 8 図）

水田跡 眇跡状の高まりを 6 条、水田区画 5 区画を検出した。



第4圖 土層斷面圖

5 (2) 郡山遺跡（第141次調査）

大畦と考えられる畦畔状の高まりは、調査区南部に位置し、方向はW34° Nと北西方向にのびる。上幅約100cm、下幅130~150cm、高さ6~8cmである。小畦と考えられる畦畔状の高まりは、北部に位置し、4条はN36°~45° Wと北西方向で、1条はそれらに直交する北東方向にのびる。上幅30~40cm、下幅40~60cm、高さ2~3cmである。第8図に、水田面の区画と標高を示した。

小畦には畦の切れ目が2か所確認され、水口と考えられる。区画②と③の間の切れ目は、幅約30cm、深さ約2cmである。区画③と④の間の切れ目は、幅約40cm、深さ約2cmである。

水田区画は、調査区が狭いため全体の分かるものはない。水田面の標高は7.05m~7.16mであり、区画②が高く、区画⑤が低く、南に向かいだんだんに低くなる。水口部では、②→③→④と水が流れたと推定される。

7 b層の下面は乱れが顕著であり、水田耕作土と考えられる。層の下面では、畦畔状高まりの下部においてほぼ同方向の擬似畦畔が確認された。

8層検出遺構（第5図）

溝跡 7 b層の大畦の下部で、同方向の溝跡が検出された。上幅約100cm、下幅約40cm、深さ5~8cmである。遺物は出土していない。

9層検出遺構（第5図）

水田跡 畦畔状の高まり1条、畦畔跡と考えられる土色の違う部分1条、水田区画2区画を検出した。

大畦と考えられる畦畔状の高まりは、調査区南部に位置し、N44° Wと北西方向にのびる。上幅約60cm、下幅100~150cm、高さ約3cmである。土色の違う部分は北側に位置する。

水田区画は全体の分かるものはない。標高は7m~7.11mであり、南に向かってだんだん低くなる。

9層の下面は乱れが顕著であり、水田耕作土と考えられる。層の下面では、大畦の下部においてほぼ同方向の擬似畦畔が確認された。

12層上面検出遺構（第6図）

北部で凹凸地形を検出した。高まりと落ち込みがみられるが不整形である。中央部にも高まりがみとめられる。
基本層出土遺物（第7図）

堀面の5層中より須恵器壺の体部片1点、10層上面より石器1点（第7図）が出土している。石器は剥離痕が不明瞭だが、剥片と考えられる。

(2) 付箇棟増築予定地確認調査（第3図）

遺構は発見されなかった。遺物は、須恵器壺の頸部片1点が出土している。土層は西方向に傾斜している。

(3) 受水槽建設予定地確認調査（第3図）

遺構は発見されなかった。盛上下で、河川堆積層と考えられる砂層を確認している。

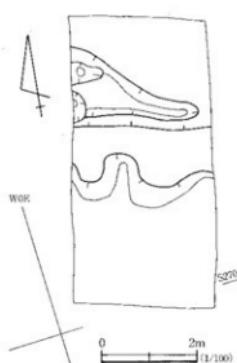
6.まとめ

7 b層および9層において畦畔状の高まりを検出したが、土壤のプラント・オパール分析の結果（P63~）もあわせると、両層において水田耕作が行われていたと考えられる。各層の所属時期については、遺物が出土していないことから不明である。

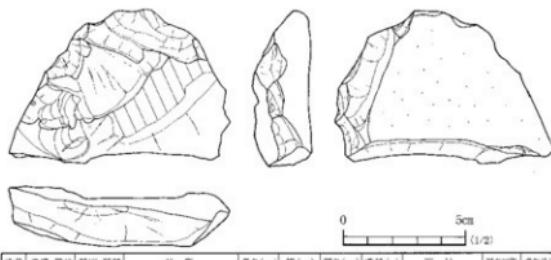
近接する郡山遺跡第65次調査（注1）でも今回同様に下層において水田跡が発見されているため、対応関係を考えたい。土層で対比すると、若干土色の違いがあるが、第65次のⅧa層が今回の7 b層に、第65次のⅨa層が今回の9層に対応する可能性が高い。遺構でみると、第65次D区Ⅷa層の畦畔方向と今回の7 b層畦畔の方向がほぼ同方向である。また、第65次E・O区のⅨa層と今回の9層の畦畔もほぼ同方向である。第65次調査では、Ⅷa層・Ⅸa層は弥生時代に位置づけていることから、今回の7 b層・9層も弥生時代に所属する可能性が考えられる。



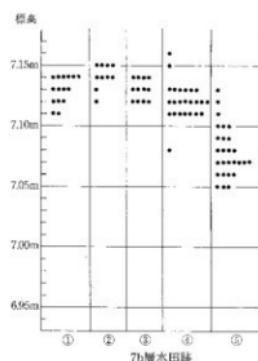
第5図 7b・8・9層平面図



第6図 12層上面平面図



第7図 出土遺物



第8図 7b層9層水田跡の標高

7 a 層は、層下面に多少乱れがあり、プラント・オパール分析からみても水田耕作土の可能性がある。しかし、畦畔等の遺構は検出されなかった。

8 層上面検出の溝跡は、7 b 層の大畦の直下であることから、水田耕作と何らかの関係のある遺構の可能性が考えられる。8 層は、プラント・オパール分析からは水田耕作土の可能性は低いとされる。

10 層上面出土の石器は、上層の 9 層水田耕作時に使用されていたものが沈み込んだ可能性がある。

12 層で検出された凹凸地形は、第65次調査 I 区・II 区 XI 層で検出されているような、風倒木痕跡の可能性が考えられる。

注 1 仙台市文化財調査報告書第156集（1992）『宮城県仙台市 郡山遺跡 - 第65次発掘調査報告書 -』仙台市教育委員会

仙台市、郡山遺跡第141次調査のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および占植生・占環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

郡山遺跡第141次調査の発掘調査では、7 b層と9層において水田跡が検出された。そこで、これらの層における稻作の検証とその他の層における稻作の可能性を検討するために、プラント・オパール分析を行うことになった。

2. 試料

調査地點は、調査区東壁の北側（A地点）と南側（B地点）の2地点である。分析試料は、両地点ともに上位より灰黄色粘土、黄灰色粘土、黒褐色粘土および黒色粘土の互層（6層）、灰黄色粘土（7a層）、黄灰色粘土（7b層、水田耕作土）、灰黄色粘土（8層）、黄灰色粘土（9層、水田耕作土）、にぶい黄橙色粘土、黒色粘土および灰黃褐色粘土の互層（10層）、褐灰色粘土（11層）および灰黃褐色粘土（12層）において、それぞれ8点ずつの計16点が採取された。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。すなわち、1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）、2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）、3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理、4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散、5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去、6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成、7) 検鏡・計数の順である。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48およびクマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケア科（ネザサ節型、クマザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1と図2に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田造構が検出されていた7 b層と9層では、A地点、B地点ともにイネのプラント・オパールが検出されている。このうち、7 b層ではプラント・オパール密度が2,800個/gと5,100個/gであり、稲作跡の検証や探査を行う際の基準値である3,000個/gに匹敵するかそれ以上である。したがって、7 b層については稲作跡である可能性が高いと判断される。一方、9層ではA地点で2,000個/g、B地点で1,400個/gといずれもやや低いプラント・オパール密度である。もし、9層で稲作が行われていたとするならば、1) 稲作の行われていた期間が短かった、2) 稲葉の大半が水田の外へ持ち出されていた、3) 土層の堆積速度が速かった、4) 稲の生産性が低かった、などが考えられるがここでの主な要因は不明である。これら以外では、7 a層、8層および9層でもイネのプラント・オパールが検出されている。これらのうち7 a層では、A地点で2,700個/g、B地点で3,300個/gとともに高いプラント・オパール密度である。また、どちらも直上の6層からはイネはまったく検出されていないことから、上層から後代のプラント・オパールが混入したことは考えにくい。こうしたことから、7 a層においても稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。また、9層ではプラント・オパール密度は2,000個/gと1,400個/g低いものの、いずれも直上層よりも高い密度であり小さいながらピークとなっている。のことから、9層では調査地点もしくは近傍において稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、8層についてはプラント・オパール密度が低いことから、上層からの混入である可能性が高い。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）をみてみると、両地点とも下位の12層と11層ではネササ節型あるいはクマザサ属型が優勢である。また、ススキ属型も検出されることから、両層の堆積時は調査区周辺は比較的乾いた環境であったと推定される。その後、B地点では10層、9層、7 b層、A地点では6層でヨシ属がそれぞれ優勢となっていることから、これらの層の堆積時は調査域は湿地的環境になったと推定される。なお、これらの層でも周辺にはススキ属、ネササ節やクマザサ属などのササ類が生育していたと推定される。

6.まとめ

郡山遺跡第141次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、水田跡が検出されていた7 b層と9層では、いずれもここで稲作が行われていたことが認められ、分析的にも両層が水田跡であることが確認された。また、7 a層と9層についても調査地点あるいは近傍で稲作が行われていたことが示唆された。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞壁酸体、富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(I)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17、p.73-85.

表1 仙台市、郡山遺跡第141次調査のプランツ・オバール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名) / 試料	A地点						B地点									
	6	7a	7b	8	9	10	11	12	6	7a	7b	8	9	10	11	12
イネ科 Gramineae (Grasses)																
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)				27	28	18	20				33	51	10	14		
ヨシ属 <i>Poaceae</i> (grass)	20	5			7				7	7	20	18	15			
ススキ属 <i>Miscanthus</i> type	5	23		7	6	10	26			50			5	17		
タケ属 <i>Bambusoideae</i> (bamboo)																
ホゲササ属 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Makinoi</i> type	15	109	65	54	40	13	152	269	20	7	41	35	32	15	125	371
タマザサ属 <i>Sasa</i> (except <i>Makinoi</i>) type	80	136	57	119	133	71	131	25	80	46	36	60	65	35	98	222
その他 Others	20	11	22	6	7	10		7	29	5	5	10	5	6		
未分類 Unknown	141	240	170	113	139	136	222	233	142	161	147	101	102	80	120	222
プランツ・オバール総数	276	536	385	309	351	227	508	538	261	297	305	221	235	155	350	637

おもな全植物の推定生産量 (単位: kg/m² · cm)

イネ科 <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.80	0.83	0.52	0.58	0.97	1.49	0.30	0.41	
ヨシ属 <i>Poaceae</i> (grass)	1.37	0.34		0.42	0.41	0.49	1.26	1.16	0.95
ススキ属 <i>Miscanthus</i> type									
ホゲササ属 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Makinoi</i> type	0.67	0.28	0.08	0.08	0.13	0.25		0.13	
タマザサ属 <i>Sasa</i> (except <i>Makinoi</i>) type	0.07	0.52	0.41	0.26	0.19	0.08	0.73	1.29	0.09
その他 Others	0.60	1.02	0.42	0.89	0.99	0.54	0.99	0.19	0.64
タマザサ属 <i>Sasa</i> (except <i>Makinoi</i>) type	0.60	1.02	0.42	0.89	0.99	0.54	0.99	0.19	0.64
未分類 Unknown	0.60	1.02	0.42	0.89	0.99	0.54	0.99	0.19	0.64

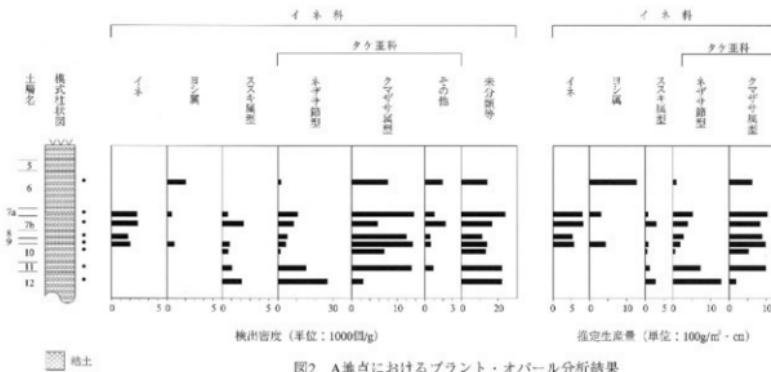


図2 A地点におけるプランツ・オバール分析結果

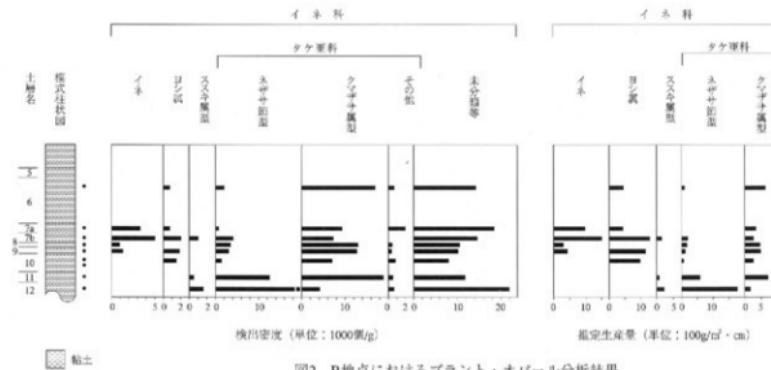


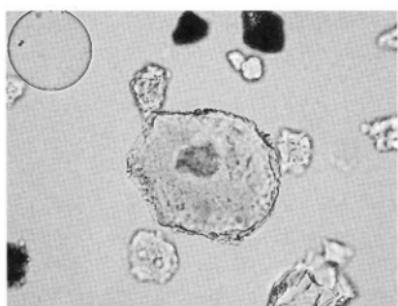
図2 B地点におけるプランツ・オバール分析結果



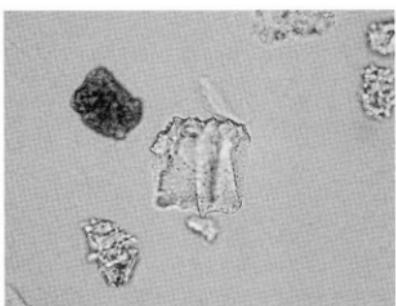
イネ



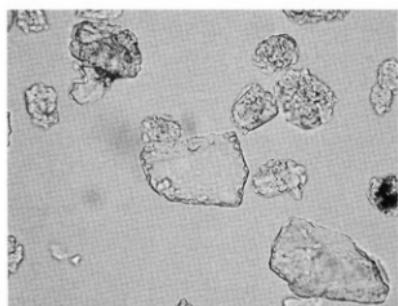
イネ



ヨシ属



ネザサ節型



クマザサ属



スキ属

— 50 μ m

プラント・オパールの顕微鏡写真



写真1 調査前 (北より)

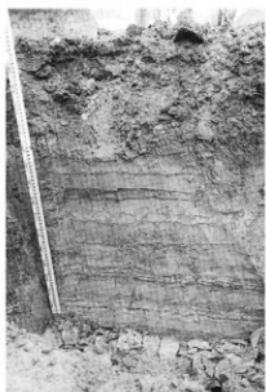


写真2 南東壁断面 (北より)



写真3 確認調査全景 (南より)

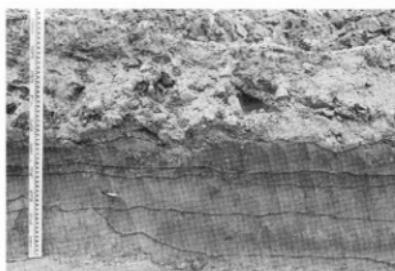


写真4 確認調査検出 落ち込み断面 (西より)



写真5 西壁上層断面 (東より)

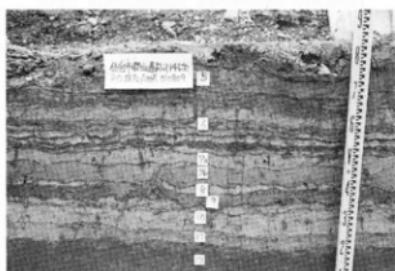


写真6 東壁断面①



写真7 東壁断面②

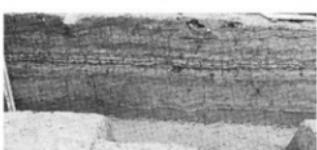


写真8 東壁断面③



写真9 東壁断面④

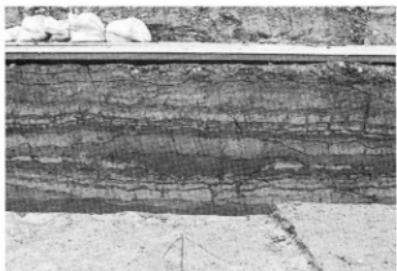


写真10 東壁断面⑤



写真11 東壁断面⑥

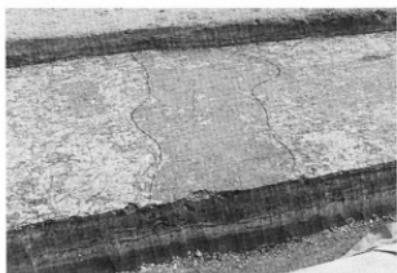


写真12 7b層珪片検出状況（西より）



写真13 7b層珪片検出状況（東より）



写真14 7b層上面全景（南西より）



写真15
7b層上面全景
(北より)



写真16 7b層上面北部（東より）



写真17 模似珪片（西より）

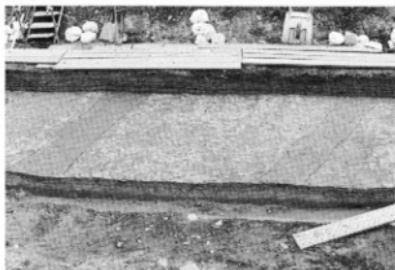


写真18 9層珪群検出状況（西より）



写真19
9層上面全景
(南より)

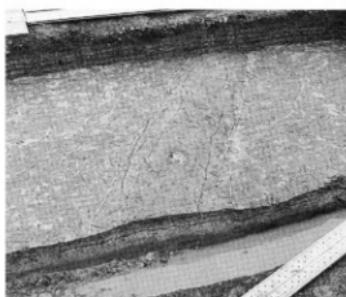


写真20 9層の珪群（西より）



写真21 9層の珪群（北より）



写真22 8層上面の溝跡
(西より)

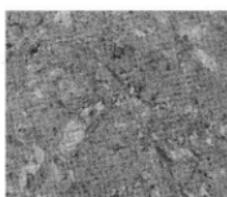


写真23 9層の土壤の状況

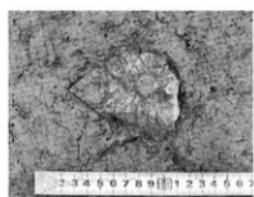


写真24 石器出土状況

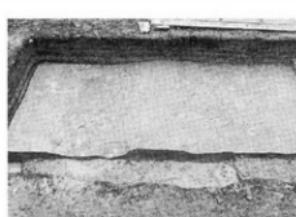


写真25 12層北部の凹凸（西より）

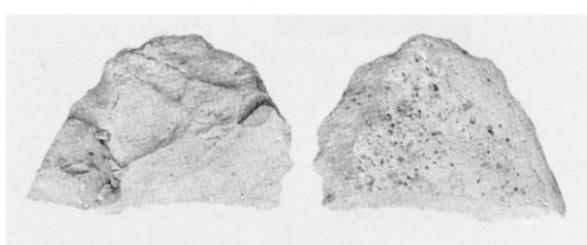


写真26 出土石器

6 富沢館跡

1 調査要項

遺 跡 名 富沢館跡 (01246)

調 査 期 間 平成13年10月2日～4日

調 査 地 点 仙台市太白区富沢字館32-1

調 査 主 体 仙台市教育委員会（文化財課）

調 査 原 因 個人専用住宅の建築

担 当 職 員 主査 吉岡恭平 教諭 豊村幸宏

対 象 面 積 131m²

文化財教諭 村上秀樹

調 査 面 積 63.5m²

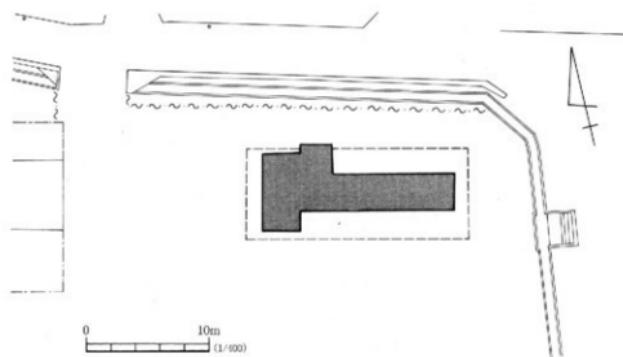
2 遺跡の位置と環境（第1・2図）

遺跡は、名取川の北側で笊川の南岸に位置し、自然堤防上に立地する。紫桜氏の著書によると、当地は「入生田屋敷」と呼ばれ、水濠、土塁に囲まれた城館跡とされている（注1）。今回の調査区は、そのほぼ中心部にある。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

第2図 調査区の位置 (1/2,500)



第3図 調査区配置図

3 調査に至る経過と調査方法（第3図）

当該地において個人専用住宅の建築が計画されたため、協議を行い確認調査を行うこととした。まず、 3×16.5 mのトレーナーを設定して調査を行ったが、西端で大規模な溝跡が検出されたため、その周辺を拡張し、引き継ぎ溝跡の調査を行った。

4 基本層序（第4図）

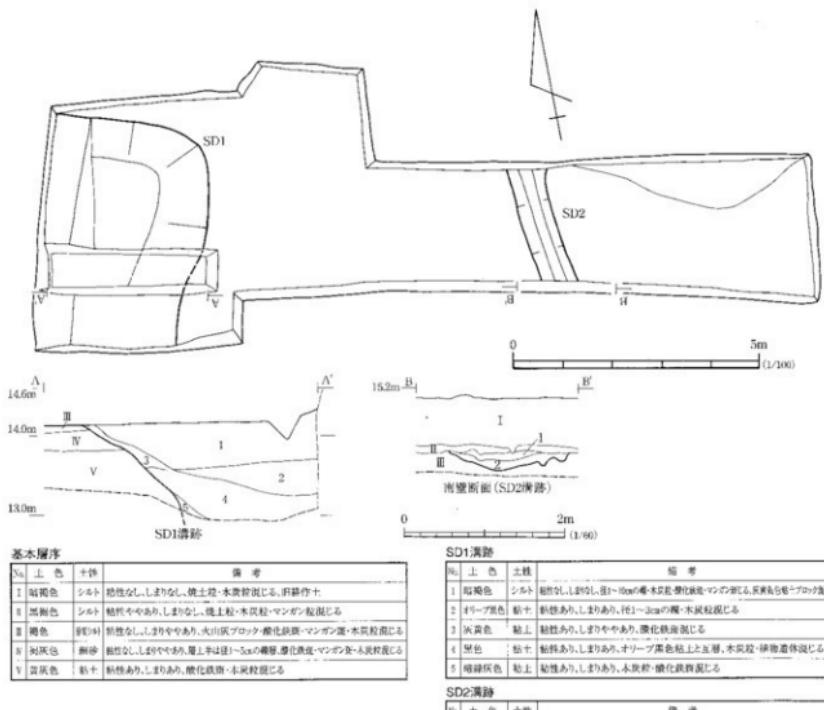
現況は畑で、耕作土（I層）は厚さ約60cmである。厚さ約10cmの黒褐色シルトのII層があり、その下のIII層褐色砂質シルト上面で遺構が検出された。III層の上部には、灰白色火山灰と考えられるブロックが混じる。

5 発見された遺構と遺物（第4図）

溝跡2条が発見された。

SD1溝跡

調査区西端で検出した。規模は東西幅4.5m、南北幅3mで、北・東岸を検出しており、溝跡の端部もしくは角部と推測される。深さは1.3mまで掘り下げたが中断したため、底面は検出していない。



第4図 遺構平断面図

番号	遺物・部位	種別・型種	特徴	発見場所	年代	発見者	法 番(さ)			写真図版	登録番号
							口 径	底 径	厚 度		
1	SD1-1層 埴輪陶器-水注?	灰陶	外 面 古瀬戸 (13C)	内 室	統存		法 番(さ)	口 径	底 径	厚 度	7-1 1-1
2	壺	縦縫合	外 面	内 室	統存		法 番(さ)	口 径	底 径	高	7-1 1-1
3	壺	土器器身合付环	ヘラタガキ(不明瞭)、黑色施輝	底部	1/4		法 番(さ)	口 径	底 径	高	D-2
4	壺	土器器身合付环	ヘラタガキ、黑色施輝	底部	3/4		法 番(さ)	口 径	底 径	高	D-1
5	壺	縦縫合	外 面	内 室	统存		法 番(さ)	口 径	底 径	高	写真図版 登録番号
6	壺	縦縫合	口唇:溝文(LR) 腹:ハナメ状痕跡→3コナガ、刻突、溝文(LR)	内 室			法 番(さ)	口 径	底 径	高	7-2 B-1

第5図 出土遺物

造構の掘り込み層は基本層Ⅱ層である。堆積土は5層に分けられる。1・3層と2層の間に酸化鉄の集積層があり、層理面をなしている。

1層からはロクロ使用土器類、陶器が少量出土している。第5図1は古瀬戸水注の肩部片であり、注口がはがれている。破片資料ではあるが、肩が張る点と、注口の付く位置から、「藤澤編年の前Ⅲ期（13世紀第3四半期頃）」に位置づけられる（注2）。

S D 2 溝跡

S D 1 溝跡の東に位置する。壁面で確認した掘り込み層は基本層Ⅲ層上面なので、S D 1より古い溝である。幅70cm、深さ10cmである。遺物は出土していない。

6 まとめ

発見されたS D 1 溝跡は、機能していた時期は不明であるが、規模が大きい点から富沢館跡に関係する溝跡である可能性が考えられる。今回の調査区では、建物跡や戸井跡等の遺構は発見されなかったため、S D 1 溝跡より南西側にそれらの遺構が展開することが予想される。

注1 紫桃正隆（1974）『史料仙台城内古城・塹』4

注2 藤澤良祐氏より、実測図と写真をもとにご教示を得た。

参考 （財）瀬戸市埋蔵文化財センター（1997）「（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要」第5輯



写真1 調査前全景（南より）



写真2 基本層序・SD2断面（北より）



写真3
調査区全景（西より）



写真4 SD1溝跡（東より）



写真5 SD1溝跡断面



写真6 SD2溝跡（南より）

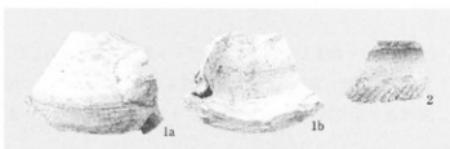


写真7 出土遺物

7 下ノ内浦遺跡（第6次調査）

1 調査要項

遺跡名	下ノ内浦遺跡（01368）	担当職員	教諭 豊村幸宏 主事 渡部紀
調査地点	仙台市太白区長町南4丁目32番6ほか	調査参加者	蓮沼秀子 蓮沼英子 伊藤征子
調査原因	共同住宅の建築		横山由記子 高橋美香 小田嶋祥子
面積	対象400m ² 調査310m ²		赤間眞 板橋栄子 小川良子 相原実
調査期間	平成13年6月4日～6月22日	申請者	株式会社大京東北支店
調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）	調査協力	みやぎ生活協同組合

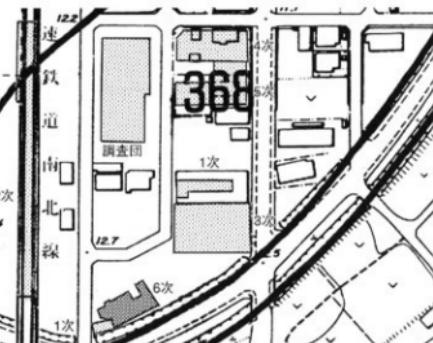
2 遺跡の位置と環境（第1・2図）

下ノ内浦遺跡は仙台市街地の南部に位置する。名取川の北側を流れる小河川荒川の北岸に位置し、荒川の形成した自然堤防上に立地する。

これまで、仙台市教育委員会による5次にわたる調査（注1～5）と、発掘調査による調査（注6）が行われており、縄文時代早期から近世にかけての遺構が重層的に発見されている。今回の敷地内では、これまで第1・3次調査が行われている。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)



第2図 調査区の位置 (1/2,500)

3 調査に至る経過と調査方法（第3図）

当該地において、平成12年に株式会社大京東北支店による共同住宅の建築が計画されたため、協議のうえまず確認調査を実施した。その結果、計画建物の西半分において遺構が発見され、本調査が必要と判断された。再度協議し、平成13年度に土地所有者であるみやぎ生活協同組合と発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

現況は店舗の駐車場である。アスファルト、盛土、表土は重機で除去し、Ⅲ層上面でピット等の遺構を検出した。重機掘削の際、誤って南半部はやや面を下げすぎてしまった。遺構の実測基準点は、2点を任意に設定し、後に国家座標値（平面直角座標系X）の測量を委託した。基準点1がX = -198303.337, Y = 3666.576、基準点2がX = -198311.798, Y = 3650.685である。

4 基本層序（第4図）

基本層序は5層確認している。駐車場アスファルト下には厚さ約50cmの盛土があり、その下に山表土と推定されるⅠ層がある。黒褐色のⅡ層をはさみ、オーリープ褐色のⅢ層砂質シルト層の上面で遺構が検出された。Ⅳ層は灰白色火山灰が主体であり、以下砂層が続く。Ⅴ層以下は南に傾斜している。

基本層序が砂質シルト層や砂層であり、火山灰層が傾斜して堆積したりする状況から、全体が河川堆積層と考えられる。北東に位置する3次調査区では、堆積層中に灰白色火山灰層のみられる河川跡を検出していることから、今回の調査区は3次調査で確認した埋没河川跡にあたっていると考えられる（第10図）。

5 発見された遺構と遺物（第5～9図）

Ⅲ層上面で土坑7基、ピット213基、溝1条が発見された。前後関係は、SK1・2・3・4上坑、SD1溝跡はピットより古い。SK5土坑はSD1溝跡、ピットより新しい。

S K 1 土坑（第6図）

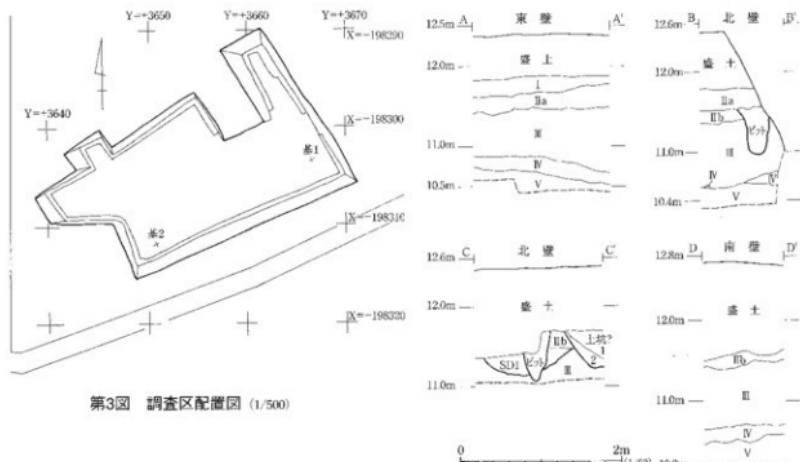
長さ110cm以上、幅70cm、深さ28cmの梢円形である。堆積土中から、土器片（ロクロ、非ロクロ、第9図1）、赤焼土器片が少量出土している。

S K 4 土坑（第6図）

長さ135センチ、幅90cm、深さ10cmの梢円形である。堆積土2層が灰層である。出土遺物はない。

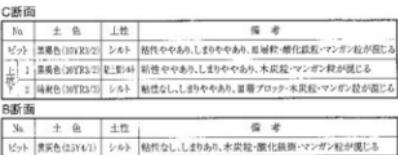
S D 1 溝跡（第5・7図）

幅80～100cm、長さ22m以上で、調査区を斜めに横断している。方向は、N80°Wである。堆積土1層より、純

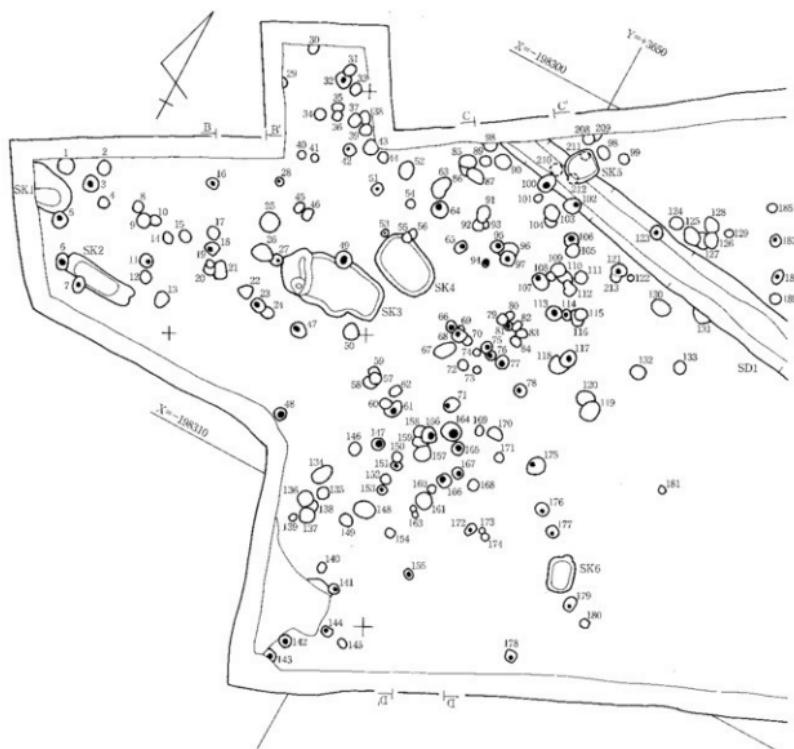


第3図 調査区配置図 (1/500)

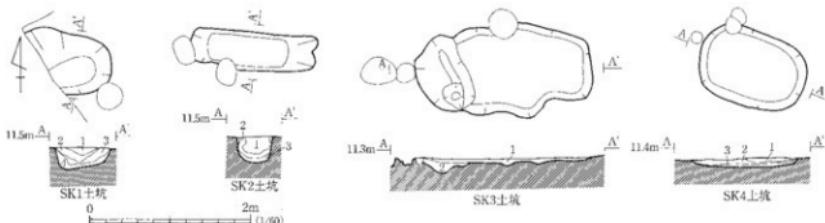
第4図 壁断面図



基本層序		
No	土色	土性
1	黒褐色(3LYR3/2)	シルト
2	黄褐色(10YR3/2)	シルト
3	黒褐色(10YR2/2)	瓦礫付
4	灰褐色(10TB4/4)	砂質シルト
5	灰褐色(10TB4/4)	シルト
6	黒褐色(10TB4/4)	細砂



第5図 遺構配置図



SK1土坑

No.	土色	土性	備考
1	黄褐色(10YR4/2)	砂質・軟弱・少塑泥じる	
2	褐紫色(10PB2/1)	にじみ・黄褐色土ブロック少量混じる・軟土・軟片少塑泥じる	
3	灰褐色(10YR4/3)	基本層正層・ブロック多く混じる	
4	基本層正層上主体で灰褐色土色(10YR4/3)小ブロック少量混じる		

SK2土坑

No.	土色	土性	備考
1	土色(10Y4/2)	砂質・軟弱・少塑泥じる	
2	CD・赤褐色(10YR4/3)	基本層正層・ブロック少量混じる	

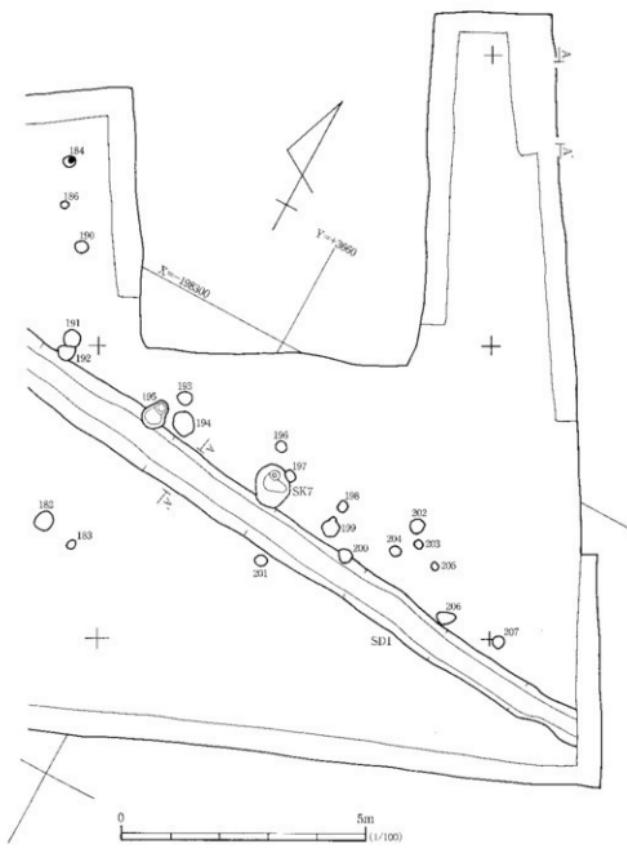
SK3土坑

No.	上色	下性	備考
1	灰褐色(10Y4/2)	シルト	
2	堆・土上主体で基本層正層の小ブロック少塑泥じる		
3	基本層正層上主体で灰褐色土色・小ブロック混じる		

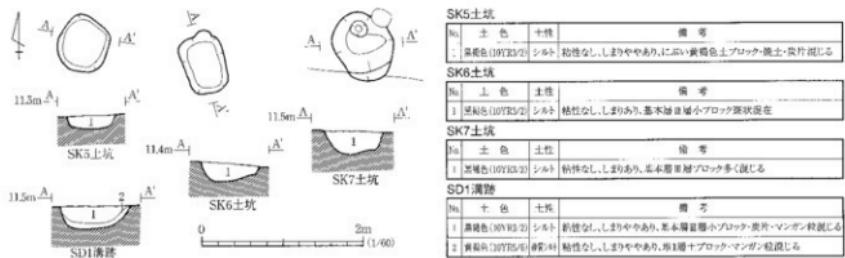
SK4土坑

No.	土色	土性	備考
1	灰褐色(10Y4/2)	各層貝殻小ブロック少塑泥じる・軟土・軟片わずかに混じる	
2	灰・灰土主体の層・基本層正層・ブロック少塑泥じる		
3	灰褐色土色(10Y4/2)	シルト・基本層貝殻小ブロック少塑泥じる・堆・軟片わずかに混じる	

第6図 遺構平面図(1)



第5図 遺構配置図



第7図 遺構平面図(2)

7 下ノ内溝遺跡（第6次調査）

文土器、ロクロ土師器、赤焼土器が少量出土しているが、底面からの出土遺物はない。堆積上上面でピットが検出されるが、溝底面で検出されたピットもある。

ピット（第5図・第1表）

全部で213基発見された。規模については第1表にまとめた。深さについては、検出面を掘りすぎてしまっているため、壁面で確認したⅢ層上面のレベルから推定した深さとしている。柱痕跡が認められるピットもある。ピット堆積上からの出土遺物はごく少量で、時期不明の土師器、ロクロ土師器、赤焼土器などの細片である。最も新しい遺物として、P118底面から、龍泉窯産の青磁碗の小片が出土している（第9図5）。平面図作成後の図上での検討で、以下の2棟の掘立柱建物跡を復元した。2棟の前後関係は不明である。

S B 1 建物跡（第8図）

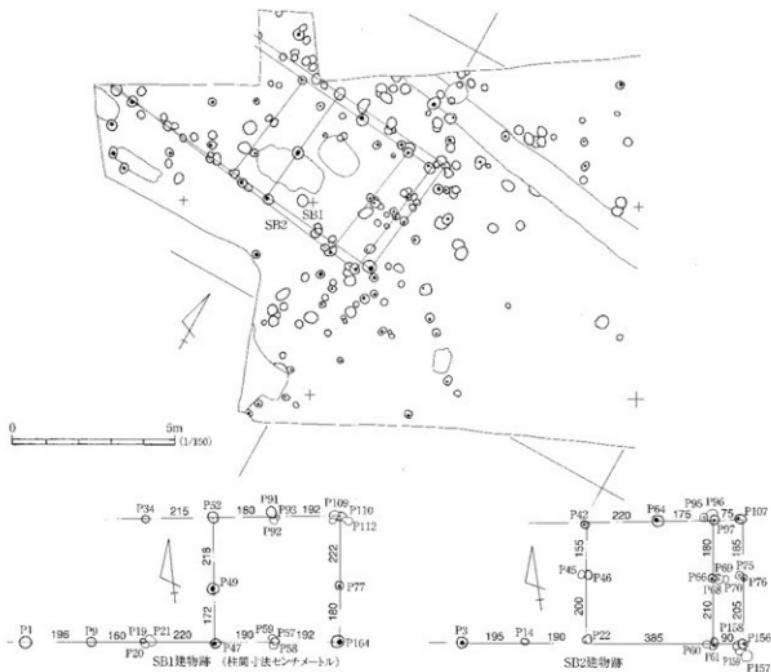
桁行5間以上、梁行2間の東西棟建物跡と考えられる。桁行の長さ9.6m以上、梁行の長さ3.9m、方向は、N 6° Eである。

S B 2 建物跡（第8図）

桁行5間以上、梁行2間の東西棟建物跡と考えられる。桁行の長さ8.7m、梁行の長さ3.9m、方向は、N 8° Eである。

基本層出土遺物

基本層Ⅰ層、Ⅱ層からは、土師器（ロクロ、非ロクロ）片が出土しているが、図示できない小片である。

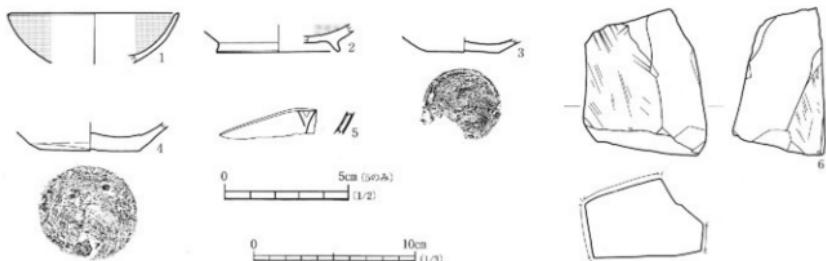


第8図 掘立柱建物跡

6まとめ

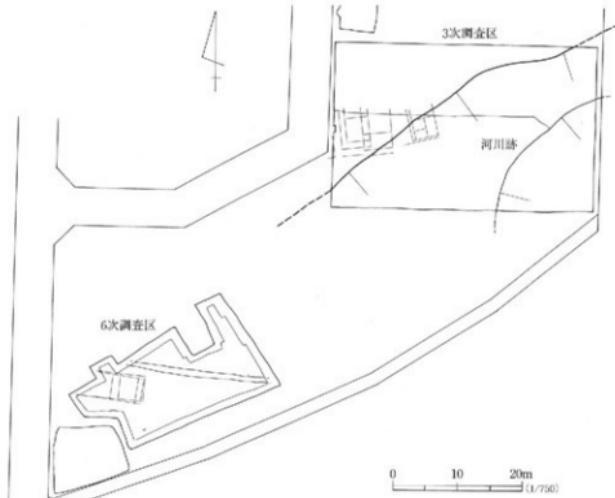
今回の調査区は、3次調査で確認した埋没河川跡にあたっており、河川跡堆積層中に灰白色火山灰層があることから、検出された遺構の時期は平安時代後半以降と考えられる。ピット群に関しては、輸入磁器の破片が出土していることから、中世か、それ以降と考えられる。各遺構の下限の時期については不明である。

3次調査でも掘立柱建物跡が発見されているが、今回の建物跡とは方向性が若干異なる（第10図）。



番号	遺構・部位	種類	外観	内面	残存	法量(cm)				写真図版	登録番号
						口	井	底	高		
1	SK1	土器蓋環	マメツ・黒色鉢形	ヘラミガキ・黒色鉢形	L1縦幅1/5	10.4				C-1	
2	SK1+1～3M	土器副高台付环	コクコナツ・円板系切刃	ヘラミガキ・黒色鉢形	底部1/8				(7.6)	D-2	
3	SD1	赤焼土器-16	圓軸系切刃		底部-完形				4.4	T-1	
4	PtG2	赤焼土器-5	圓軸系切刃	コテのあて口あり	底部-完形				6.0	T-2	
番号	遺構・部位	種類	特徴	産地	年代	残存	法量(cm)				写真図版
5	P118底面	青磁-瓶	蓮瓣文	龍泉窯系	13C ^b					1-1	J-1
番号	遺構・部位	種類	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号	
6	P4	石臼		9.3	7.5	1.8	360		1-2	K-1	

第9図 出土遺物



第10図 3次、6次の合成図

第1表 ピット計測表

(単位:センチメートル)

No.	深さ	土色	No.	深さ	土色	No.	深さ	土色	No.	深さ	土色	No.	深さ	土色		
1	51	B	41	49	B	81	40	A	121	37	A	161	52	201	60	
2	36	B	42	44	B	82	43	C	122	21	B	162	43	202	52	
3	37	A	43	59	C	83	39	C	123	41	B	163	51	203	43	
4	39	C	44	53	C	84	37	C	124	35	C	164	58	A	204	35
5	49	A	45	47	C	85	40	C	125	56	C	165	62	A	205	37
6	57	A	46	52	C	86	31	C	126	34	C	166	65	A	206	54
7	47	A	47	67	A	87	46	C	127	25	C	167	58	A	207	36
8	43	C	48	79	B	88	45	C	128	30	C	168	48	C	208	39
9	47	C	49	62	B	89	62	C	129	21	C	169	58	C	209	30
10	41	C	50	75	C	90	37	C	130	38	C	170	33	C	210	59
11	67	A	51	39	A	91	50	C	131	23	C	171	28	C	211	41
12	43	C	52	59	C	92	44	C	132	36	C	172	63	A	212	51
13	46	C	53	46	A	93	35	C	133	30	C	173	43	C	213	44
14	47	C	54	34	C	94	41	B	134	65	C	174	43	C	214	43
15	61	C	55	52	C	95	52	B	135	56	C	175	52	A	215	43
16	62	A	56	48	C	96	44	C	136	69	C	176	51	A	216	43
17	54	C	57	64	C	97	58	B	137	79	C	177	50	A	217	43
18	74	A	58	53	C	98	24	C	138	64	C	178	73	A	218	43
19	52	C	59	56	C	99	22	C	139	54	C	179	57	A	219	43
20	49	C	60	59	C	100	53	B	140	67	C	180	55	C	220	43
21	52	C	61	60	A	101	28	C	141	68	B	181	29	C	221	43
22	52	C	62	46	C	102	53	A	142	65	A	182	41	C	222	43
23	70	A	63	34	C	103	53	C	143	69	A	183	22	C	223	43
24	51	C	64	43	A	104	33	C	144	76	B	184	30	A	224	43
25	49	C	65	40	A	105	45	C	145	71	C	185	23	C	225	43
26	81	C	66	56	A	106	43	A	146	70	C	186	27	C	226	43
27	50	A	67	39	C	107	54	A	147	61	A	187	30	A	227	43
28	49	A	68	63	A	108	48	C	148	104	C	188	28	A	228	43
29	47	C	69	28	C	109	41	C	149	68	C	189	22	C	229	43
30	48	C	70	35	C	110	27	C	150	50	C	190	38	C	230	43
31	52	C	71	62	A	111	23	C	151	50	A	191	29	C	231	43
32	57	B	72	29	C	112	40	C	152	52	C	192	34	C	232	43
33	38	C	73	28	C	113	36	A	153	63	A	193	26	C	233	43
34	45	C	74	25	C	114	43	A	154	58	C	194	39	C	234	43
35	44	C	75	49	B	115	29	C	155	62	B	195	56	C	235	43
36	68	C	76	51	B	116	19	C	156	84	A	196	49	C	236	43
37	49	C	77	51	B	117	39	B	157	51	C	197	29	C	237	43
38	35	C	78	51	A	118	63	C	158	56	C	198	38	C	238	43
39	49	C	79	61	C	119	39	C	159	43	C	199	47	C	239	43
40	41	C	80	35	C	120	31	C	160	43	C	200	42	C	240	43

土 色		土 性	備 考
A	翻の方 黒褐色 (10YR3/2)	シルト	基本層Ⅲ帯土小ブロック混じる
	柱根 黒色 (10YR2/1)	シルト質粘土	
B	翻の方 黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	炭片多量に混じる
	柱根 黒色 (10YR2/1)	シルト質粘土	
無	印 黒褐色 (10YR3/2)	シルト	基本層Ⅲ帯土小ブロック混じる

注1 仙台市文化財調査報告書第59集(1983)『下ノ内浦遺跡』仙台市教育委員会

注2 仙台市文化財調査報告書第115集(1988)『下ノ内浦遺跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会

注3 仙台市文化財調査報告書第207集(1996)『下ノ内浦・山口遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書V－』仙台市教育委員会

注4 仙台市文化財調査報告書第173集(1993)『下ノ内浦遺跡第4次発掘調査報告書』仙台市教育委員会

注5 仙台市文化財調査報告書第202集(1995)『下ノ内浦遺跡第5次発掘調査報告書』仙台市教育委員会

注6 下ノ内浦遺跡調査団(1988)『宮城県仙台市下ノ内浦遺跡』姫蔵文化財発掘調査研究所

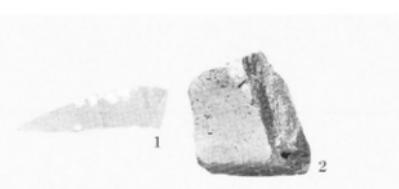


写真1 出土遺物



写真2 調査前全景 (西より)

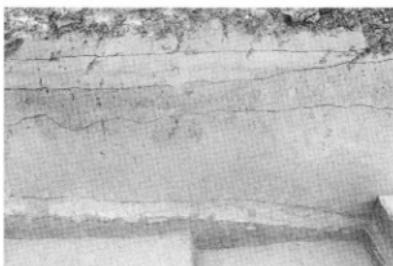


写真3 基本層序 (A断面)

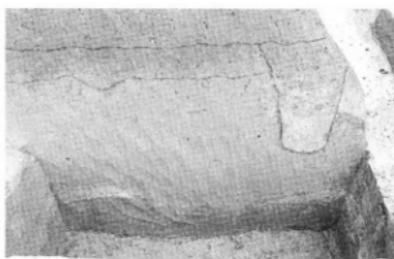


写真4 基本層序 (B断面)

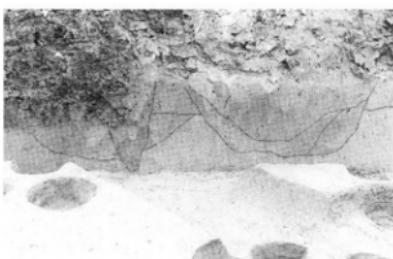


写真5 基本層序 (C断面)

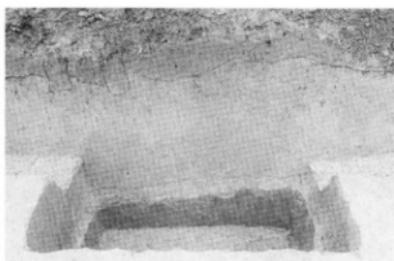


写真6 基本層序 (D断面)



写真7 遺構検出状況 (北より)



写真8 完掘全景 (東より)



写真9 完掘全景 (西より)



写真10 完掘全景（南より）

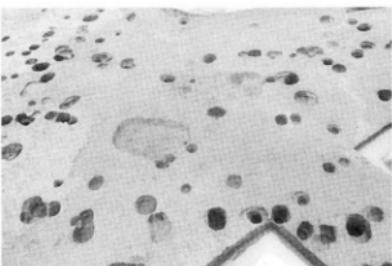


写真11 ピット群（北より）

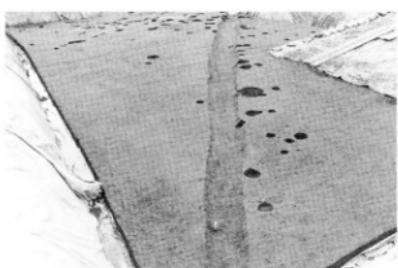


写真12 SD1溝跡（東より）

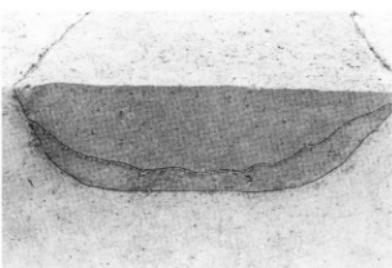


写真13 SD1溝跡断面



写真14 SK1土坑断面

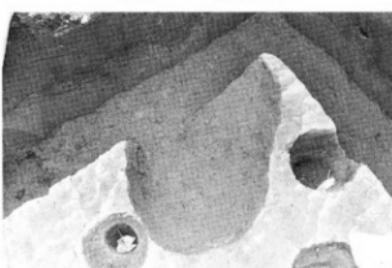


写真15 SK1土坑（東より）



写真16 SK2土坑断面

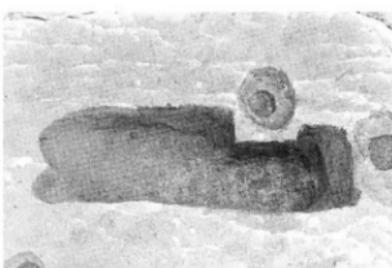


写真17 SK2土坑（北より）



写真18 SK3土坑断面

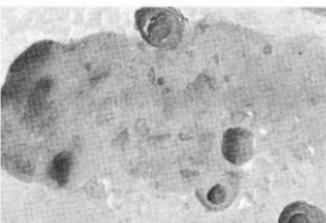


写真19 SK3土坑（南より）

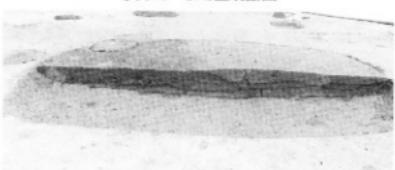


写真20 SK4土坑断面

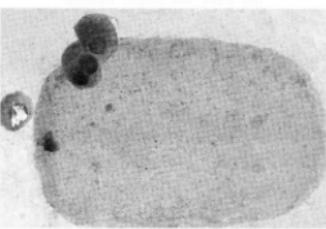


写真21 SK4土坑（南より）

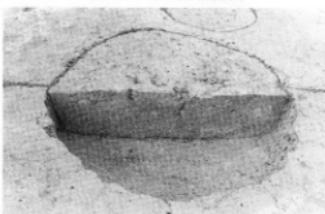


写真22 SK5土坑断面



写真23 SK5土坑（南より）



写真24 SK6土坑（西より）



写真25 SK7土坑断面



写真27 作業風景

8 陸奥国分尼寺跡（第10次調査略報）

1 調査要項

遺跡名	陸奥国分尼寺跡（01020）	調査期間	平成13年8月28日～11月28日
調査地点	仙台市宮城野区宮千代1丁目地内	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査原因	都市計画道路改築工事	担当職員	主事 渡部紀 文化財教諭 村上秀樹 教諭 農村幸宏 文化財教諭 吉田和正
対象面積	3210m ²		
調査面積	1T 93m ² 2T 22m ² 3T 10m ² 4T 174m ² 5T 50m ² 6T 14m ² 7T 19m ² 8T 15m ² 合計397m ²	調査参加者	大内孝子 小野栄子 菊地和江 佐藤篤 鈴木貴美子 板橋実 小林国子 菅井君子

2 遺跡の位置と環境（第1・2図）

陸奥国分尼寺跡は、仙台市街地の東部に位置し、陸奥国分寺跡と約500m離れて並んでいます。新寺の仙台中町段丘の東に接する自然堤防上に立地し、標高は10m前後である。

昭和23年に寺跡中心部と推定される部分が史跡指定され、その後昭和39年に「觀音塚」と呼ばれていた土壇の発掘調査が行われた（注1）。その結果、版築による基壇上に桁行5間、梁行4間の礎石建ち建物跡が発見され、金堂跡と推定された。国分寺の創建時期は、出土する瓦の年代より、陸奥国分寺と同時期であり、多賀城二期修造の762年（天平宝字6年）前後かと考えられている（注2）。周辺ではこれまで数次にわたる発掘調査が続けられており（注3～10）、今回で第10次の調査となる。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

3 調査に至る経過と調査方法（第3図）

陸奥国分尼寺跡を横断する都市計画道路清水小路多賀城線の改築工事については、従来より仙台市建設局街路課と文化財課との間で協議を進めてきたが、用地の確保が進んだため平成13年度より調査を行うこととなった。そこで発掘通知の提出を受け、発掘調査を行うこととした。

括幅は5～10mと狭く、隣接する民家や事業所の通路を確保したり埋設管を避けたりしたため、部分的な調査とせざるを得なかった。そのため、東西の端では寺域の区画が存在するかどうか、推定金堂跡北側では、主要建物が存在するかどうかの2点に調査目的をしぼり、合計8ヶ所のトレンチを設定した。

4 発見された遺構と遺物

発見された遺構、遺物の概略について報告する。後に発表する本報告の際に変更する可能性があるので、遺構名などは仮のものである。

（1）掘立柱建物跡（第3～5図）

4～6トレンチにおいて南北2棟の掘立柱建物跡が発見された。北側建物跡と南側建物跡と仮称しておく。

北側建物跡 第6次調査で発見された建物跡と同一のものと考えられ、桁行15間以上、梁行2間の東西棟建物跡で

ある。東端は発見できなかった。桁行の柱間寸法は約3m（10尺）の等間であり、東西長は45m（150尺）以上と推定される。梁行の柱間寸法は3.3m（11尺）であり、南北長は6.6m（22尺）と推定される。間仕切りが2ヶ所にある。建物方向は、真北に対し約4°西偏しており、推定金堂跡が3°20'西偏しているのに近似する。

大部分の柱は建て替えられている。柱掘方は平均して100×150cmの長方形で、深さ70～90cmである。柱痕跡は径30cm程で、掘方底面に達している。柱の抜き取りは認められなかった。一部の柱穴の掘方埋土より瓦片が出土しているが、時期を決定するには至らない。

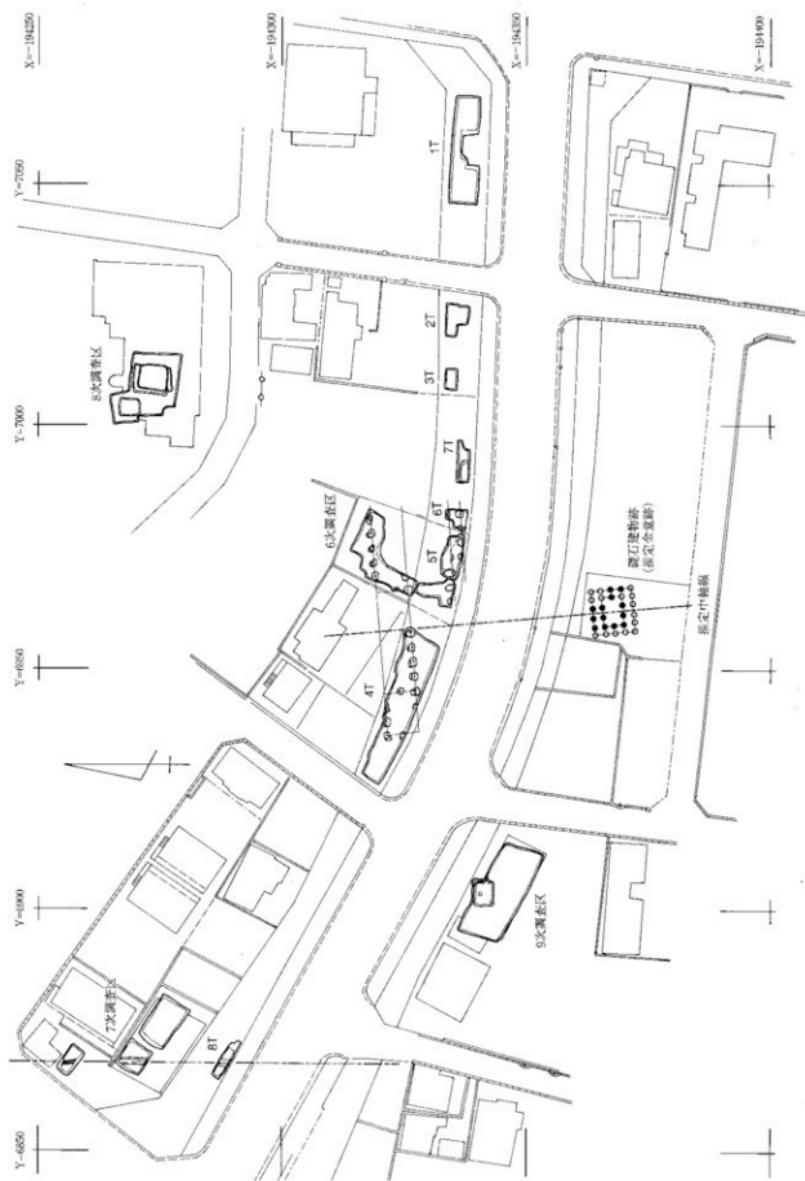
南側建物跡 北側建物跡の約9m南に位置する。平行する2列の柱列を6間分発見した。桁方向の柱間寸法は約3m（10尺）、梁方向の柱間寸法は約2.4m（8尺）である。柱の立て替えは認められず、柱の抜き取りもなかった。柱穴の規模は北側とはほぼ同じであるが、北側の柱掘り方は、北側に段がある。

（2）土坑（第4図）

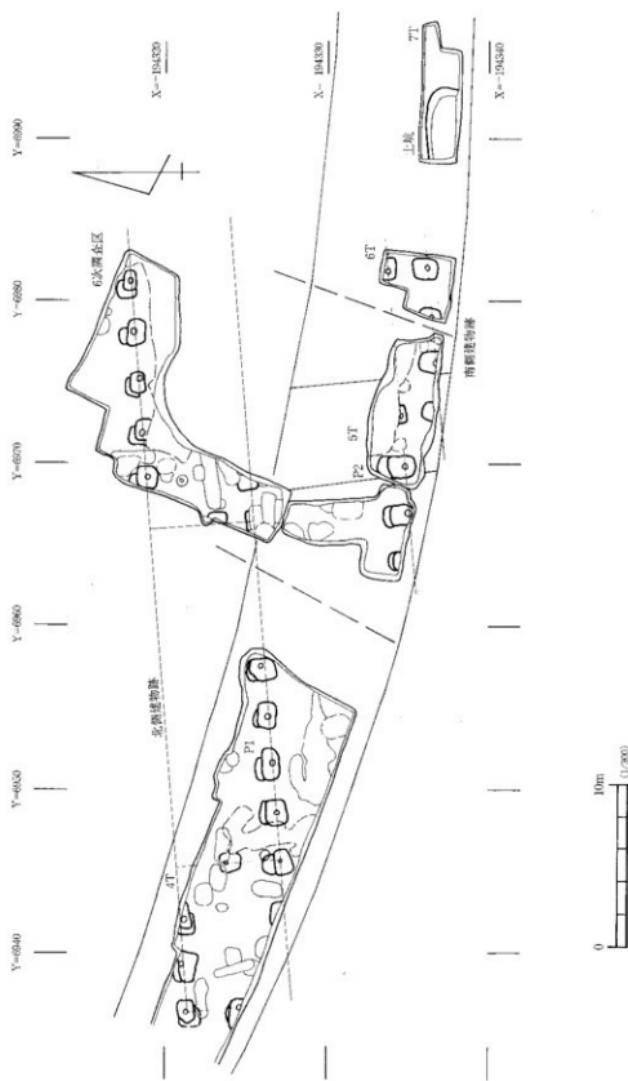
7トレンチで土坑の一部を発見した。長さ4m以上、幅2m以上の楕円形と考えられる。上層から底面近くに至るまでの堆積土から多量の遺物（土のう袋約50袋分）が出土している。大部分は瓦片であり、他に土師器（非ロクロ、ロクロ）、須恵器、鉄滓、羽口などがある。重弁蓮華文軒丸瓦が1点ある。今後整理を進め遺物の詳細を明らかにしたい。



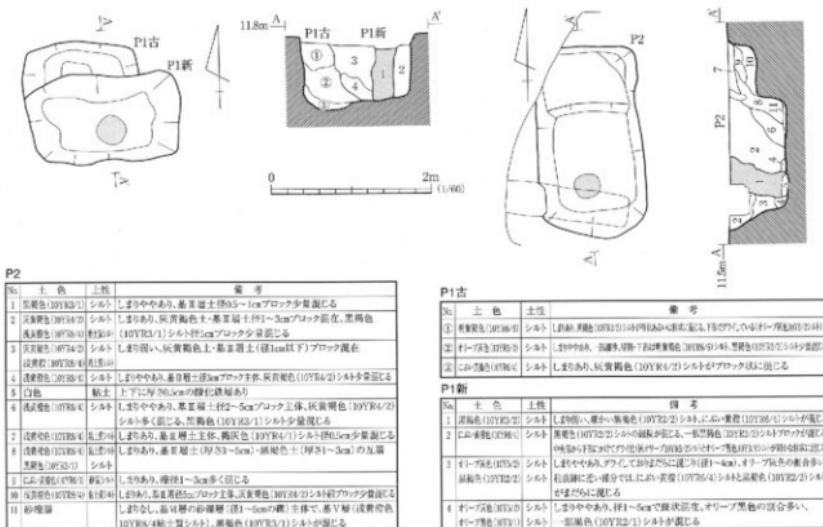
第2図 調査区の位置 (1/2,000)



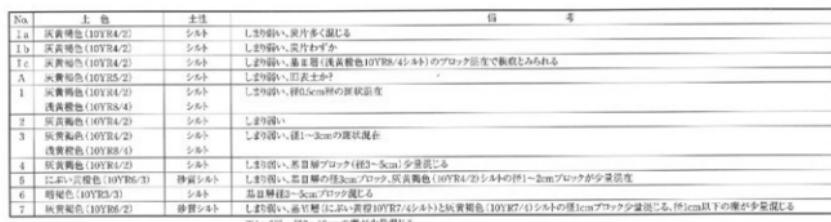
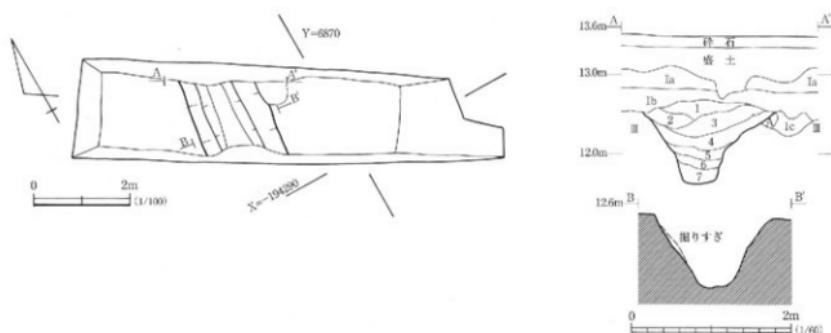
第3図 調査区配置図 (1/10,000)



第4図 桁立柱建物跡 (1/3000)



第5図 柱穴平断面図



第6図 8トレンチ溝跡平面図

(3) 溝跡 (第3・6図)

西端の8トレンチで溝跡を1条発見した。幅150cm、深さ100cmで、断面形「V」字形である。8トレンチの北側で行われた第7次調査で発見された溝跡と同一と推定される。方向はほぼ真北方向であり、掘立柱建物跡の方向とは異なる。底面直上の堆積土中に、古代の瓦片が混じっている。

5.まとめ

掘立柱建物跡の性格についてであるが、柱跡掘方からは時期を示す遺物は出土していない。しかし、建物の規模と柱穴掘り方の規模からみて、奈良時代の国分尼寺を構成する建物跡である可能性は高い。北側建物跡については、推定金堂跡の北側に位置する東西に長い建物跡であることから、伽藍配置からみて「尼房」と推定される。南側建物跡については、ごく一部の検出であり性格については言及し得ない。南に広がる建物跡の北庇列と推定される。

土坑については、大量の瓦等が出土していることから、国分尼寺の建て替え等の際のゴミ廐棄土坑と推定される。8トレンチの溝跡は、位置から見て尼寺の西を区画するもの可能性があるが、方向性が異なるため今後周辺の調査での検討課題としたい。

なお、全体の調査成果については、後日あらためて報告する予定であるので、遺構番号等は、その際に整理し変更する。

注1 仙台市文化財調査報告書第4集（1969）『史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市教育委員会

注2 熊谷公男（2000）『律令社会の変貌 寺と社』『仙台市史 通史編2 古代中世』仙台市

注3 仙台市文化財調査報告書第75集（1985）『陸奥国分尼寺跡』『仙台平野の遺跡群IV』仙台市教育委員会

注4 仙台市文化財調査報告書第87集（1986）『陸奥国分尼寺跡』『仙台平野の遺跡群V』仙台市教育委員会

注5 仙台市文化財調査報告書第97集（1987）『史跡陸奥国分尼寺跡』『仙台平野の遺跡群VI』仙台市教育委員会

注6 仙台市文化財調査報告書第125集（1989）『陸奥国分尼寺跡』『仙台平野の遺跡群VII』仙台市教育委員会

注7 仙台市文化財調査報告書第223集（1997）『陸奥国分尼寺跡認証調査報告書』『高屋敷遺跡ほか調査報告書』仙台市教育委員会

注8 仙台市文化財調査報告書第232集（1998）『陸奥国分尼寺跡（第7次調査）』『神明社窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市教育委員会

注9 仙台市文化財調査報告書第238集（1999）『陸奥国分尼寺跡（第8次調査）』『陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書』仙台市教育委員会

注10 仙台市文化財調査報告書第247集（2000）『陸奥国分尼寺跡（第9次調査）』『五本松窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市教育委員会



写真1 北側建物跡西端部（東より）



写真2 北側建物跡中央部（東より）



写真3 北側建物跡東部検出状況（東より）



写真4 南側建物跡西部（西より）



写真5 南側建物跡東部（東より）



写真6 P1検出状況（南より）



写真7 P1断面



写真8 P2断面



写真9 8トレンチ溝跡完掘状況（南より）



写真11 7トレンチ垂井蓋文軒丸瓦出土状況



写真10 7トレンチ土坑完掘状況（東より）

9 富沢遺跡（第121次調査）

1 調査要項

遺 跡 名 富沢遺跡（01369）

調 査 地 点 仙台市太白区鹿野三丁目223-7・8・9

調 査 原 因 R C 5 階建共同住宅建設

対 象 面 積 452.90m²

調 査 面 積 130.00m²

調 査 期 間 平成13年6月12日～8月29日

調 査 主 体 仙台市教育委員会（文化財課）

担 当 職 員 主任 荒井 格 文化財教諭 加藤徳明

調 査 参 加 者 阿部あき子 阿部すえ子

阿部 洋子 赤川 千広

浅見 祐子 石井千代子

板橋 実 入間川きみ 岩井レイ子 横野 幸子 横田 美登子 遠藤 福子

小野紀美子 加藤けい子 金澤沙知子 小林いと子 小林 国子 今田 郁枝

昆野コトジ 佐藤 篤 斎藤 廉子 庄子かつえ 菅井 君子 菅井 清子

鈴木みよ子 高橋トシ子 竹森 光子 玉上なみ子 千田タイ子 東海林かづ子

橋本 房子 早川 裕子 早坂みづえ 日野きみ子 本郷 正 松野 順子

三浦たか子 水野 信子 山田やす子 渡辺 節子 渡辺 洋子 渡部 麗子

整 理 作 業 小野 紗子 金澤 真代 柄沢千佳子 玉上なみ子 東海林かづ子 橋本 房子

茂垣 鑑子 山田 哲子 吉川 陽子



第1図 調査地点位置図 (1/10,000)

2 遺跡の位置と環境

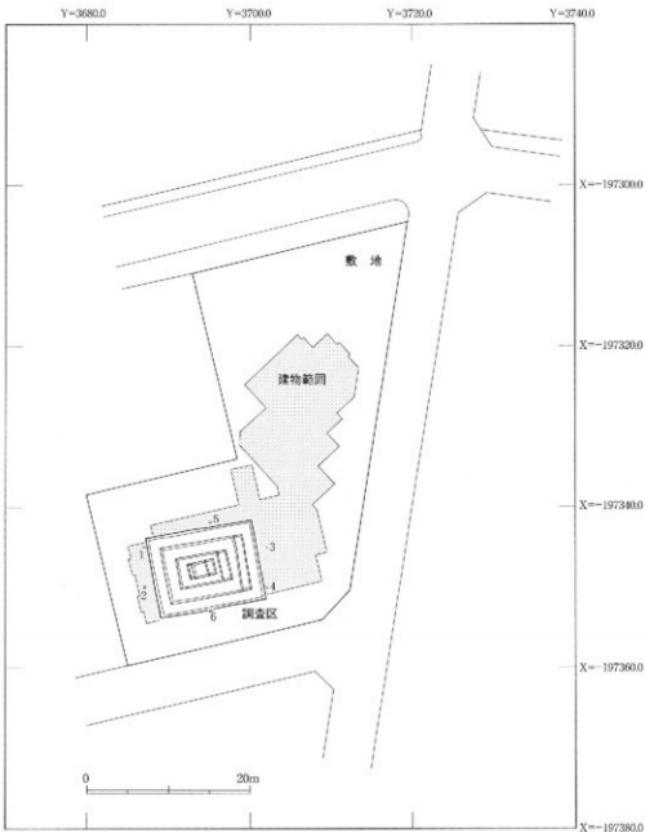
富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、名取川と広瀬川によって形成された自然堤防と北西の丘陵に囲まれた後背湿地に立地している。遺跡の面積は東西2km、南北1kmの約90haにおよび、現在の標高は9～16mである。

1982年以来の調査によって、弥生時代から近世にいたる十数時期の水田跡が検出されており、下層からは绳文時代の遺物が出土している。また、1987年から88年にかけて実施された第30次調査においては、さらにその下層から後期旧石器時代の森林跡と焚火跡が確認され、焚火跡の周辺からは接合資料を含む多くの石器が出土している。森林跡では樹木、葉、種子などの植物遺体のほか、昆虫化石、動物の骨なども出土しており、当時の自然環境を詳細に復元することが可能な、貴重な情報が得られている。仙台市では、後期旧石器時代の人類の活動痕跡と当時の自然環境がともに良好に保存されている遺跡としての重要性を認識し、発掘されたままの状態で森林跡を保存し、広く一般に公開している。その施設が仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）であり、1996年の開館以来、展開されている館の活動とあわせて全国から大きな注目が寄せられている。

3 調査に至る経過と調査方法

平成11年3月26日付けで、当該地の地権者小田島光男氏より上記地内におけるR C 5 階建共同住宅建設に伴う協議書が提出された。当教育委員会では平成11・12年度の調査予定がすでに決定していたため、平成13年度の発掘調査として受託することで了解を得た。発掘届は平成13年5月18日付けで提出されている。

調査箇所は富沢遺跡の中央部北端寄りにあたり、富沢遺跡保存館の北方約250mに位置している（第1図）。付近は、かつては水田として利用されていたが、20年以上前に実施された区画整理以来、1m前後の盛り土がなされ、



第2図 調査区配置図 (1/600)

現在ではほとんどが宅地や店舗となっている。この近辺では平成2年以前に数件の発掘調査が行われており、弥生時代から近世にいたる水田跡が確認されている。今回の調査箇所にもっとも近接している第60次調査区では、弥生時代、古墳時代～平安時代初頭、平安時代（灰白色火山灰降下以前）、および中世の水田跡が検出され、その他に平安時代（灰白色火山灰降下後）と近世の水田土壤も確認されている（平間 1991）。したがって今回の調査箇所においても水田跡が確認されるることは確実であり、さらに富沢遺跡保存館とそれほどの距離がないことから後期旧石器時代の森林跡が検出される可能性が考えられた。

調査は建物予定範囲内に東西13m、南北10m、調査面積130m²の調査区を設定して行った（第2図）。遺構の測量は調査区の周間に設定した杭1～6を基準として実施した。各杭の平面直角座標系第X系における座標値は次のとおりである。

杭	X 座標	Y 座標	杭	X 座標	Y 座標	杭	X 座標	Y 座標
1	-197345.0m	+3687.0m	3	-197345.0m	+3702.0m	5	-197342.0m	+3695.0m
2	-197350.0m	+3687.0m	4	-197350.0m	+3702.0m	6	-197353.0m	+3695.0m

造構の実測は、平面図、断面図を20分の1で、遺物出土状況を10分の1で作成した。調査区全体図は平板測量によって40分の1で作成した。写真記録は35mmカメラ2台を使用し、カラーリバーサル、モノクロームフィルムで撮影したほか、調査進捗状況の記録としてネガカラーの使い捨てカメラによる撮影を行った。自然科学的分析は、調査区壁面より採取した土壤を試料としたプランクトン・オパール分析、火山灰分析と、出土した木製品の樹種同定および大型植物化石の分析を外部委託した。その結果については、本報告の8と9に掲載している。

調査開始日は6月12日である。盛土土および旧耕作土を重機によって除去し、以下の水田土壤と考えられる層は、平面図、断面図の作成、写真撮影を随時行なながら、人力によって調査区全面を掘り下げた。その後、後期旧石器時代の層の確認のため深く掘り下げる必要があったことから、安全性を考慮して段掘りによる調査に変更した。先行して一部をグライ化した層の40cm下まで人力によって掘り下げ、遺物・造構が検出されないことを確認した後、効率的に調査を進めるため中間の自然堆積層を重機によって除去した。それよりも下層の掘り下げは人力によって行い、現地表面より約6.5mの深さ（標高約5.5m）まで掘り下げた。しかし後期旧石器時代の層は確認されず、調査区壁面が一部で崩落し始め、湧水も激しくなったことから、それより下層への掘り下げを断念した。なお、第30次調査によって確認された後期旧石器時代の森林跡の標高は7m前後である。

器材撤収を含む調査の一切が終了したのは8月29日である。この間、調査事務所、重機・器材等の手配、排土、器材の搬出入については申請者の全面的な協力を得た。

4 基本層序

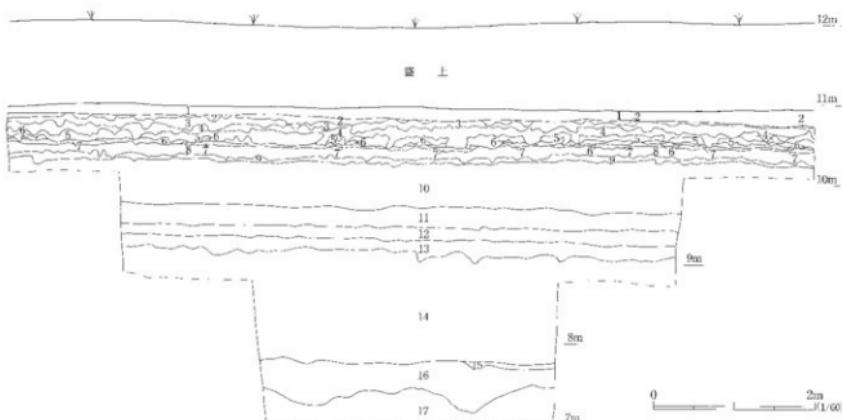
確認された層は20層であり、土性から1層のシルト質粘土、2層～5層の粘土、6層～9層の泥炭質粘土、10層の粘土・泥炭質粘土・泥炭が織状に互層となる層、11層と12層の粘性が強い黒色の泥炭質粘土、13層～20層の粘土・シルト・砂などがラミナ状に堆積するグライ化した層に大別される。20層以下については砂やシルトのグライ化した層であることを排水溝によって確認している。

これらの層のなかで旧耕作土を除いた、水田土壤と考えられる層は2層、3層、4層、5層、9層であり、4層は灰白色火山灰を含んでいる。

これまでの周辺地区の調査では1990年に実施された第60次調査区が最も近接しており、今回の調査で確認された層位は、層相の比較から以下のように対応するものと考えられる。

第121次調査			第60次調査		
層位	層相	検出 遺構	層位	層相	検出 遺構 時期
2	水田土壤	—	3	水田土壤	— 近世
3	水田土壤	段差・2層畦畔痕跡・3層畦畔痕跡	4	水田土壤	畦畔 中世
4	水田土壤	段差・4層畦畔痕跡	5	水田土壤	— 平安後期
5	水田土壤	5層畦畔（畦畔痕跡）SX1性格不明遺構	7a	水田土壤	畦畔・水田区画 古墳～平安初頭
6	自然堆積層	—	8b	自然堆積層	— —
7	自然堆積層	—	8c	自然堆積層	— —
8	自然堆積層	—	9-11	自然堆積層	— —
9	水田土壤	畦畔・水田区画	12	水田土壤？	— 弥生
10	自然堆積層	—	14	自然堆積層	— —

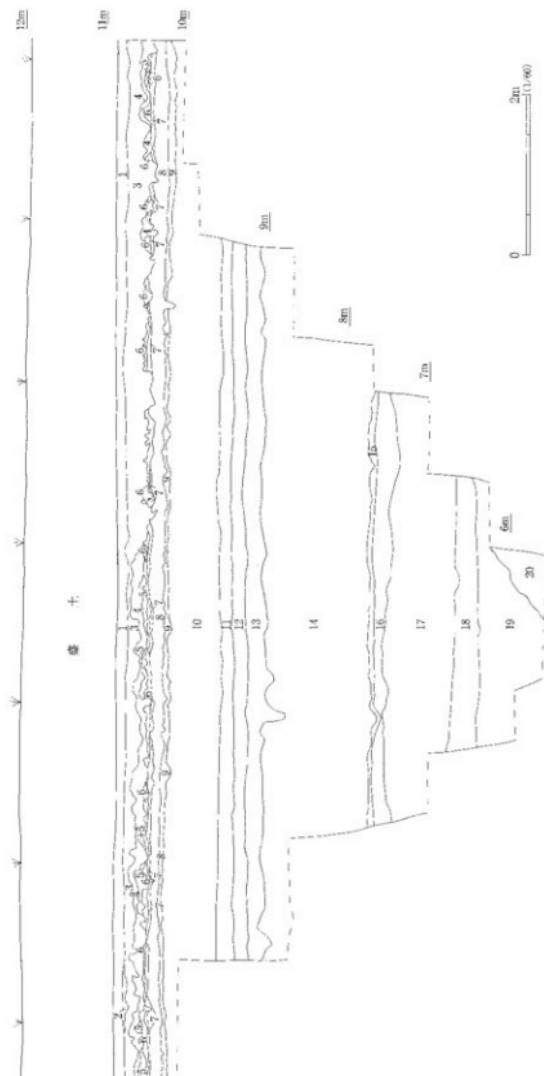
なお、敷地内のボーリング調査では、現在の地表面より3mの深さ（標高11m）で黒灰色の有機質粘土から青灰色の粘土に変化し、4.05m（標高7.95m）で青灰色の砂、6m（標高5m）で青灰色のシルトと粘土の互層になり、8.15m（標高3.85m）で青灰色の砂礫層に達するという結果が得られている。



第3図 調査区西壁断面図 (1/60)

層位	土色	土性	備考
1	5G 3/1	黒褐色	シルト質粘土 燕り土以前の水田耕作土。
2	10G 3/1	暗緑灰色	粘土 全体的に細砂を含む。上面に鐵化鉄塗積層がみられる。水田土壤。
3	10YR 3/1	黒褐色	鐵化鉄塗層あり。水田土壤。
4	5GY 4/1	暗オリーブ灰色	灰白色火成灰を含む。鐵化鉄塗層あり。水田土壤。
5	7.5GY 3/1	暗緑灰色	粘土 植物遺体を含む。水田土壤。
6	5Y 4/2	灰オリーブ色	泥炭質粘土 自然堆積層。
7	7.5Y 3/2	オリーブ黒色	泥炭質粘土 自然堆積層。
8	N 15/0	黒色	層の上部が肥沃化している。自然堆積層。
9	2.5GY 3/1	暗オリーブ灰色	泥炭質粘土 水田土壤。
10		粘土・泥炭質粘土・瓦礫の互層	10YR 3/2黒褐色泥炭質粘土、5GY 3/1暗オリーブ灰色泥炭質粘土、5GY 2/1オリーブ灰色泥炭質粘土、10YR 3/1黒褐色泥炭などの互層。自然堆積土。この層より以下は自然堆積層。
11	N 15/0	黒色	層の下部に5GY 4/1暗オリーブ灰色粘土を層状に含む。粘性強い。
12	10YR 1.7/1	黒色	泥炭質粘土
13	2.5GY 5/1	オリーブ灰色	層の上部から下部へ徐々に砂質化する。ややグラウイ化している。
14	2.5GY 6/1	オリーブ灰色	粘土、小礫を含む粗砂などがミナ状を呈する。この層よりグラウイ化した層。
15	7.5GY 1/1	黒褐色	堅く縮まった層。
16	5GY 6/1	オリーブ灰色	シルト質粘土 繋まりなし。
17	7.5GY 6/1	綠灰色	粘土・シルト・砂・ウミナ状
18	7.5GY 5/1	墨灰色	層の中間に5GY 5/1オリーブ灰色の粘土を5cm前後の厚さで帶状に含む。層の下部には砂をわずかに混入する。
19	10GY 5/1	墨灰色	微砂、粗砂などがミナ状を呈する。部分的に粘土も確認される。
20	5GY 5/1	オリーブ灰色	層の下部に10GY 6/1暗灰色の堅く縮まった粘土がみられる。粗砂を多く含む。

基本層位 土層注記表



第4図 調査区北壁断面図 (1:60)

5 発見された遺構と遺物

(1) 3層上面（第5図①）

3層上面では、南南西から北北東に延びる段差と、南北方向の畦畔痕跡を1条検出した。

段差は調査区北西隅で検出されており、高低差1~3cmで、ほぼ直線的に延びている。検出長は5m76cmであるが、さらに調査区外へ続くものと推定される。方向はN-20°-Eである。3層の水田土壌に伴う、規模の大きな畦畔の一部と考えられるが、2層を除去した結果生じた段差であることから、2層の耕作深度の違いによって形成された段差の可能性もある。

畦畔痕跡は調査区中央部やや西寄りで検出されている。3層のなかでもより黒みを帯びた部分が120~212cmの幅で帯状に確認されたものであり、N-5°-Eの方向で南北に延びている。検出長は10m16cmであるが、さらに調査区外の南北へ続くものと推定される。2層の水田耕作に伴う畦畔痕跡である。

3層上面の写真撮影および平面図作成を行った後、下層の水田跡の検出を目指して3層の掘り下げを開始したところ、4層が22~80cmの幅の帯状で南北方向に延びることが確認された（第5図①のスクリーン・トーン部分）。3層の水田耕作に伴う畦畔痕跡と考えられる。2層の畦畔痕跡の方向とほぼ同一方向に延びており（N-4°-E）、位置的には一部重複している。検出長は9m82cmであるが、さらに南北へ続くものと推定される。なお、この畦畔痕跡の東端縁は、4層上面で検出された段差の上端とほぼ一致する。

(2) 3層出土遺物

3層中からは土師器片、須恵器片、磁器片、礫片などが出土している。いずれも小破片である。写真26-3に磁器片を示した。割花文の青磁碗の体部破片であり、13世紀後半頃のものと考えられる。

(3) 4層上面（第5図②）

4層上面では、南北方向に延びる段差と、畦畔の基底部と考えられる帯状の遺構を1条検出した。

段差は調査区のほぼ中央で確認され、3.5~14cmの高低差でN-4°-Eの方向で南北に延びている。南側に比べ北側の高低差がより大きい。検出長は9m79cmであるが、さらに調査区外の南北へ続くものと推定される。

前述のように3層掘り下げ中に確認された畦畔痕跡の東端と段差の上端がほぼ一致していることから、3層の耕作深度の違いによって形成された段差と考えられる。したがって本来の3層上面は、より上層の水田耕作によって失われているものの、西側の区画よりも東側が一段低い水田面となっていた可能性が考えられる。

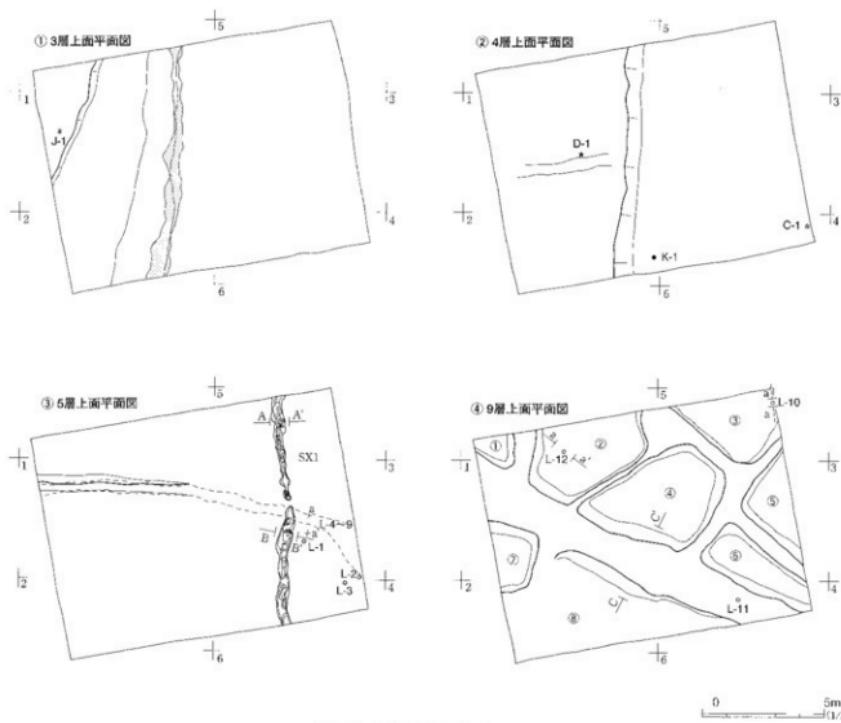
4層は水田土壌であることから、その耕作によって下層を巻き上げており、層全体に下層をブロック状に混入している。調査区西半では下層を含まずに4層のみが40~55cmの幅で帯状に延びる部分が確認された。検出長は3m94cmであり、方向はE-9°-Nの東西方向である。耕作が下層に及ばなかったため下層土壌の混入がみられない部分と考えられることから、畦畔の基底部である可能性が高く、この位置に4層水田跡の畦畔が存在していたものと推定される。

(4) 4層出土遺物

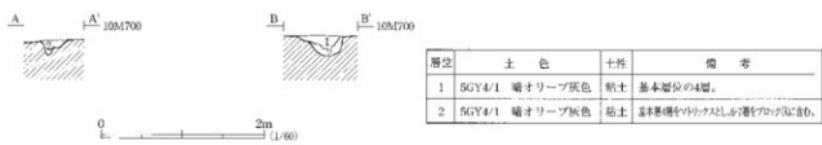
4層中からは土師器片、須恵器片、磁器片、礫石、焼けた粘土塊、礫片、種子などが出土している。4層中には灰白色火山灰が認められることから、4層の水田耕作は灰白色火山灰降下以降の時期と考えられる。出土遺物には水田耕作の時期のものと、耕作によって下層から巻き上げられた、より古い時期のものが含まれている。土師器は11点出土しており、図示した壺2点以外はいずれも小破片である。種子はモモの種であり、分析結果を本報告の8に掲載した。

4層中より出土した遺物のうち、土師器片2点と礫石1点を図示した（第9図）。

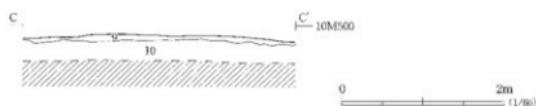
C-1（第9図1）は口縁部の大半を欠損するものの、体部はほぼ残存している。しかし、内外面ともに表面の剥落が著しく、特に内面の調整の観察は困難である。外側の体部下半にはヘラケズリが確認され、上半は表面の剥落により遺存状態は良好ではないが、ヨコナデの可能性が高い。黒色処理は施されていない。時期的には8世紀前



第5図 梁出造構平面図 (1/200)



第6図 SX1性格不明造構断面図 (1/60)



第7図 9層大柱畔断面図 (1/60)

半頃と考えられるが、水田耕作によって下層より巻き上げられたものと推定される。

D-1（第9図2）はロクロを使用した坏であり、体部から口縁部のほとんどを欠損している。底部には回転糸切り痕が観察され、内面には黒色処理が施されている。

K-1（第9図3）はやや扁平な自然の円盤をそのまま使用した砥石である。a面の中央部には刃物を直角に当たる右下がりのキズが多く確認され、下半には右上がりの同様のキズが認められる。一部には刃物によって削り取られた部分も観察される。b面には短軸方向もしくは長軸方向にa面と同様のキズがわずかに確認される。折れ面にも細い線状のキズが認められる。a面上端縁とb面右側縁の下端寄りには剥離痕が観察され、b面の剥離痕の一部は刃物によって削り取られている。石材は、広瀬川や名取川で採取可能な凝灰質砂岩である（須田富士子氏のご教示による）。

（5）5層上面（第5図③）

5層上面では、東西方向に延びる畦畔の一部とそれに伴う畦畔痕跡、および4層の水田耕作に関わるものと考えられる南北方向の性格不明遺構1条を検出した。

畦畔は調査区北半で東西方向に確認され、西端から中央部まではE-0°-N、中央部から東端まではE-15°-Sの方向に延びている。中央部から東端にかけては畦畔痕跡による確認である。検出長は14m 2cmあり、さらに調査区外の東西へ続くものと推定される。畦畔の大部分は上層の水田耕作によって削平されており、西半部の北側で1.5-2.5cm程度の残存高が確認されたのみである。検出幅は32-54cmであり、畦畔痕跡もほぼ同様の軸で延びているが、調査区東端では幅広く検出されている。

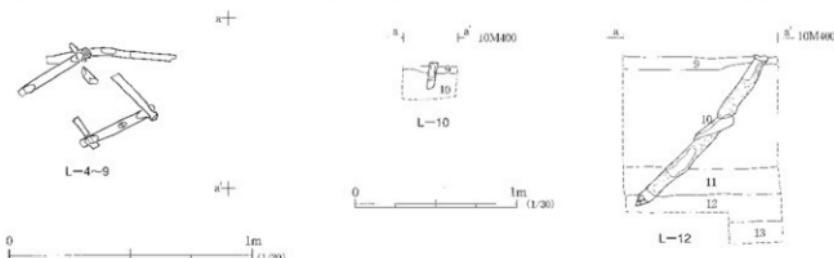
性格不明遺構（SX1）は6-56cmの幅で、N-2°-Wの南北方向に延びている。検出長は9m 56cmであり、さらに調査区外の南北へ続くものと推定される。底面の凹凸が著しく、所々に不定形の落ち込みがみられ、深さは7-30.5cmと一定しない。堆積土は4層を主体とし、下部に下層の6・7層のブロックが確認される。このような形状と堆積土の状態から5層上面に関わる遺構ではなく、4層の水田耕作等に伴って形成されたものと考えられる。

（6）5層出土遺物

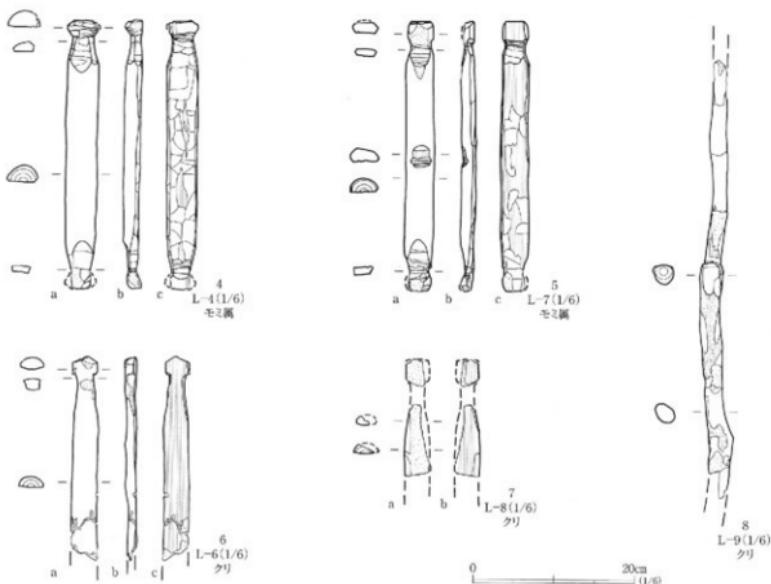
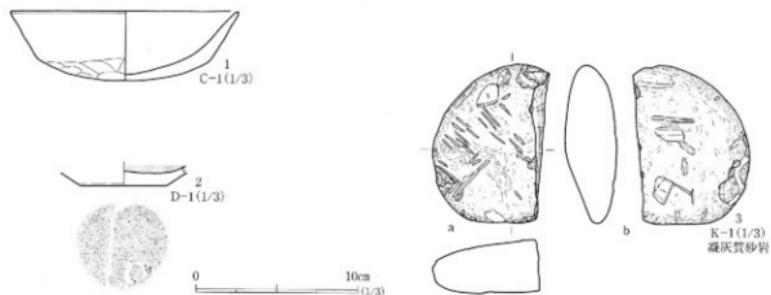
5層中からは木製品9点（L-1～9）と種子が出土している。種子はモモの種である。出土した木製品9点のうち8点を図示し（第9・10図）、残存状況が良好ではないL-5については樹種同定結果のみを示した。木製品の樹種同定結果は本報告の8に掲載している。

L-1～3（第10図1～3）は直径1.5-3cmの枝材と考えられる心持ち材の一端に、1面ないし2面の加工によって尖端部が作り出されている。樹種はL-1がバラ科ナシ並科、L-2はコナラ属クヌギ節、L-3はシラキである。

L-4～8（第9図4～7）は具体的な用途は不明であるが、出土状況（第8図、写真7）から組み合わせて使用されたものと考えられる。L-4と7の両端には緊縛のための抉り部が作られているが、L-7のa面中央部に

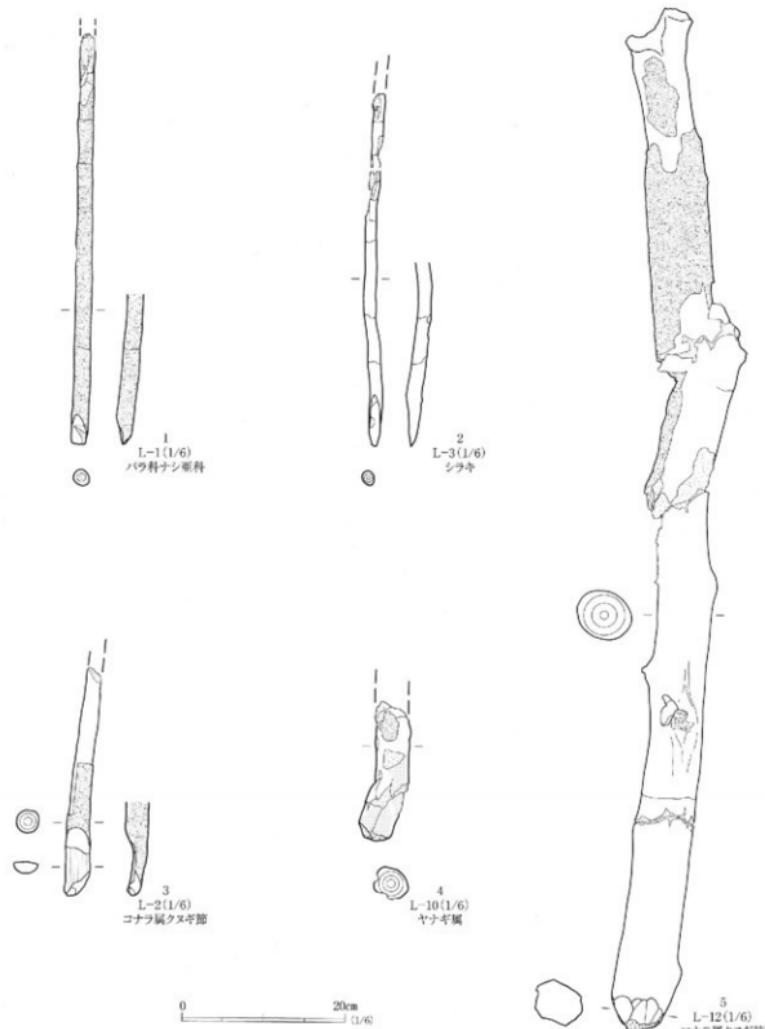


第8図 遺物出土状況



出発地番号	出発番号	種別	品種	出土部位	寸	幅 (cm)	寸	幅 (cm)	寸	幅 (cm)	寸	幅 (cm)	備 考	写真番号
第9回1	C-1	土師器	(焼)	4層	14.0	4.33			12.2	7.2			洞窟のため不明	写真26-1
第9回2	D-1	土師器	(焼)	4層		(1.20)	9.4		12.2	7.2			洞窟のため不明	写真26-2
出発番号	出発番号	種 别	石 特	山上部位	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	備 考	写真番号
第9回3	K-1	結 石	凝灰質岩	4層	9.2		7.2	3.4						写真26-3
出発番号	出発番号	種 别	石 特	山上部位	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	大 尺	備 考	写真26-4
第9回4	L-4	組み合せ骨頭骨	牛 頭	牛 頭	3.5	3.4	3.8	2.1						写真26-5
第9回5	L-7	組み合せ骨頭骨	牛 頭	牛 頭	3.5	3.3	3.4	1.8						写真26-6
第9回6	L-8	組み合せ骨頭骨	クリ	牛 頭	3.5	(23.5)	3.1	1.5						写真26-7
第9回7	L-8	組み合せ骨頭骨	クリ	牛 頭	3.5	(12.3)	3.0	(1.2)						写真26-8
第9回8	L-9	骨	クリ	心臓	3.5	(94.6)	2.7	3.4	18.2	12.0	10.0	10.0		写真26-12

第9図 富沢遺跡第121次調査出土遺物(1)



第10図 富沢遺跡第121次調査出土遺物（2）

抉り部が確認されるのに対して、L-4には認められない。また、L-6と8は破損しているものの、残存する一端にL-4・7に類似する抉り部が確認される。L-4～8の素材はいずれもそれ程太くはない心持ち材の半削に近い分割材であるが、樹種は4と7がモミ属、5・6・8はクリであり、2種類の樹種が用いられている。

L-9（第9図8）は中央部に枝打ち痕の確認される心持ち材である。両端を欠損する。直径は2.5cm程度で、樹皮を残している。用いられている樹種はクリである。

（7）9層上面（第5図④）

9層上面では大畦畔と小畦畔によって区画された水田跡が検出されている。確認された水田区画は8区画であるが、1区画を除き、部分的な検出にとどまっている。区画全体が確認された区画④は不整な四辺形を呈しており、区画全体の形状は方形を基調とするものと考えられる。区画④の面積は11.59m²であり、部分的に確認された他の区画の大部分も同程度の規模と推定される。各水田区画の計測結果は以下のとおりである。なお、面積の計測にはプラニメーターを使用し、3回の計測値を平均して示した。

区画	長軸	短軸	面積	区画	長軸	短軸	面積
①	1m 60cm 以上	1m 18cm 以上	1.13 m ² 以上	⑤	3m 66cm 以上	2m 82cm 以上	4.05 m ² 以上
②	4m 74cm 以上	3m 10cm 以上	10.30 m ² 以上	⑥	4m 84cm 以上	1m 38cm	4.52 m ² 以上
③	3m 90cm 以上	3m 22cm 以上	7.42 m ² 以上	⑦	2m 18cm 以上	1m 84cm 以上	2.65 m ² 以上
④	4m 32cm	3m 54cm	11.59 m ²	⑧	8m 00cm 以上	4m 6cm 以上	16.80 m ² 以上

区画の基軸となる大畦畔は上端幅124～218cm、下端幅217～287cm、高さ0.5～7.5cmの規模であり、東南東から西北への方向E-25°～Sに延びている。検出長は15m34cmであるが、さらに調査区外へ続くものと推定される。

各水田を区画する小畦畔の規模は上端幅14～88cm、下端幅44～160cmと一様ではない。計測結果を以下に示す。

区画 水田	長さ	上端幅	下端幅	高さ	方向
区画①と②	2m 18cm 以上	66～88cm	128～147cm	1.5～2.0cm	N-8.5°～E
区画②と①	4m 86cm	14～27cm	44～54cm	0.5～1.5cm	E-34.5°～N
区画③と④	4m 92cm 以上	54～60cm	94～102cm	0.5～2.5cm	E-40.0°～S
区画③・④と⑤・⑥	6m 72cm 以上	34～88cm	80～160cm	0.5～3.5cm	N-37.5°～E
区画⑤と⑥	4m 26cm 以上	48～64cm	113～122cm	0.5～3.0cm	E-41.5°～S
区画⑦と⑧	5m 28cm 以上	(74cm)	(104cm)	1.0～3.0cm	N-11.5°～E

（8）9層出土遺物

9層中からは2点の打ち込み杭が出土している。樹種同定結果を本報告の8に掲載した。

L-10（第10図4）は心持ち材の打ち込み杭である。焼け焦げた面が大きく広がっており、加工面は部分的に確認されるのみである。上端を欠損している。用いられている樹種はヤナギ属である。

L-12（第10図5）も心持ち材の打ち込み杭である。尖端部は加工具によってある程度削り込んだ後、折り取りによって作り出されている。中央部2ヶ所で折れが確認されるが、打ち込まれた後の土圧等による変形と考えられる。出土時には樹皮が尖端部付近から中央部にかけて残存していたが（写真25）、取り上げの際にほとんど剥がれ落ちている。樹種はコナラ属クヌギ節である。

6 下層の調査

今回の調査区の約250m南には、後期旧石器時代の森林跡と焚き火跡が石器や植物遺体などとともに検出されている第30次調査区（宮沢遺跡保存館）があることから、後期旧石器時代の層の確認を目的として深掘りを行った。

9層を除去した後、安全性を考慮して調査区内に東西10m、南北7mの深掘区を設定し、部分的に先行して14層上面より40cm下まで精査を行ったが、遺物・遺構は検出されなかった。残る部分については、効率的に調査を進め

るため重機によって中間の自然堆積層を精査を行った深さまで除去した。その後、さらに深掘区を東西6m、南北4mに縮小して17層まで精査し、中央部で段掘りを繰り返して20層まで確認した。最も深く掘り下げた部分の標高は約5.5mである。しかし、後期旧石器時代の遺構、遺物は検出されず、植物遺体を含む層も確認されなかった。この時点では調査区表面の崩落と湧水が激しくなったことから、それより下層への掘り下げを断念した。

なお、第30次調査によって確認された後期旧石器時代の森林跡の標高は約7mである。

7 まとめ

今回の調査によって検出された遺構は以下のとおりである。

- ① 3層上面…2層水田跡畦畔痕跡。3層水田跡畦畔？（2層水田に伴う耕作深度の違いによる段差の可能性あり）。
- ② 3層中…3層水田跡畦畔痕跡。
- ③ 4層上面…3層水田跡に伴う耕作深度の違いによる段差。4層水田跡畦基底部。
- ④ 5層上面…4層の水田耕作に伴う性格不明遺構。5層水田跡畦畔基底部および畦畔痕跡。
- ⑤ 9層上面…9層水田跡（8区画）。

それぞれの所属時期については、出土遺物が少なく、今回の資料のみによる時期決定は困難であることから、周辺の調査成果とあわせて検討を行う。

2層の層相は、最も近接する第60次調査の3層と類似しており、第60次調査3層は報告では第34次調査2層および第68次調査3層と対比されている。第68次調査の3層では畦畔が検出されており、層中からは17世紀代と考えられる肥前染付瓶が出土している。したがって3層上面で検出された2層水田跡の畦畔痕跡は、近世の水田跡の存在を示すものである。

3層中からは13世紀代後半と考えられる青磁碗が出土している。第60次調査と第34次調査で対応する層は4層であり、両調査では中世の水田跡が検出されていることから、3層は13世紀代後半もしくはそれ以降の中世の時期と考えられる。

4層中には灰白色火山灰が確認されることから、4層は灰白色火山灰降下（10世紀前半）以後の水田耕作土と考えられる。層中より出土したC-1の土師器壺はより古い時期のものであるが、水田耕作によって下層から巻き上げられたものと推定される。

5層中からは木製品とモモの種子が出土しているものの、時期決定可能な遺物は得られていない。層相は第60次調査の7a層と類似するが、第60次調査7a層においても遺物は出土していない。それに対比される第34次調査の6a層から、田下駄とロクロ未使用と思われる土師器片（甕？）が1点出土している。しかし、時期決定には至っておらず、上下の層位の時期から古墳時代以降平安時代初頭以前と推定されているのみである。したがって周辺の調査区の層位との対比は可能であるが、時期を限定できないことから、第34次調査の所見にしたがって古墳時代から平安時代頃の時期と推定しておきたい。

9層中からは時期決定資料は得られていない。周辺の調査区で対比されるのは第60次調査の12層、第34次調査の10層、第47次調査の8層である。第34次調査10層からは水田跡が確認されており、第5次調査で検出された弥生時代の水田跡と形態上の類似点が認められることと、層中から弥生時代に属すると考えられる大型板状石器が出土していることから、弥生時代の水田跡と推定されている。第47次調査8層では畦畔は検出されなかったものの水田土壤の可能性が指摘されており、層中から石器が3点出土している。そのうちの1点が大型板状石器であることにより、弥生時代の水田跡である可能性が考えられている。

今回の調査で検出した9層水田跡については、以上のような周辺地区での調査結果から、弥生時代の水田跡の可能性が高いものと判断される。

今回の調査では後期旧石器時代の遺構、遺物は検出されず、植物遺体を含む層も確認されなかった。これまでの周辺地区的調査においても、第30次調査（富沢遺跡保存館）で後期旧石器時代の森林跡が確認された標高と同じ深さまで掘り下げる、植物遺体を含む層が確認される箇所と、されない箇所があることが知られている。したがって後期旧石器時代の森林跡は面的に大きく広がるものではない可能性が高い。今後の調査では、植物遺体を含む層の有無を確認するとともに、後期旧石器時代当時の微地形を把握することが必要であろう。

参考・引用文献

- 太田昭夫 1995 「旧石器時代106 富沢遺跡」『仙台市史 特別編2 考古資料』p.p.22~29 仙台市
佐藤甲一 1991 「第2章第5節 富沢遺跡第61次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)』p.p.41~48
仙台市文化財調査報告書第152集
- 佐藤 洋 1988 「富沢遺跡－第34次調査報告書－」 仙台市文化財調査報告書第118集
- 佐藤 洋 1991 「第2章第12節 富沢遺跡第68次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)』p.p.114~127
仙台市文化財調査報告書第152集
- 中富 洋 1989 「第2章第12節 富沢遺跡第47次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』p.p.83~89
仙台市文化財調査報告書第128集
- 平間亮輔 1991 「第2章第4節 富沢遺跡第60次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)』p.p.33~40
仙台市文化財調査報告書第152集
- 工藤哲司 1998 「第2章第1節 富沢遺跡第102次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(6)』p.p.5~21
仙台市文化財調査報告書第231集
- 吉岡恭平 1998 「第2章第2節 富沢遺跡第103次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(6)』p.p.22~46
仙台市文化財調査報告書第231集



写真1
調査区全景（西から）



写真2
調査区全景（南から）

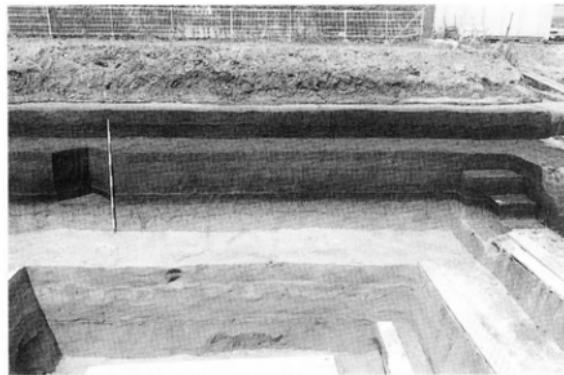


写真3
調査区北壁セクション

写真4
調査区西壁セクション



写真5
5層水田跡畦畔（西から）



写真6
5層畦畔痕跡確認状況
(西から)





写真7
木製品L-4～9出土状況（北から）

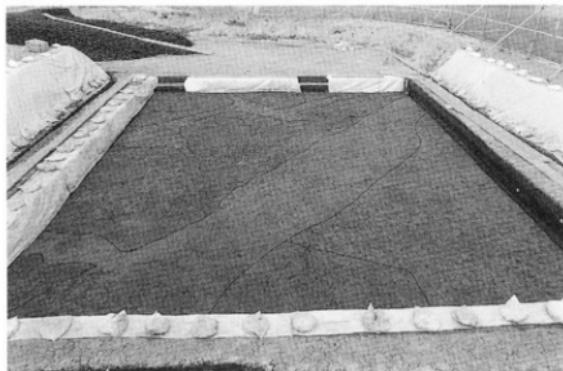


写真8
9層水田跡検出状況（西から）

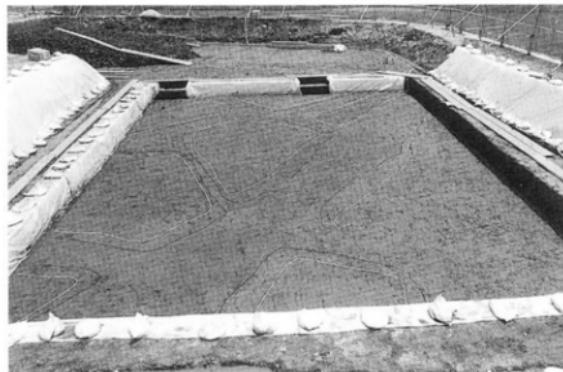


写真9
9層水田跡全景（西から）

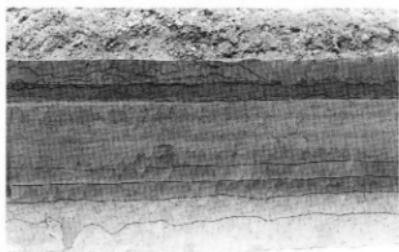


写真10 調査区北壁上段セクション

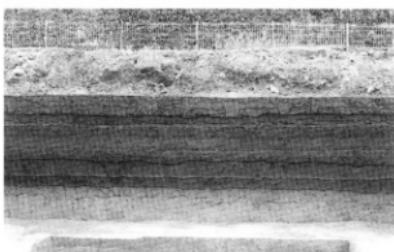


写真11 調査区西壁上段セクション

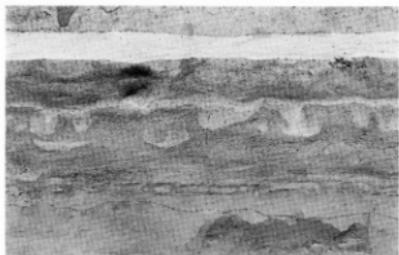


写真12 調査区北壁下段セクション

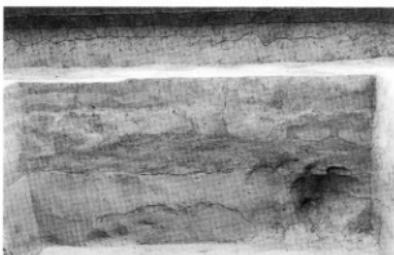


写真13 調査区西壁下段セクション



写真14 3層上面全景（西から）

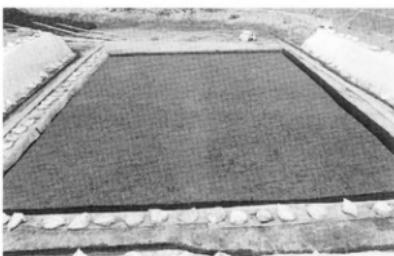


写真15 3層水田跡畦畔痕跡（西から）

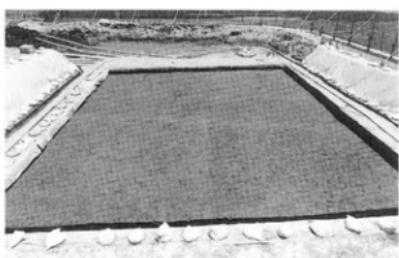


写真16 4層水田跡畦基底部（西から）

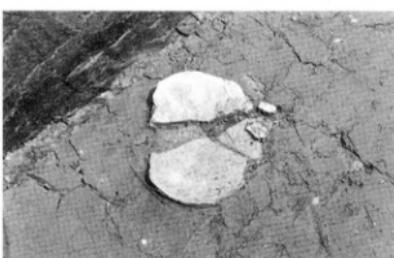


写真17 土師器C-1出土状況（北西から）



写真18 土器D-1出土状況（南から）

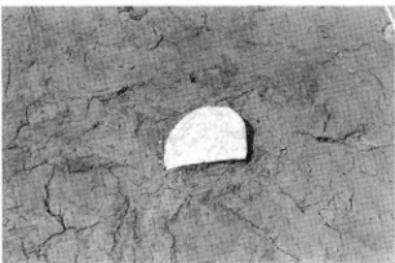


写真19 石製品K-1出土状況（南から）

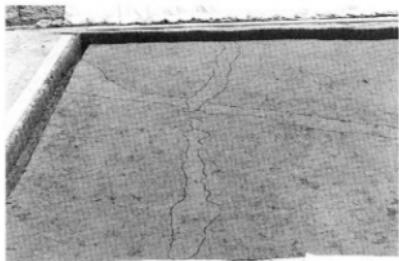


写真20 SX1性格不明遺構検出状況（北から）



写真21 SX1性格不明遺構実掘全景（北から）

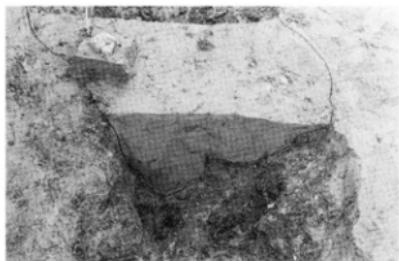


写真22 SX1性格不明遺構A-A'断面（南から）

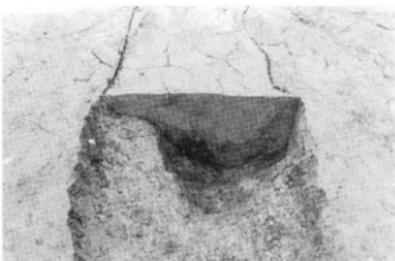


写真23 SX1性格不明遺構B-B'断面（南から）



写真24 木製品L-10出土状況（東から）



写真25 木製品L-12出土状況（西から）

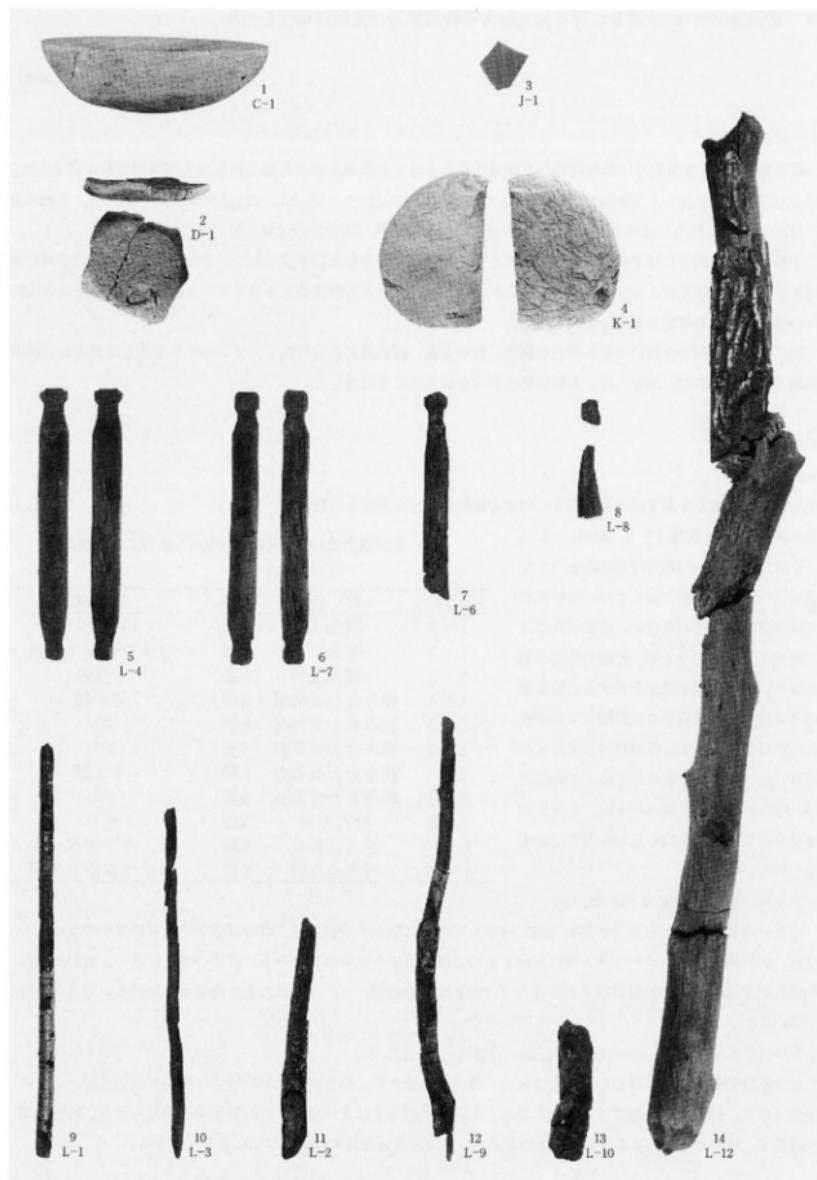


写真26 富沢遺跡第121次調査出土遺物（1～4；約1/3 5～14；約1/6）

8 富沢遺跡第121次調査に伴う加工材の樹種同定及び大型植物化石分析

吉川純子(古代の森研究会)

1. 試料

富沢遺跡第121次調査では弥生時代から平安時代にかけての水田土壤から加工材及び大型植物化石が出土した。出土したうち、4層の大型植物化石O-1～O-3、5層の加工材のL-1からL-9及び大型植物化石O-4、9層の加工材L-10、L-12の2試料の同定を行った。加工材の種別は杭、組み合わせ材、加工棒などである。

4層は平安時代またはそれ以前と推定される灰白色火山灰を含む水田土壤である。その下の5層は時期不明の水田土壤で植物遺体を含んでいる。そして、自然堆積と考えられる有機質粘土を挟んで、さらに下位の9層は弥生時代の水田耕作土と推定されている。

加工材からは剃刀を用いてそれぞれ横断面、放射断面、接線断面を切り出し、プレパラートとして封入した後顕微鏡下で組織を観察、同定した。大型植物化石は肉眼で形態を観察した。

2. 同定結果

1) 加工材

加工材の同定結果を表1に示し、以下に同定の根拠となった形態を記載する。

モミ属: *Abies* 図版1～3 試料L-4, 7

早材から晩材への移行は比較的緩やかで

晩材部の幅はそれほど狭くない。この試料では樹脂細胞は見られない。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個、放射柔細胞の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する。放射組織はほぼ単列。仮道管の放射壁上に有縁壁孔の断面が見られる。仮道管内にはらせん肥厚はない。軽くて軟らかく加工が容易だが、保存性が低く、割れやすい。モミ属の中でもモミは宮城県内の丘陵地などで多く見られる。

ヤナギ属: *Salix* 図版10 試料L-10

小さい道管が単独から2、3個放射方向に複合して均一に散在する散孔材、晩材付近では道管の径がやや小さくなる。軸方向柔細胞はターミナル状に配列するので散孔材でも年輪界はわかる。道管の穿孔は單一。放射組織は単列異性で道管と放射組織が接するところでは壁孔は蜂の巣状。ヤナギ属はおもに湿地など水の多い場所に生育している。

コナラ属クヌギ節: *Quercus sect. Aegilops* 試料L-2, 12

丸い単独管孔が年輪のはじめに數列集合し、晩材では壁が厚く円形の管孔が放射状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。軸方向柔組織は短接線状に並ぶ。大道管の周囲では互いに絡んだ周開仮道管が見られる。放射組織は同性で、単列と大変大きな集合状のものがある。クヌギ節は湿地や河川の周辺に多く生育する。

表1 富沢遺跡第121次調査より出土した加工材の樹種

遺物番号	種別	層位	樹種
L-1	一端加工材	5層	バラ科ナシ亞科
L-2	一端加工材	5層	コナラ属クヌギ節
L-3	一端加工材	5層	シラキ
L-4	組み合わせ部材	5層	モミ属
L-5	組み合わせ部材	5層	クリ
L-6	組み合わせ部材	5層	クリ
L-7	組み合わせ部材	5層	モミ属
L-8	組み合わせ部材	5層	クリ
L-9	枝打ち材	5層	クリ
L-10	打ち込み杭	9層	ヤナギ属
L-12	打ち込み杭	9層	コナラ属クヌギ節

クリ：*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 試料L-5, 6, 8, 9

大型で放射方向にやや伸びた単独の管孔が年輪のはじめに数列集合し、晩材では小さい薄壁のやや角張った管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一で道管内には薄壁のチローシスが発達する。大道管の周囲には互いに絡んだような周囲仮道管が見られる。木部柔組織は晩材でいびつな接糸状。放射組織は單列同性だが2細胞幅になることもある。心材はしばしば黒くなっているがこの部分の保存性が極めて高い。耐性、保存性ともに良好で建築材のほか様々な用途に用いられる。クリは古来から重宝され、山林のみならず、様々な場所に栽培されてきた。

バラ科ナシ亜科：Rosaceae Subfam. Maloideae 図版4～6 試料L-1

小さい道管が単独で均一に散在する散孔材。道管の穿孔はほぼ單一であるが、網状穿孔がところどころに見られる。放射組織は異性で2,3細胞幅。ナシ亜科にはナシ属、リンゴ属のほかナナカマド属、カマツカ属などがある。東北の山林にはナシ属やナナカマド属が比較的多く生育している。

シラキ：*Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax. et K.Hofpm 図版7～9 試料L-3

小さい道管が1個から縦に4, 5個結合して配列する散孔材。放射組織は單列で異性である。道管の穿孔は單一。シラキは比較的低山の山巒などに生育している。

2) 大型植物化石

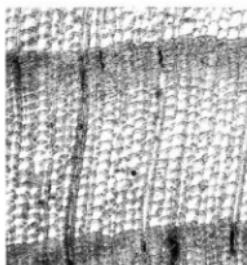
大型植物化石試料はすべてモモの核であった。以下に形態を記載する。

モモ：*Prunus persica* Batsch 図版11 試料O-1, 2, 3, 4

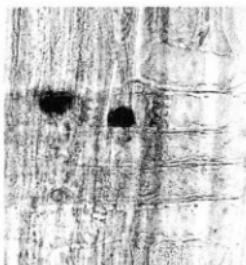
核は丸味を帯びた紡錘形で2面、両側に縫合線があり、片側に沿うように溝が走る。表面には比較的深い縱方向で流理模様の溝と孔が不規則に分布する。核壁は木質で厚く緻密で硬い。核の基部は裂けたようになり、先端は鋸く尖る。長さは26ミリから30ミリで、現在食用としているモモとはほぼ同サイズである。保存が良く表面の微細なおうとつも残っているが、試料O-3だけは風化され破片となっていた。

3. 出土した加工材に関する若干の考察

L-1～L-3は一端加工棒、L-4～L-8は組み合わせ部材、L-9は枝打ち痕のある棒、L-10、L-12は打ち込み杭と推定されている。樹種はコナラ属クヌギ節、ヤナギ、シラキ、ナシ亜科と多種に及ぶ。ヤナギは低湿地、クヌギ節は水域沿いに生育していることを考えると比較的周辺から得やすい種類を特に選ばずに利用している可能性が高い。樹皮がはがれていない丸杭もあった。組み合わせ部材は井桁のように組まれたような痕跡があり、クリとモミ属が交互に使われていた可能性がある。これは材の強度あるいは材質などと関連性があるかもしれない。



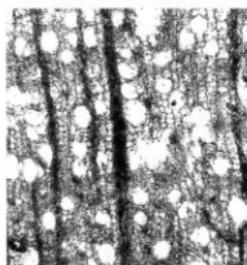
1.モミ属 (L-4) 横断面×92



2.同 放射断面×342



3.同 接線断面×200



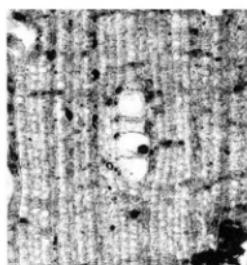
4.バラ科ナシ亜科 (L-1) 横断面×89



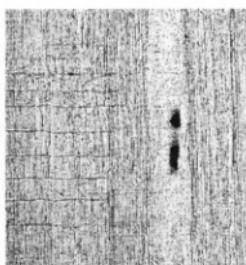
5.同 放射断面×128



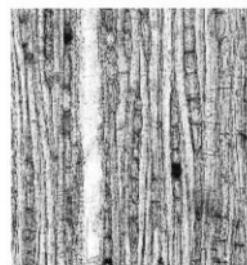
6.同 接線断面×160



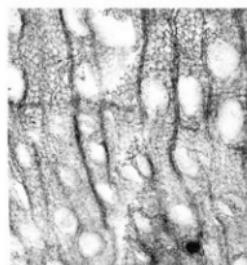
7.シラキ (L-3) 横断面×125



8.同 放射断面×100



9.同 接線断面×100



10.ヤナギ属 (L-10) 横断面×100



11.モモ (O-4) 核×1.7

図版 富沢遺跡第121次調査より出土した加工材及び大型植物化石

9 仙台市、富沢遺跡第121次調査の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 火山灰分析

1. はじめに

宮城県域とその周辺に分布する後期更新世に形成された地層や土壤には、蔵王、鳴子、肘折、十和田など東北地方に分布する火山のほか、北海道さらに中国地方や九州地方に分布する火山などから噴出したテフラ（tephra, 火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く挟在されている。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、それらとの層位関係を求めるこにより、地層の堆積年代や土壤の形成年代だけでなく、遺構や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。そこで仙台市富沢遺跡第121次調査区において検出された火山灰についても屈折率測定を行って、示標テフラとの同定を試みることになった。測定の対象となった試料は、発掘調査担当者により4層上部から採取されたものである。

2. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

4層上部から採取された試料について、日本列島とその周辺の示標テフラカタログ（町田・新井, 1992）の作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新井, 1972, 1993）によりテフラ粒子の屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。4層上部には、無色透明や白色の軽石型火山ガラスが多く含まれている。その最大径は、0.3mmである。また火山ガラスの屈折率（n）は、1.502-1.506である。重鉱物としては、斜方輝石や單斜輝石のほか、角閃石がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.708である。

3. 考察

4層上部に含まれるテフラ粒子は、その特徴を総合的に考慮すると915年に十和田火山から噴出したと考えられている十和田a火山灰（To-a, 大池ほか, 1966, 大池, 1972, 町田ほか, 1981）に由来する可能性がもっとも高いと考えられる。今回得られた火山ガラスの屈折率は、テフラ・カタログ（町田・新井, 1992）より若干高いが、これは噴出年代が新しいために地点によって水和の進行程度に違いがあり、標準試料が採取された十和田火山近傍より遠隔地で採取された今回の分析試料に含まれる火山ガラスの屈折率の方が高くなっていることによると考えられる（新井房夫群馬大学名誉教授談）。より高精度の同定のためには、エレクトロンプローブX線アナライザ（EPMA）による火山ガラスの主成分化学組成分析などを行うとよい。

4. 小結

富沢遺跡第121次調査の際に4層上部から採取された火山灰試料について、屈折率測定を行った。その結果、十和田a火山灰（To-a, 915年）に由来する可能性が高いテフラ粒子が多く検出された。

文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定 - テフロクロノロジーの基礎的研究、第四紀研究、11, p.254-269.
- 新井房夫 (1993) 溫度一定型屈折率測定法、日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2 - 研究対象別分析法」、p.138-149.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ、科学、51, p.562-569.
- 大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、11, p.232-233.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 (1966) 馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰
第四紀研究、5, p.29-35.

表1 富沢遺跡第121次調査に伴う屈折率測定結果

試料	軽石（火山ガラス）				重鉱物		
	量	色調	最大径	屈折率 (n)	組成	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n_2)
4層上部	+++	透明,白	0.3	1.502-1.506	opx, cpx, (ho)	1.706-1.708	-

屈折率測定は、温度一定型屈折率測定（新井、1972, 1993）による。

最大径の単位は、mm。

重鉱物の()は、量が少ないと示す。

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石。

II. プラント・オパール分析

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。ここでは、富沢遺跡第121次調査で検出された水田耕作層について、プラント・オパール分析から稻作の可能性について検討を行う。

2. 試料

試料は、上位より暗緑灰色粘土（2層、水田耕作土）、黒褐色粘土（3層、水田耕作土）、暗オリーブ灰色粘土（4層、水田耕作土）、暗緑灰色粘土（5層、水田耕作土）、灰オリーブ色泥炭質粘土（6層）、オリーブ黑色泥炭質粘土（7層）、黒色泥炭質粘土（8層）、暗オリーブ灰色泥炭質粘土（9層、水田耕作土）、黒褐色泥炭と黒褐色、暗オリーブ灰色、オリーブ黑色泥炭質粘土の互層（10層）の9点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）、2) 試料約1gに直徑約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（電子分折天秤により0.1mgの精度で秤量）、3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理、4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散、5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去、6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成、7) 検鏡・計数。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-3}g ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48およびクマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田耕作土とされた2層、3層、4層、5層および9層では、それぞれでイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層において稻作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層と5層ではプラン

ト・オパール密度がそれぞれ4,500個/g、3,300個/gと稲作跡の検証や探査を行う際の基準値である3,000個/gを超えている。このことから、両層については稲作である可能性が極めて高いと判断される。なお、3層、4層、9層ではプラント・オパール密度が1,600～2,000個/gとやや低い値である。これらの層で稲作が行われていたとするならば、1) 稲作の行われていた期間が短かった、2) 稲藁の大部分が水田の外へ持ち出されていた、3) 土層の堆積速度が速かった、4) 稲の生産性が低かった、などがあげられるがここで主な要因は不明である。

なお、8層でもイネのプラント・オパールが検出されたが密度は800個/gと低い。したがって、ここで検出されたプラント・オパールについては、他所から混入したものと考えられる。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）をみると、イネ以外では7層を除く各層でヨシ属が優勢であり、10層～8層および6層では極めて卓越している。また、2層ではクマザサ属型が卓越している。こうしたことから、10層～8層および6層の堆積時は調査地点一帯はヨシ属の多く生育する湿地であり、5層～2層にかけては湿地的な環境であったと推定される。また、2層では周辺にクマザサ属が多く生育していたと推定される。なお、各層とも周辺にはネザサ節が多くはないが生育しており、9層～6層、4層～2層ではススキ属も部分的にみられたと推定される。

6.まとめ

富沢遺跡第121次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、水田耕作土とされた2層、3層、4層、5層および9層では、すべてにおいてイネのプラント・オパールが検出されたことから、これらの層が稲作跡である可能性が分析的に認められた。とくに、2層と5層についてはその可能性が極めて高いと判断された。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の微動細胞壁酸体、富士竹塙植物園報告、第31号、p.70～83.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189～213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15～29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17、p.73～85.

表1 仙台市、富沢遺跡第121次調査のプラント・オバール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）	地点名 ＼土層	西壁									
		2	3	4	5	6	7	8	9	10	
イネ科	Gramineae (Grasses)										
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	45	20	16	33			6	18		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	20	20	10	13	49	6	70	60	93	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	5	5	5		15	17	35	6		
タケアキ科	Bambusoideae (Bamboo)										
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	5	50	37	27	59	6	47	36	13	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	197	20	47	93	89	17	41	72	7	
その他	Others	51	10	47	46	25	6	35	18	13	
未分類等	Unknown	242	285	304	411	148	407	528	422	393	
プラント・オバール総数		566	410	466	623	386	460	762	634	520	

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.34	0.59	0.46	0.97	0.00	0.00	0.17	0.53	0.00
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	1.28	1.26	0.66	0.84	3.12	0.37	4.44	3.81	5.89
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.06	0.06	0.06	0.00	0.18	0.22	0.44	0.07	0.00
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.02	0.24	0.18	0.13	0.28	0.03	0.23	0.17	0.06
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	1.48	0.15	0.35	0.70	0.67	0.13	0.31	0.54	0.05

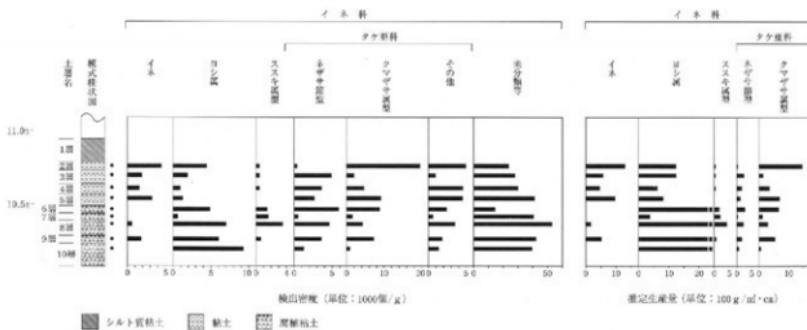


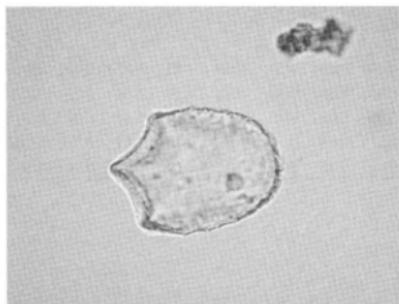
図1 富沢遺跡第121次調査におけるプラントオバール分析結果



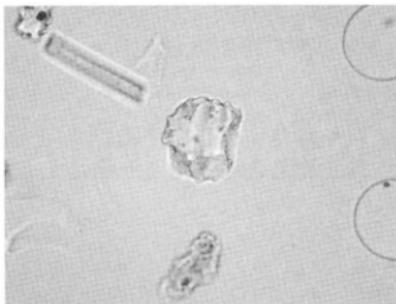
イネ



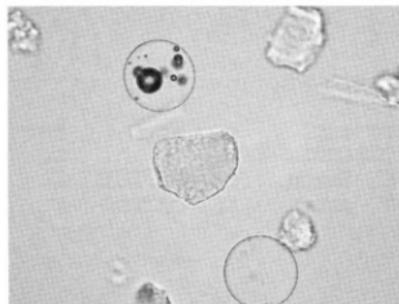
イネ



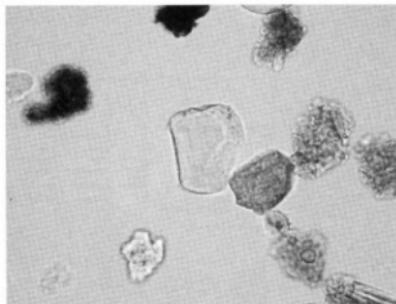
ヨシ属



ネガサ節型

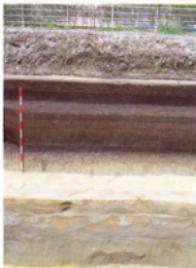


クマザサ属型



スキ属型

プラント・オバールの顕微鏡写真 ————— 50 μm



1 富沢121次 基本層序



2 富沢121次 基本層序部分拡大



3 富沢121次 9層水田跡全景（弥生？）



5 洞ノ口8次1区 基本層序



6 洞ノ口8次2区 基本層序部分拡大



4 富沢121次 5層木製品出土状況（古墳～平安）



7 郡山141次 基本層序



8 高田A2次 基本層序



1

2

3



4

5

6

- 1、6 小鶴城跡
2、3 洞ノ口遺跡
4 下ノ内浦遺跡
5、11 富沢館跡



9 北屋敷3次 基本層序



10 下ノ内浦6次 基本層序

11 出土遺物（中近世陶磁器）

報告書抄録

ふりがな 書名	こづるじょうあとはかはつくちょうさはうこくしょ 小鶴城跡ほか発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第261集						
編著者名	吉岡恭平・荒井 格・波部 紀・農村幸宏・吉田和正・村上秀樹						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL 022-214-8893・8894						
発行年月日	2002年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号				
小鶴城跡	宮城県仙台市 宮城野区新田3丁目35-1	04100	01194	38°16'40"	140°55'50"	2001.07.23-24 2001.08.28 2001.08.30	99m ² 共同住宅建設
洞門口遺跡第8次調査	宮城県仙台市 宮城野区洞門字御前SL-1地	04100	01372	38°18'10"	140°57'40"	2001.11.01 2001.11.27	300m ² 宅地造成
北屋敷遺跡第3次調査	宮城県仙台市 若林区下川内町47-7,13	04100	01220	38°15'	140°56'40"	2001.11.19 2001.11.26	73m ² 店舗・個人住宅付き 共同住宅建設
高田A遺跡第2次調査	宮城県仙台市 若林区上飯田3丁目448-1	04100	01256	38°12'40"	140°55'30"	2001.07.02 2001.07.13	115m ² 宅地造成
高田A遺跡第3次調査	宮城県仙台市 若林区上飯田3丁目448-20	04100	01256	38°12'40"	140°55'30"	2001.07.02 2001.07.03	21m ² 個人専用住宅建設
郡山遺跡第139次調査	宮城県仙台市 太白区郡山1丁目151-1	04100	01003	38°12'50"	140°53'50"	2001.05.28 2001.05.30	74m ² 変電施設建設
郡山遺跡第141次調査	宮城県仙台市 太白区郡山1丁目232-1	04100	01003	38°12'50"	140°53'50"	2001.07.30 2001.08.09	113m ² 事務施設建設
宮沢館跡	宮城県仙台市 太白区対岸字館32-1	04100	01246	38°12'40"	140°52'	2001.10.02 2001.10.04	63.5m ² 個人専用住宅建設
下内浦遺跡第6次調査	宮城県仙台市 太白区長町南4丁目32-6他	04100	01368	38°12'50"	140°52'30"	2001.06.04 2001.06.22	310m ² 共同住宅建設
陸奥国分寺跡第10次調査	宮城県仙台市 宮城野区宮代1丁目	04100	01020	38°15'	140°54'50"	2001.08.28 2001.11.28	397m ² 道路改築
富沢遺跡第121次調査	宮城県仙台市 太白区龍野3丁目223-7他	04100	01369	38°13'20"	140°52'30"	2001.06.12 2001.08.29	130m ² 共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小鶴城跡	城館跡	中世～近世?	溝跡・土坑	近世陶磁器	—		
	洞ノ口遺跡	水田跡	中世	水田跡・土坑 土師器・須恵器・中世陶器	—		
	北屋敷遺跡	屋敷跡	近世	溝跡・土坑	—		
	高田A遺跡	集落跡	古墳・平安	溝跡・土坑 土師器・須恵器	—		
	郡山遺跡	水田跡	弥生?	水田跡 石器	—		
	富沢館跡	城館跡	中世～近世?	溝跡 中世陶器	—		
	下内浦遺跡	集落跡	中世～近世?	ビット・土坑・溝跡 土師器・須恵器・輸入磁器	—		
	陸奥国分寺跡	寺院跡	古代	柱穴・溝跡・土坑 瓦・土師器・須恵器	—		
	富沢遺跡	水田跡	弥生～近世	水田跡 土師器・石製品・木製品	—		

仙台市文化財調査報告書第261集

小鶴城跡ほか

発掘調査報告書

2002年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区開発三丁目7-1
文化財課 022(214)8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市宮城野区若林7丁目114

TEL 231-2215
